

若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ

文献編

一九八二・三

東大阪市遺跡保護調査会

文献資料に見る考古遺物及び遺構 〔その1〕

中世考古学における方法論の大きな特徴は、文献資料が比較的豊富に存在し、その文献で歴史の大きな流れを語る事ができるため、調査で検出した遺構、遺物についてもその性格を比較的容易に決定できることであろう。我々が調査において検出した遺構・遺物を検討する場合、文献資料の占めるウェイトは大きいと言える。例えば、溝を検出した場合、当時の溝の呼称、使用目的を追求する際、あるいは遺物においても、土師器、瓦器などの呼び方、用途を追求する場合にも有効な手段であろう。今回の報告では、現在まで検出した遺構・遺物の性格を追求する一つの方法として、中世の文献資料の中で、我々が遺構及び遺物として認識しているものを選び出し、実際の遺構、遺物と対照させ、その名称、用途を説明することを目的としている。この場合、文献資料の選択方法が問題になるが、読み易さ及び理解という点を考慮した場合、とりあえず古典文学から当たるのが妥当かと思われる。さらに、文学におけるジャンルの選択の必要がある。これについては、今回の目的から遺物、遺構の名称が数多く記載されているものが有効であろう。そこで今回は、文学のジャンル中でも人々の生活をよく写しているとされる説話文学を選んで読んだ。説話は中世文学史上、最も特色ある文学ジャンルの一つとされ、数多くの説話集が伝えられている。それは仏教説話集と一般説話集の二つに大別される。説話の数としては、仏教説話が圧倒的に多いが、一般説話の中には、当時の庶民生活を活写しているものが少なくなく、今回の研究には資料として高い価値を有しているとすることができよう。今回使用した説話集は『宇治拾遺物語』と『古今著聞集』の二書である。『宇治拾遺物語』は鎌倉時代初期、建暦二年(一一二二)～承久三年(一一二二)ごろの成立とされている。編者は明らかでない。二百話余りの短篇説話を収めており、仏教説話あり、世俗説話ありで、量的には小さいものであるが、質的にはバラエティーに富んでおり、人々の生活もよく描かれている。『古今著聞集』は建長六年(一一五四)の成立、編者は橘成季であることが序文にみえる。収載の説話は三〇話にのぼるが、その内約三分の二は王朝時代の説話である点、今回の対象である中世とは年代的なズレがある。概して、説話は先行の文献や伝承に典拠を求めているため、説話集成立以前の事柄を写している場合が多い。このことは、今後の資料選択の上でも考えねばならないことである。また、できるだけ多くの文献資料に当たれることも今後の課題である。今回は上述の説話集2書に記載されている遺物・遺構関係の言葉を抜き出し、その索引を作成した。この名用語についての索引作成が、以後の研究の基本的な作業であると考えている。なお今回の報告は、遺構を中心にしたものである関係上、索引も建築物を中心としたものである。

建築物関係用語索引

凡例

I 出典

用語を抜き出すにあたって、次の各本を底本とした。

宇治拾遺物語：日本古典文学全集 28 小学館 昭和48年初版、昭和54年第8版

古今著聞集：日本古典文学大系 84 岩波書店 昭和41年初版、昭和54年第13版

II 項目

- 1 項目は始めにひらがなで表記し、次に漢字を（ ）に入れて表記した。但し、本文中でひらがなによる表記しかないものについては、漢字を付記しない。表記の仕方については、2 以下に従う。

- 2 項目のかな表記は、現代かなづかいにより、一部表記を改めた。漢字は旧字体を改め、新字体を用いた。

- 3 項目は、家屋及び家屋内の類と家屋の外回りを囲む塀、垣の類の二つに分類した。項目の排列は五十音順で、凡例 II・2 に従った。

- 4 語の読みが幾通りか考えられる項目（たとえば「門」など）については、本文中で漢字につけられたふりがなの読みを先に掲げ、「門」の場合は「かど」その他の読みを次に掲げた。

III 解説

解説は原則として、『日本国語大辞典』全20巻（小学館 昭和48年～51年）から該当する解説記事そのまま転載した。但し、利用の便を考え、次のような場合は任意で解説を補足した。

- 1 『日本国語大辞典』の解説中に「…」の略とあるものについては、その元の形の用語の解説をも掲げた。たとえば、「いずみ（泉）」の解説本文中③「いずみどの（泉殿）」の略とあり、これについて二番目の解説として、「いずみどの」の解説記事を掲げた。二つの異なる用語がいつしよになって、一つの用語を形成しているもの、たとえば「はしがくしのま（階隠の間）」、「ひがくしのま（日隠の間）」についても、その元になっている用語の解説記事を二番目の解説として掲げた。また、解説本文中に「…」に同じ「として」るものは、「」内の言葉の解説をも掲げた。

- 2 ある用語にその材質をさす言葉のついたもの、たとえば「柴の庵」については、排列は「し」に従い、参照事項を「↓いおり」という形で示した。また、「こじとみ」、「たてじとみ」のように、「しとみ」にそれ独自の性質をさす言葉のついたものについても同様に、排列はそれぞれの五十音順にし、相互に参照事項「↓……」をつけた。

- 3 「ながはし（長階）」の解説記事については、『日本国語大辞典』に「ながはし（長橋）」という項目しかなく、必ずしも適当とは思われないが、编者による伴断を避け、そのまま載せ、参照項目「↓はし」を示した。

目次

建物

ア行 切板

明障子 倉 ついたち障子

校倉 車宿 束柱 人屋 ひさし

雨だり 車寄 土戸 土屋 広廂 楼 廊

庵室 黒戸 土屋 土屋 檜皮 檜皮屋

井 桁 局 妻戸 妻戸口 風流棚

礎 格子 高欄 妻戸口 葺板 塀・垣

泉 こけらぶき 釣殿 天井 坊 大垣

板敷 小蔀 天井 戸 天井 坊 大垣

板間 木舞 戸 堂 堂舎 間木

板屋 サ行 堂 堂舎 間木

出居 下倉 堂 堂舎 間木

犬防 下棚 屏 殿居所 幕柱

後戸 菰 屏 殿居所 幕柱

内の出居 柴の庵 屏 殿居所 幕柱

梁 持仏堂 屏 殿居所 幕柱

馬屋 障子 長階 長階 水口

裏板 陣 長押 塗籠 棟門

縁 陣 布障子 塗籠 棟門

大床 寝殿 長押 塗籠 棟門

納殿 水門 軒 八行 母屋

小屋 透廊 軒 八行 母屋

力行 厨子 八行 母屋

回廊 簀子 階 階隠間 門戸

門 簀子敷 階 階隠間 門戸

壁 夕行 階 階の子 ヤ行

萱屋 台盤所 階 階の子 ヤ行

伽藍 高妻戸 柱 社 屋形

かわら 竹折戸 放出 社 屋形

階 榻 梁 張の戸 湯殿

狐戸 椽 張の戸 湯殿

欄干

廊

楼

楼門

ワ行

渡殿

塀・垣

ア行

大垣

力行

かいだて

垣

切懸

夕行

立部

ついがき

築地

八行

檜垣

マ行

籬

ませ

建物

ア行

あかりしょうじ (明障子) → しょうじ

宇治拾遺物語 P 213、L 4

古今著聞集 P 146、L 7・P 465、L 12・P 466、L 8・P 466、L 15・P 471、L 5・P 471、L 7・P 471

L 8・P 471、L 11

あかりしょうじ シヤウジ「明障子」名。明かりを取り入れやすいように、片面だけに白紙を張った障子。現在の紙障子のこと。あかりそうじ。《季・冬》*江談抄「先考以明障子立四面、其中曝」

涼家文書「山槐記」治承四年二月二日「北面西二ヶ間為襲御所、所謂夜御殿北庇也」略北

孫庇二間敷大文高麗四枚、立明障子」*宇治拾遺十五・九「広びさし一間あり、妻戸にあかりしや

うじたてたり」*井蛙抄十六「あかり障子をあけて入らむとせられけるを」*浮世草子・西鶴諸国

はなし四・三「あかりしやうじ二枚」【発音】アカリシヨージ【標ア】シヨ【京ア】シヨ【古辞書】文明・

明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

あぜくら (校倉)

宇治拾遺物語 P 275、L 12

あぜくら 【校倉】名。「あぜくら」とも。校倉造りの建物。*二十卷本和名抄一〇「倉廩 檄字附

略」釈名云倉七岡反甲倉、古不久良、校倉、阿世久良」*今昔二七・七「其の家の内に大(おほ)

きなるあぜ倉有りけり、片戸は倒れてなむ有りける」*色葉字類抄「反倉、アセクラ」*古本説話集

一六五「大きなあぜくらのあるを開けて、物取り出でさするほどに」*日葡辞書「Ajegura(アゼグ

ラ)」「語源説」アゼはアザの転。アザは雑(まじ)える義のアザフ(又)の語根。アザヘクラ(又倉)

の義から「碩鼠漫筆・類聚名物考・大言海」。(2)アゼは交の義で、木を打違えて造る意「箋注和名抄・

和訓栞」。(3)アゼはアハセ(為交)の急呼か「日本語源・賀茂百樹」。(4)アゼ(畦)に設けたクラ(神座)

の意から「万葉集叢攷・高崎正秀」。【発音】音史「中世は『あぜくら』とも。『標ア』【京ア】【古

辞書

あまだり (雨だり)

宇治拾遺物語 P 82、L 15

古今著聞集 P 398、L 13

あまだり 【雨垂】名。①「あまだれ(雨垂)①」に同じ。*小右記「永祚元年九月九日」挿書状立左杖

南御露」*園太曆「貞和二年正月一六日」あめこのままにふり候はば、あまだりのみつ、こんらう、

きやう殿のつちのまなどは、ながれ入候はんずる」*日葡辞書「Amadari(アマダリ)」*俳諧・紅

梅千句「九雪不凶(ふと)夢さます滝波のをと(安靜)あまだりやことの外なるよるの雨(可頼)」

②あまだれの落ちる所。あまおち。あまだれおち。*宇治拾遺「一・一七」あたらしき不動尊、しば

し雨だりにおはしませといひて、かきいできて、雨だりについ据ゆと思ひしに」【発音】標ア【古

辞書

あんじつ (庵室) → いおり

古今著聞集 P 87、L 16

あんじつ【庵室】**【名】**（「あんじつ」とも）木で造り屋根を草で葺（ふ）いた、小さな仮の家。僧侶や世捨て人の住居。転じて、主に尼僧の住まい。庵。いおり。

あんじち。あんや。*今昔一・二・三四「書写の山に移りて

三間の庵室を造りて住す。日夜に法花経を誦誦（とくじゆ）

するに」*平家一〇・維盛出家「其夜は滝口入道が庵室に

かへつて、よもすがら昔今の物がたりをぞし給ひける」*

日葡辞書「Anitno（アンジツラ）ムスブ」*浄瑠璃・当麻

中将姫一三「薄雲は只ひとり、あんじつにかけ入て」**【発音】**

〈音史〉近世まで『あんじつ』『あんじち』と濁音。現代は『あ

んじつ』『あんじつ』の両様。〈標ア〉**【古辞書】**

下学・伊京・天正・黒本・易林・書言

い（井）

宇治拾遺物語 P 357、L 10

古今著聞集 P 204、L 9・P 240、L 6・P 240、L 8・P 240、L 10・P 409、L 17

いる【井】**【名】**泉や流水から、水をくみとる所。はしり井。また、地を掘り下げて地下水をたくわえて

くみとる仕掛けのもの。*書紀神代下（水戸本訓）「門の前に、一の好井（しみつ）あり、井（井）の

上に百枝の杜（かつらの）樹有り」*万葉七・一一二八「あしびなす栄えし君が掘りし井（る）の石

井の水は飲めどあかぬかも（作者未詳）」*十卷本和名抄一「井 四声字苑云井（子）野反（和名爲）

鑿地而聚泉者也」*伊勢物語一三三「むかし田舎わたらひしける人の子どもゑるものに出でてあそ

びけるを」*枕一六八「井はほりかねの井。玉の井。走り井は逢坂なるがをかしきなり。山

の井、などさしもあさきためしになりはじめけん」*古本説話集一四七「異所よりは、地のでい、

龜の甲のやうに高ければ、井をほれども、水いでこず」**【語源説】**（I）キル（集）の語根。水の集まる所

の義（東雅・名言通・松屋筆記・和訓栞・大言海）。（2）ひとところ止まっていることが井で、人には

「居」、鳥なら「棲」、水には「井」の字を当てる。その井が筒井筒の意となった（豆の葉と太陽 柳田

国男）。キミツ（居水）の下略（日本語原学・林夔臣）。（3）ナ井（地居）の約。ナ井はニ井（土居）（言元

梯）。（4）イケ（池）の下略（和句解）。（5）ミツ（水）のミの転（和語私臆鈔）。（6）井桁（いげた）の形を文

字にした漢字「井」から（名語記）。（7）イツ（出）の下略（日本釈名）。**【発音】**（標ア）**【ア史】**「イー」

平安〇〇（京ア）イー**【古辞書】**和名・色葉・名義・和玉・文明・明応・天正・饅頭・書言

いおり（庵） → あんじつ

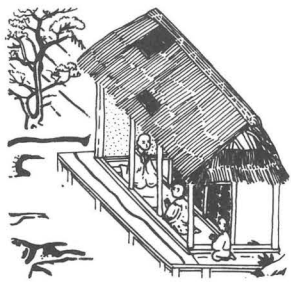
宇治拾遺物語 P 178、L 5・P 46、L 9・P 47、L 3・P 47、L 8

古今著聞集 P 258、L 16

いおり いほり【庵・菴・廬】**【名】**□草や木で屋根や壁を作った、小さな、粗末な仮小屋。いお。④農作業

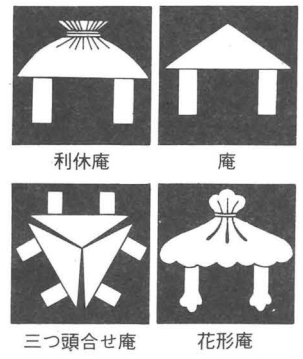
のため田畑のそばに作る小屋、葬儀のための臨時の小屋など。*万葉一〇・二三三五「秋田刈る

旅の廬入（いほり）に時雨（しぐれ）降りわが袖濡れぬほす人なしに（作者未詳）」*源氏「須磨」山が



庵室（一遍聖絵）

つはいほりにたけるしばしも言問(ことと)ひ来(こ)なん恋ふる里人」*和泉式部集上「秋の田の庵にふけるとまを荒みもりくる露のいやはねらるる」④旅行中に泊まるために作る粗末な小屋。旅の宿り。軍隊などの宿営。*書紀「神武即位前戊午年一〇月(北野本訓)「如何ぞ、久しく、一処(ひとところ)に居(ゐ)て以て制変(はかりこと)すること無(な)けむといひて、乃ち徒(す)てて、別(こと)処に営(イホリ)す」*万葉七・二二三八「高島の安曇(あど)白波はさわけどもわれは家思ふ五百人(いはり)かなしみ(古集)」*十卷本和名抄上「宮唐韻云宮八余傾反 日本紀私記云以保利(保)軍営也」⑤隠者、僧などの住む粗末な仮の家。あん。*源氏「若紫」おなじ柴(しば)のいはりなれど、すこし涼しき水の流れも御覽せざせんとせちに聞え給へば」*山家集上「散る花のいはりの上をふくならば風いるまじくめぐりかこはん」*波形本狂言・庵の梅「なふなふいづれも此あたりにござる尼御前(あまごぜ)の庵(イホリ)の梅が見事に咲たと申。いざ見物に参ふ」⑥小さな家、粗末な家。自分の家を謙遜していう。*枕詞「二頭中將のすずるなるそら言を」ただその奥に、炭櫃(すびつ)に消えたる炭のあるして、草のいはりをたれかたづねんと書きつけてとらせつれど」*源氏「松風」母君もいみじうあはれなり。年頃だに同じいはりにも住まず、かけ離れつれば、まして誰によりてかは、かけとどまらむ」*方丈記「二十(みそぢ)あまりにして、更にわが心と一の菴をむすぶ。これをありし住まひに並ぶるに十分が一なり」⑦⑧に似た形をしているもの。また、⑨の屋根をかたどったようなもの。⑩能楽の造物(つくりもの)の一つ。草庵になぞらえた四角形枠形のもの。とびらはつづくが、屋根がない。「安達原」梅枝」などの曲で用いる。⑪「いおりかんぱん(庵看板)」の略。*常磐津「三世相錦織文章(おその六三)上「新入(しんいり)の役者ぢや故、番付の肩の所へ庵(イホリ)に出て居りますわいの」⑫刀の背の棟の構造の一種。三角に作った形状が庵の屋根に似たことによる。⑬紋所の名。庵、三頭(みつがしら)合わせ庵、花形庵(はながたいおり)、利久庵などがある。[方言]かやぶき屋根の小屋。愛知県日間賀島007 語源説①イホはイへと同根。これを動詞化したイホルの名詞がイホリ(「万葉集講義 折口信夫」)。(2)古代には穴居したので、岩磐の類をイハホ、イハと呼び、家をイへ、イハ、イハロといった。イホ、イホリも、イハロ、イハホロの転じたもの(「東雅」)。(3)イヘヲリ(家居)の転(名言通・和訓栞)。(4)イホイリ(廬入)の略(類聚名物考・日本語原学・林夔臣)。(5)イは発語。ホリはホル(掘)から(櫃)のいた屋)。(6)庵の活用で、イホアリ(庵在)の約(日本語源・賀茂百樹)。(7)イヲリ(屋折)の義(紫門和語類集)。(8)発音(標ア)⑨(ア史)平安〇〇〇 室町●●〇(京ア)⑩(古辞書)和名・色葉・名義・和玉・文明・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言



宇治拾遺物語 P 419、L 2
いしずえ：ずえ【礎・礧・礧】(名) (「石据え」の意から) ①建造物の柱、壁などの下に土台石をすえること。また、その石。土台石。柱石。つみいし。根石(ねいし)。*十卷本和名抄上「柱礎 唐韻云礧八徒

年反都美以之一云以之須惠√柱礎比 礎∧音楚√柱下石也」*宇津保・楼上上「これは本いしずへのままか。しか侍り」*徒然草一二五「おのづからいしずへばかり残るもあれど」*五重塔(幸田露伴)二三「さて龍伏(イシズエ)は其月の生氣の方より右旋(みぎめぐ)りに次第据ゑ行き」②物事が成り立ち、または、安定しているための基礎となる大事なものの。また、その人。もとい。*浄瑠璃・伽羅先代萩六「出かしゃった出かしゃった、そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中、所存のほぞを堅めさす誠に国の礎(イシズエ)ぞや」*歌舞伎・韓人漢文手管始(唐人殺し)一「宝を取返すまでは、町人と成て、御辛抱がお家の石ずへ」*西洋道中膝栗毛(仮名垣魯文)四・総編本文読例「趣向は友人左燕子が航海の日記を礎(イシズエ)とせり」[発音]平安は「いしすゑ」と清音か。(標ア)①②③④(ア史)平安○○○○(京ア)① [古辞書]和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

いづみ (泉)

古今著聞集 P 502、L 14

いづみ いづみ【泉】一名 ①(出水の意)地中からわき出てる水。また、そのわき出る場所。(季

夏) * 書紀「持統七年二月(北野本訓)「沙門法員、善往、真義等を遣りて、試みに近江の益須郡の

醴泉(こさけのイツミ)を飲ましめたまふ」* 宇津保「俊蔭」前よりいづみ出でくる、掘り改めて、水

流れ面白くなりぬ」* 色葉字類抄「泉イツミ濫同」* 徒然草一三七「泉には手あしさしひたして、

雪にはおりたちて跡つけなど」* 俳諧・都曲「結ぶより早(はや)齒にひびく泉かな(芭蕉)」②(1

を比喩的に用いて)ものごとの出てくるもと。源泉。* くれの廿八日(内田魯庵)五「人生の苦限を

救ふのは愛(ラヴ)の霊泉(イズミ)だと初めて気が附いた」* 馬上の友(国木田独步)「僕は彼に知

識の泉(イツミ)を貸したばかりでなく」③「いづみどの(泉殿)の略。* 讃岐典侍「下」堀河のいづ

み、人々見んとありしを」④(死の世界を「黄泉(こうせん)」というところから)死者の行く世界。

よみのくに。黄泉。* 車屋本謡曲・松山鏡「往事渺茫としてすべて夢ににたり。旧遊零落して半(な

かば)泉(イズミ)に帰す」[方言]井戸。淡路島 039 徳島県 803 香川県 050 愛媛県宇摩郡 038 [発音] (標

ア)①(ア史)平安○○○○ 室町●●○○(京ア)④ [古辞書]色葉・名義・和玉・文明・明応・天正・饅頭・

黒本・易林・書言

いづみどのの いづみ【泉殿】一名 ①平安、鎌倉時代における泉のある

邸宅。* 為房卿記「寛治四年六月六日「今夕上皇御幸于法勝寺泉殿」

②邸宅内の泉の出る所に建てられた建物。泉廊。泉の屋。* 宇津保

楼上上「こなたかなたの人は、いづみどのに出でて聞く」* 太平記

一六・執事兄弟奢修事「棟門唐門四方にあげ、釣殿、渡殿、泉(イツ

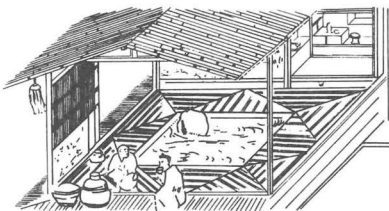
ミ)殿、棟梁高く造り双て奇麗の壮観を逞(たくまし)くせり」[発音]

(標ア)① [古辞書]書言

いたじき (板敷)

宇治拾遺物語 P 157、L 10・P 179、L 15・P 180、L 12・P 180、L 13・P 430、L 5・P 489、L 10

古今著聞集 P 50、L 9・P 216、L 11・P 327、L 16・P 337、L 13・P 341、L 5



泉殿①(祭礼草紙)

いだじき【板敷】〔名〕①床を板張りにすること。また、そのような床あるいは、床が板張りで、畳のない所。板の間。*尊勝院文書「天平勝宝七年五月三日・越前国使等解(寧楽遺文)」「草葦板敷東屋一間」*栄花嶺の月「やがてその夜三条院に帰らせ給て、西の廊、渡殿などのいたじきおろして」*徒然草「二八」諒闇の年ばかり、哀なる事はあらじ。倚廬(いろ)の御所のさまなど、板敷をさげ、あの御簾をかけて」*俳諧「猿蓑」五「なに故ぞ粥すするにも涙ぐみ(去来) 御留主となれば広き板敷(凡兆)」*天鷲絨(石川啄木)四「お定はすぐ起きて、寝室にしてある四畳半許りの板敷を出た」②建物の外側にある、板張りの縁。板(いた)。*十卷本和名抄上三「竇板敷附 蔭切韻云竇八音責 功程式板敷 簀子 和名須乃古」床上藉竹也」*伊勢物語四「あばらなるいたじきに月のかたぶくまでふせりて」*蜻蛉上「安和元年(頼(ながえ)をいたじきにひきかけてたてたり」*枕上三三・清涼殿の丑寅のすみの「うへのこなたにおはしませば、戸口の前なる細きいたじきにみ給ひて」

*平家上二・小教訓「入道みづからいたじき高らかにふみならし、大納言のおはしけるうしろの障子をさとあけられたり」③歌舞伎で舞台をいう。板(いた)。④舞台の上で、板の間に見せるために敷く布。白布の表面を特に板を並べたように彩色してあるもの。【発音】(なまり)イダジゲ【津軽ことば】(標ア)①(京ア)②【古辞書】色葉・文明・饅頭・黒本・易林・書言

いたま(板間)

宇治拾遺物語 P 119、L 15

いたま【板間】〔名〕①板屋根の葺(ふ)き板などの透き間や裂け目。*古今雑体・一〇〇二「わが宿のしのお草生ふる いたまあらみ(紀貫之)」*源氏一「手習」山のはに入るまで月をながめ見んねやの板まもしるしありやと」*平家上三・少将都帰「荒たる宿のならひとて、ふるき軒の板間より、もる月影ぞくまもなき」*日葡辞書「Iama(イタマ)(訳)板の割れ目とか裂け目」②床を板敷きにしてある所。板の間。*滑稽本「七偏人上」上「足を爪だてちよこちよこ縁の板間(イタマ)を歩行(あるき)ながら」*訂正増補雪中梅(末広鉄腸)下三「今入浴を畢(をは)りしと見へ、板間(イタマ)にて一人(ひと)りは湿(ぬ)れ手拭にて体を拭き」*満韓ところどころ(夏目漱石)一九「応接間の入口は低い板間(イタマ)で、突当りの高い所に蒲団が敷いてある」【発音】(なまり)イタバ【福島】イタバ(岩手)エダバ【山形小国】(標ア)①②

いたや(板屋)

宇治拾遺物語 P 424、L 14

いたや【板屋・板家】〔名〕①板で葺いた屋根。板葺き屋根。*枕上二五六・さわがしきもこの「いた屋の上にてからすの齋(さい)の生飯(さば)食ふ」*更級日記「荒れたるいたやのひまより月の洩り来て」*暁台句集「秋」椎の木の板屋を走る夜寒哉」②屋根を板で葺いた家。板葺きの家。*統日本紀「神龜元年」一月甲子「其板屋草舎、中古遺制、難(が)営(えい)易(えい)破(は)」*宇津保俊隆「檜皮の大殿五、廊、渡殿、さるべきあてあての板屋どもなど、有るべきかぎりにて」*源氏夕顔「いたやのかたはらに堂建てて行へる尼の住居いとあはれなり」*平家上八・大宰府落「讃岐の八島にかたのやうなるいた屋の内裏や御所をぞつくらせける」③能楽の作物(つくりもの)の一つ。六尺(約一・八尺)と三尺(約〇・九尺)の家台に、折板(へぎいた)で一部を残して屋根を葺いたもの。「雨月(うげつ)」に用

いる。④江戸時代に、板を販売した商家。また、その業者。

⑤「いたやかえで(板屋楓)」に同じ。*千曲川のスケッチ

〈島崎藤村〉一〇・山の上へ「樞は人力車の輪を取除して、それに『いたや』の堅い木片で造った樞を代用したやうなものだ」⑥植物「はうちわかえで(羽団扇楓)」の異名。⑦「いたやがい(板屋貝)」の略。[発音(標ア)㊦㊦(ア史)江戸●●○

〈京ア〉⑧

いでい・いでい(出居)

宇治拾遺物語 P 101、L 3・P 208、L 8・P 211、L 11・P 314、L 14・P 469、L 12

古今著聞集 P 252、L 13

いでい・いゝ[出居]「名」①(家の中の外に近い方に)出てすわること。出ていること。枕一八七職の御曹子におはします頃西の廂にて「昼つ方、縁に人々いであるどしたるに」*源氏「薄雲」例は、ことに端近なるいであるどもせぬを」②寢殿造りに設けた居間兼来客接待用の部屋。多くは二棟廊に設けられる。出居殿(いでいどの)。出居(いでい)の座。のちには多く「いでい」と読み、座敷の意。*宇津保・菊の宴「母北の方、袖君御簾(みす)をあげていであるの簀子(すのこ)にみたちなど居て」*宇治拾遺「二五」かんの君、出るにまらう人三人ばかり来て、あるじせんとて、地火炉に火おこしなどして」③朝廷で賭弓(のりゆみ)や相撲(すまい)などの儀式のときに設ける座。出居(いでい)の座。またその座についてことを行なう人。*蜻蛉下・天延元年「二月十五日に、院の小弓はじまりて、いであるなどのしる」*左経記寛仁元年「〇月五日「公卿出居的付等、賜衝重」④出入り口。滝沢馬琴の特殊用語。*読本・椿説弓張月「続三八回「毛国鼎は出居(イデキ)のかたに跪(ひざまづ)きてつくづくと見入れたるに」[発音(標ア)㊦]

いでい・いゝ[出居]「名」①寢殿造りに設けられた居間兼来客接待用の部屋。多くは二棟廊に設けられる。

のちには座敷の意。出居の座。いでい。*源氏「東屋」客人の御でい、さぶらひと、しつらひ騒げば」

*古本説話集「一九」であるの方を、め、のぞきてみれば」*名語記「五」家の客殿をである、如何。答、であるは出居也」*義経記「二」伊勢三郎義経の臣下にはじめて成る事「わで身もでのの部上げて、燈台二所に立てて腹巻取つて側に置き」*根園本節用集「出居」デイ「日本俗座敷 又作亭居 又作出屋」

*男重宝記(元禄六年)「五・二」近江ことばに我といふ事をうらといひ(略)さしきをでいといふ」

②朝廷で賭弓(のりゆみ)や相撲(すまい)などの儀式のときに設ける座。出居の座。また、その座についてことを行なう人。いでい。[方言]①客間。青森県南部地方118 岩手県九戸郡122 常陸²³

茨城県201 群馬県利根郡217 埼玉県北足立郡044 千葉県050 静岡県周智郡気多044 岐阜県大野郡

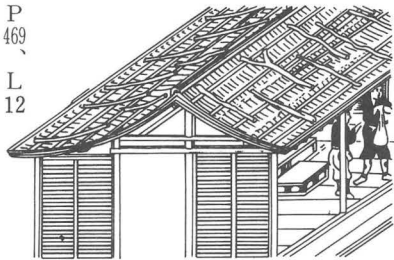
539 愛知県愛知郡569 三重県志摩郡003 奈良県吉野郡大塔671 兵庫県赤穂郡矢野049 広島県高田

郡755 宮崎県西臼杵郡椎葉964 ②座敷。盛岡¹³ 宮城県本吉郡大島009 福島県南会津郡伊北180

石川県河北郡050 茨城県201 栃木県安蘇郡213 群馬県039 埼玉県秩父036 千葉県安房郡275 伊豆

大島304 伊豆・八丈島¹³⁵ 新潟県424 山梨県050 長野県523 静岡県富士郡039 岐阜県恵那郡548

愛知県北設楽郡050 三重県度会郡610 中国⁶² 熊本県球磨郡神瀬044 (で)山形県最上050 富山県



板屋②(春日権験記絵)

東礪波郡 430 岐阜県大野郡白川村山家 539 滋賀県滋賀郡石山 618 ③奥の間。奥座敷。青森県南部
地方・宮城県北部 110 仙台の田舎 116 福島県中部 173 茨城県 050 群馬県 226 埼玉県 246 千葉県 257
東京都八王子 279 神奈川県 282 富山県礪波 436 山梨県南巨摩郡 510 長野県北安曇郡小谷 514 岐阜
県吉城郡 538 静岡県安倍郡 552 愛知県北設楽郡 569 兵庫県佐用郡 650 岡山県苫田郡 731 香川県 818
④表座敷。静岡県周智郡気多 044 兵庫県赤穂郡矢野 049 (で)奈良県宇陀郡 666 ⑤座敷の次の間。
下座敷。新潟県東蒲原郡東川 044 長野県上伊那郡三義 514 滋賀県滋賀郡仰木 618 奈良県吉野郡十
津川村迫 674 ⑥離れ座敷。はなれ。群馬県勢多郡 221 ⑦家の入口の間。滋賀県 618 (れい)和歌山県
日高郡 682 ⑧ひさしの間。石川県鹿島郡 447 ⑨勝手。台所。房総 126 長野県下伊那郡 533 三重県
三重郡 607 滋賀県蒲生郡 618 ⑩居間。茶の間。青森県南部地方 119 新潟県西蒲原郡 402 宮城県東
白杵郡椎葉村 960 ⑪戸だななどのある納戸のような所。千葉県東葛飾郡馬橋村幸谷 005 ⑫しゅうと
め夫婦の寢室。静岡県賀茂郡南崎 009 ⑬子どもを連れて母親の寝る所。奈良県吉野郡天川 671
〔語源〕説客の応対に出ている間の意(日本釈名筆の御霊・明治大正史・柳田国男・綜合日本民俗語彙)
〔発音〕(なまり)デ(岩手・飛驒)デエ・デヤ(岩手)デー(茨城)デーへ(愛知)デコ(青森)デン(山形)レイ
〔南伊勢〕〔古辞書〕文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・書言

いぬふせぎ (犬防)

宇治拾遺物語 P 369、L 4

いぬふせぎ 【犬防】〔名〕(「いぬぶせき」とも) ①仏壇の前に立てる低い格子。寺院の内陣と外陣との境界を示す、すかしの粗い柵。いぬよけ。*枕一二〇・正月に寺にこもりたるは「いぬぶせぎのうち見いたる心ちぞ、いみじうたふとく」 *文明本節用集「檻イヌフセギ 犬防也」 *実隆公記「大永四年一月五日「番匠四人・をか引一人、庭者令掘土、犬防事等申付之」 *天正本節用集「檻イヌフセキ」 ②殿社などの出入口の前に設置する駒寄(こまよせ)。〔方言〕雨戸。板戸。愛媛

県弓削島 827

大三島 834

〔発音〕イヌフセギ

(標ア)㊦

〔古辞書〕文明・天正・易林・書言

うしろご (後戸)

宇治拾遺物語 P 290、L 10

古今著聞集 P 94、L 13・P 95、L 3・P 433、L 7・P 465、L 14

うしろご 【後戸】〔名〕後ろにある戸。後方の出入口。特に、仏殿の須彌壇(しゅみだん)の後方にある戸。本堂の後ろ側にある戸口で、裏堂、後堂の出入口。*宇治拾遺「八・五」かの会の講師、此ころまでも、中間に高座よりおりて、後戸よりかい消つやうにしていること」 *古今著聞集「二・五八「後戸の坤(ひつじさる)の角より北へ第四の間に、以外(もつてのほか)黒き山ありけり」

〔発音〕(標ア)㊦

うちのでい (内の出居) → いでい・いでい

宇治拾遺物語 P 469、L 7

うつばり (梁)

宇治拾遺物語 P 489、L 9

うつばり 【梁】〔名〕(「うつはり」とも) ①家屋や橋などの骨組みの一つ。柱と柱の上に渡し、棟の



梁①

重みを受けて屋根を支えるもの。横木。うちばり。梁(はり)。*書紀仁徳元年正月(前田本訓)「即ち宮垣(みかき)家屋(おほと)の(聖)うはぬり(せす)柵(はへき)梁(ウツハリ)柱(はしら)楹(うだち)藻(えがき)かざ(らす)」*新訳華嚴經音義私記「橋梁 上波之、下宇都波利(ウツハリ)」*古本説話集「四七」中の間(ま)の、うつはりの上に上げすぐして」*日葡辞書「Vieuhari(ウツバリ)」②(①から比喩的に)ある組織を支える中心的な存在。また、そのような人。棟梁(とりのりょう)。*書紀推古三年五月(岩崎本訓)

「此の両(ふたり)の僧、仏教(ほとけ)のみ(のり)を弘演(ひろめ)て、並に三宝の棟梁(むねウツハリ)と為(なる)」*大慈恩寺三藏法師伝承徳三年点一〇「朕が国の内に装法師一人を失ひつ、謂ふ可し、釈衆の梁(ウツハリ)摧けぬ、四生導無し」と」語源説(1)ウチバリ(内張)の転(名語記・桑家漢語抄所引秘授抄・和句解・日本釈名・東雅・万葉集類林・家屋雑考・大言海)。(2)ウツハリ(全張)の義(名言通・和訓栞)。(3)ウツハリ(空張)の義(言元梯)。ウツハリギ(空張木)の下略(日本語原学・林麤臣)「発音(音史)平安頃まで『うつはり』と清音、以後『うつぱり』か。(標ア)①(ア史)平安●●●(京ア)①(古辞書)字鏡・和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

うまや(馬屋・厩)

宇治拾遺物語 P 198、L 10

古今著聞集 P 270、L 7・P 423、L 10

うまや【厩馬屋】(名)馬を飼つておく小屋。馬小屋。摂政・関白家などでは厩司(うまやつかさ)として別当・預(あずかり)、家主、舎人などを置き管理した。*万葉一〇・四四二九宇麻夜(ウマヤ)なる繩絶つ駒のおくるがへ妹がいひしを置きてかなしも(防人) *十卷本和名抄一三「厩 四声字苑云八音救上声之重无万夜(牛馬舎也) *平家一四・競「仲綱といふかなやきをして、むまやに立てられけり」【発音】ウマヤ(標ア)①(京ア)②【古辞書】和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

うらいた(裏板)

宇治拾遺物語 P 436、L 3

古今著聞集 P 474、L 11・P 474、L 14

うらいた【裏板】(名)①物の裏側に張つた板の総称。*俳諧芭蕉庵小文庫「木刀の音きこへたる居あひ抜(芭蕉) 二階はしごのうすき裏板(沓水)」②屋根裏に張りつけた板。天井裏板、支輪裏板など。*大鏡一・時平「工(たくみ)どもうらいたどもをいとうるはしくかなかきて」*古今著聞集一七・六一「檜皮(ひはだ)と裏板とのあはひに」*家屋雑考一「今時屋根裏を覆ふ板を、天井とも、また裏板ともいへど略(裏板とは)屋根形(やねなり)に板をはりて、棧(たか)を打つをいふなり」③「うちいた(打板)④」に同じか。*運歩色葉「裏板 ウライタ 公方様御的の庭の滑之時敷之物也」④盗んだ品を隠すことをいう、盗人仲間の隠語。【隠語輯覧】【方言】天井。岩手県 039 宮城県 143 山形県 166 福島県「鼠うらいたあるつて」174 茨城県 201 栃木県塩谷郡「うらいたの節穴数える

病人はもう長いことない」209 千葉県258 〔発音〕〔標ア〕① 古辞書易林

うちいた【打板】〔名〕①廊下と廊下の間に橋のように渡してある取りはずしのできる歩み板。打橋。

* 家屋雑考上「打板とて、船の歩板(あゆみいた)の如き物をも用ふる事あり」②牛車(ぎつしゃ)

に乗り降りするときに車寄(くるまよせ)の板敷から車に渡す板。③鷹匠が鷹のふんを受けるのに

用いた板。円形で、黒塗、薄いへりがある。④地上にすわるときに敷く方形の厚板。打板の座。*

続古事談上「小庭にうちいたをしきて火をおこす」*伊呂波字類抄「打板ウチイタ 結政官外記有」

打板」⑤陣中で敷皮のかわりに用いる板。裏に脚が付いている。*義経記上「衣河合戦の事」弁

慶其の日の装束には(略)大薙刀(なぎなた)の真中にぎり、うちいたの上に立ちけり」*佐竹宗

三聞書「打板の長さ広き敷皮にしたがひてすべきなり。足は板をゑりて、脇よりさすべき也。三所

にあるべし」〔発音〕〔標ア〕①

えん(縁)

宇治拾遺物語 P 76、L 6・P 235、L 14・P 494、L 4

古今著聞集 P 103、L 15・P 323、L 8・P 393、L 10・P 450、L 13・P 467、L 16・P 498、L 17

えん【縁】〔名〕①二つ以上のものが寄りついてかわりを持つ作用を表わす。②仏語。③広義には

結果を引き起こす因のこと。狭義には結果を引き起こす直接の内的な原因である因に対し、それ

を外から助ける間接の原因をいう。*三教指帰上「重輜輕走、抑亦油縁」*観智院本三宝絵上

「縁を待ちて形を顕し給ふ事、空の月の水に浮かぶが如し」*海道記花京の老母「最後の命に遇

ふ事は先世の縁なれば」*東海夜話下「因ありと雖も、縁なきときは則ち果を得ざるなり」*大

乘義章上二本「縁者由藉之義。縁別不同。故分爲四。一者因縁。二者次第縁。三者縁縁。四者増上縁」

②心が外の事物に向かつて行なうはたらきかけ。攀縁(はんえん)。*袋草紙上「縁は物を聞きも

し、見もする心也」③物事との結びつき。関係。縁故。身より。*能因本枕上「いとをしげなき

事」速きありきする人の、つぎつぎえんたづねて、文得んといはずれば」*源氏上宿木「宮の御方に、

えんを尋ねつつ参り集まりて」*方丈記「その後、縁欠けて身おとろへ、しのぶかたがたしげかり

しかど」④親子、夫婦、主従など、人と人との結びつき。つづきあい。あいだがら。*平家上「少将

乞請「あはれ、人の子をばもつまじかりける物かな。我子の縁にむすばほれざらむには、是ほど心

をばくだかじ物を」*天草本伊曾保一「ソボの生涯の事」ソナタトワレワ Yon(エン) コソツキ

ツラウ、イマヨリシテワラットトモ タノミマラスマイ」④関係を持つきっかけ。端緒。機会。よ

りつき。*黄表紙・敵討義女英上「さてさて不思議の御ゑんでお心やすくいたした」*滑稽本・浮

世風呂上「上」御縁(ごエン)がなくてどうも御奉公の口がはづれます」⑤(「縁語」の略)「えん(縁

の詞(ことば)に同じ。*和歌肝要「歌をばやく詠まむ故実には、題につきて縁をいそぎ求めて、

胸腰すそに据ゑよからむをさきとして、中をも上をもすそをものくりておくべし」⑥(縁とも)物

事のまわり、周辺を表わす。⑦物事のへり。ふち。端。「外縁」「周縁」⑧家の外側の板敷きの部分。

⑨寝殿造りで、母屋(もや)の廂(ひさし)の外側や渡殿に張り渡された板敷きの部分。*竹取「この

皇子(みこ)(略)えんにはひ上(のぼ)り給ひぬ」*枕上「四・淑景舎、東宮に「渡殿はほそきえんな

れば、こなたのえんに褥(しとね)さし出だしたり」*今昔上「九・僧、人を呼べば、若き僧出で

来たりぬ。老いたる僧、延(えん)に立ちていはく」②座敷の外側に作り付けた細長い板敷き。縁側。
*俳諧「続猿蓑」夏「涼しさや椽より足をぶらさげる(支考)」*随筆「耳袋」五「雨を凌(しの)ぎて元
寿が椽に腰を掛け雨やみを待ちけるが」*歌舞伎「韓人漢文手管始」唐人殺し」一「二重舞台にて
奥座敷、中庭の体。椽の上に丹平、高尾を後(うしろ)より抱(だ)きしめ)、酒飲でいる」③(縁
側に代用される台の意で)縁台。*俳諧「去来抄」先師評「咲花にかき出す椽のかたぶきて(芭蕉)」
【補注】寝殿造りで廂の間をとりまいてある部分のうち、板を横に並べて張り渡した板敷きを「簀子
(すのこ)」といい、板を縦に並べて張り渡したものを「縁」または「縁側」と呼ぶとする説があつて、
おおむね東、南、西側は簀子(すのこ)で、北側に縁を用いていたようである。後世の建造物で「縁」
というのは、ほぼ昔の簀子にあたる。【発音】(標ア)㊦(ア史)江戸●○(京ア)㊦は㊦、㊦は㊦

おおゆか(大床)

古今著聞集 P 92、L 17・P 44、L 10

おおゆか おほ：【大床】一名①建物の縁(えん)。中世神社建築で用いられた語で、浜床に対する。*
平治下・頼朝遠流の事「君御浄衣にて、八幡へ御参り候ひて、大床にまします」*吾妻鏡「建長四
年五月一日「於御膳者、可備大床之由、相州被計申之」*曾我物語「四・鎌倉殿箱根御参詣
の事」神前には禰宜(ねぎ)・神主、幣帛(へいさく)を大ゆかに捧げ、別当・社僧は経の紐を玉の鬘
解き」②書院造りなどで広縁(ひろえん)をいう。*室町殿屋形私考「会所主殿等前は広縁也。大
床と云也。其外に落縁あり。広縁の事を大床と云ふなり」*家屋雑考「四「大床は広廂の別称なれ
ども、武士の家居にては、広廂といはず。大床とかける事ども多し」【発音】(ア史)江戸●●○(京
ア)オーユカ ㊦【古辞書】易林・書言

おさめどの(納殿)

宇治拾遺物語 P 25、L 1

おさめどの おさめ：【納殿】一名①金銀、調度、衣服などの貴重品を納めておく所。*宇津保「藤原の
君」おさめ殿あけて、よきくだ物・からものあけていだす」*源氏「須磨」それよりほかのみくらま
ち、おさめどのなどいふ事まで少納言をはかばかしくものに見置き給へれば」*吾妻鏡「文治四年
七月一〇日「若公八万寿公・七歳」始令着御甲之給。(略)親家給御物具御馬、入御廐納殿等」
②宮中で累代の御物などを納めておく所。宜陽殿(ぎやうでん)内にあったという。*九曆「逸文」
承平五年七月二九日「先例相撲後日、王卿及醉、召内藏御服若納殿唐綾給主卿」*西宮記「
八・所々事」納殿「累代御物在宜陽殿」、恒例御物納藏人所綾綺殿、紙御屏風納仁寿殿、以藏人
雑色「為預」*源氏「桐壺」御袴著(はかまぎ)の事(略)おさめ殿の物を尽くして、いみじうせさせ
給ふ」③「おさめどのあずかり(納殿預)」に同じ。*栄花「三〇・鶴の林」納殿まさのりが許(もと)
に、使ひ残させ給へるつやつや絹五六千疋、例の絹万疋」

おや(小屋)

古今著聞集 P 59、L 17

おや を：【小家・小屋】一名「小さな家。こや。*古事記「中歌謡」葦原のしけしき哀夜(ヲヤ)に菅

(すがたたみ) いや清(さや)敷きて 我が二人寝し」 *万葉一・二八二五「玉敷ける家も何せむ
八重葎(やへむぐら)おほへる小屋(を)や」も妹と居りてば(作者未詳)」

力行

かいろう(回廊)

宇治拾遺物語 P 290、L 7

かいろう(クワイラウ)「回廊・廻廊」[名] 長くて折れ曲がっている

廊下。建物の回りをとりまいている長い廊下。 *大鏡一・
実頼二「三間四面の御堂たてられて、廻廊はみな供僧の房にせ
られたり」 *梁塵秘抄口伝集一〇「宝殿の様、廻廊長く続
きたるに、潮さしては廻廊の下まで水湛へ」 *平家一・大
塔建立「社々を作りかへ、百八十間の廻廊をぞ造られける」。

*杜甫 涪城县香積寺官閣詩「小院回廊春寂寂、沿甍飛鷺晚
悠悠」 [笈首]カイロー(標ア)①② (京ア)① [古辞書]下学・文

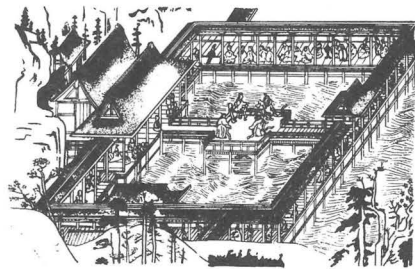
明・伊京・明心・天正・饅頭・黒本・易林・書言

かど・もん(門)

宇治拾遺物語 P 241、L 11・P 241、L 12・P 285、L 3・P 285、L 6・P 285、L 11・P 346、L 13・P
347、L 3・P 347、L 5・P 347、L 6・P 361、L 6・P 440、L 15・P 442、L 1・P 504、L 12・P 507、
L 13・

古今著聞集 P 120、L 6・P 274、L 9・P 274、L 12・P 466、L 14

かど【門】[名] ①家の周囲に巡らした、かこいの出入口。また、家の出入口。もん。 *古事記下・歌謡
「真木栄(さ)く 檜の御加度(カド)」 *伊勢物語五「かどよりもえ入らで、童へのふみあけたる築
地(ついひぢ)のくづれより通ひけり」 *十卷本和名抄一三「門 四声字苑云門(加度)所(以)通(出
入)也」 ②門の前。また、門に近い庭。門のあたり。門の付近。 *万葉一七・三九七八「可度(カド)に
たち 夕占(ゆふけ)問(ひ)つつ 吾(あ)を待つと(大伴家持)」 *古今秋上二〇八「わがかどにいなお
ほせどりのなくなべにけき吹く風にかりはきにけり(よみ人しらず)」 *平中一三「常に、この家
のかどよりぞ歩きける」 *新古今一冬・六〇六「我が門の刈田のねやにふす鳴(しぎ)の床あらはな
る冬の夜の月(殷富門院大輔)」 ③家。家屋。宅。屋敷内。 *平家一・小教訓「積善の家に余慶あり、
積悪の門に余殃とどまるところ承はれ」 *虎寛本狂言二「人袴「悴が御門を存じませぬに依て、御
門外迄付て参りました所に」 ④一族。一門。 *続日本紀「天平宝字元年七月二日・宣命「国の法、已
むこと得ず成りなむ。己が家家、己が門門、祖の名失はず、勤め仕へ奉れ」 *紫式部日記「寛弘五
年一〇月一六日「藤原ながら、かどわかれたるは、列にも立ちさりけり」 *仮名草子・東海道名所記
「三門(カド)合(こそ)りて縲(こ)るいせつ)のはぢをうけ、生涯の難をまねきけるこそ不便なれ」
⑤譜代の下人。一般に門屋または門の者といい、地方によって名子(なご)、被官、家来、家抱(けほ
う)などという。大部分は親方の屋敷内の小屋に住み、形式的には一家を形成しているが、親方へ
の隷属性の強いものが多かった。門(かど)の者。 *佐久郡櫻井村家改帳(信州)「延宝三年二「高式



回廊(一遍聖絵)

拾八石五斗四升 吉右衛門 門 彌五郎 門 吉藏 門 三之助 右吉右衛門屋敷内に居住仕候」⑥薩摩藩で、小農民の組合をいう。[方言]①家の前の空地。前庭。庭。新潟県中部418 富山県西礪波郡南谷437 長野県南部050 静岡県榛原郡566 岐阜県042 愛知県584 三重県度会郡610 滋賀県彦根619 京都府竹野郡626 大阪府泉北郡644 奈良県669 和歌山県675 兵庫県赤穂郡049 鳥取県倉吉041 島根県那賀郡723 岡山県741 広島県701 山口県771 徳島県809 愛媛県827 高知県幡多郡851 対馬919 熊本県南関947 鹿児島県種子島987 ②便所。福島県会津173 新潟県北魚沼郡050 ③戸外。そと。石川県江沼郡河南456 福井県458・兵庫647 淡路島039 奈良県榛原郡664 和歌山県日高郡041 岡山県御津郡743 徳島県805 ④家への入口。屋敷の外。群馬県233 ⑤他家の畑と境を接している区域内の田。高知県土佐郡土佐山846 ⑥表の戸。但馬039 ⑦使用人に財産を分けて一戸を構えさせたもの。長野県北安曇郡小谷519 ⑧分家の子孫。高知県土佐郡土佐山846 [語源説]①カナト(金戸・金門)の略(万葉代匠記・雅言考・名言通・紙魚屋雜記・和訓栞・言葉の根しらべ・鈴江潔子)。②カマヘト(構戸)の義か(和句解・日本語原学・林夔臣)。③カはカキ(構)の語根か。トは門の義(大言海)。④カト(垣所)の義(言元梯)。⑤カは場所を表わすカ(所)、トは戸の義(俚言集覽)。⑥カは接頭語。トは戸の義(東雅)。⑦カト(彼所)の義(類聚名物考)。⑧カは接頭語。トは、ト(止)の義か。または、限処の略か(洋の跡)。⑨カタムルトコロ(堅所)の義(本朝辞源・宇田甘冥)。⑩カカタノ(固殿)の反(名語記)。⑪ホカト(外戸)の略(日本釈名)。[発音](なまり)カゾ・カンド(和歌山県)カロ(京言葉) (標ア)因(ア史)平安・鎌倉●(京ア)因 [古辞書]和名・色葉名義・和玉文明

もん [門] ■ [名] ①建築物の外構えに設けた出入り口。かど。*令義解「宮衛・開閉門条」凡開閉門者、第一開門鼓撃訖、即開諸門也。*宇津保「国譲下」詳しうはえ見奉らず。車はもんの外(と)にたちて待つ。*大鏡上六・道長下「ながく世をつぎ門ひらく事、ただこの殿と申たれば」。*右京大夫集「とぼどののみなみのもんまでおひけれど」。*礼記「曲礼上」行不中、道、立不中、門。②平安京の条坊制で東西方向の区画帯のうちの最小単位。一坊を東西・南北方向に四等分して一六の正方形を作り、その各々を町と称し、町を東西方向の区画帯で八等分してこれを門という。南北方向には町を四等分区画帯で分け、これを行という。門と行の区画帯を組み合わせると一町の中に三二の小区画ができ、これを戸主(へぬ)といい、一戸の住居単位となった。一門の区画帯の中には四つの戸主が東西に並ぶことになる。*史料編纂所所藏春日社旧記「長承四年四月二六日・藤原某家地売券(平安遺文五・三二七)」在右京捌条老坊拾参町内肆戸主東肆行北壹式参肆伍陸柒捌門内者東西陸丈陸尺柒寸 南北参拾丈」③町境の木戸。*浮世草子・懷硯「一三」辻番手柄を見るより心して門うたずして通しける。*浪花聞書「門(モン)町々杯の木戸をも門といひ木戸とは不言」④門の出入りの改めや、門限のことをいう。*洒落本・辰巳之園「いやもう直に帰ろふ、門(モン)がやかましひ」⑤事物が必ず通るところ。ある状態・境地に達するために、まず経過しなければならぬ段階、また、試験。また、物事の生まれ出てくるところ。「登龍門」「狭き門」など語素的な形で用いられる。*易経「繫辭上」成性存存、道義之門」⑥学問・芸道を教える家、施設など。ある師を中心とする一派、または一つの系統を引く学問・芸道の流れをいう。*当世書生氣質(坪内逍遙)四「ある大学の門(モン)に入りて、脩学おこたりなかりけり」*当世少年氣質(巖谷小波)二「有名な書

家何某の門(モン)に弟子入させて」*孟子「告子下」交得_レ見_ニ於_レ鄭君_一、可_ニ以_レ仮_ニ館_一、願留而受_ニ業_一於_レ門_一。⑧生物分類上の階級の二つで、「界」の下位で、「綱」の上に当たる。動物、植物の各分類群の中で最も高い階級の名称。「脊椎動物門」「種子植物門」など。⑨女陰をいう俗語。⑩盗人仲間の隠語。⑪口をいう。「日本隠語集」。⑫私娼をいう。「隠語輯覧」。⑬「接尾」大砲を数えるのに用いる。*西洋道中膝栗毛(仮名垣魯文)六・上「十八門(モン)の大砲(ほう)」。*近世紀聞(糸野有人)初二「巨砲數門(すモン)」。⑭小説。夏目漱石作。明治四三年(一九一〇)発表。不義の結婚により、社会の片隅にひっそりと生きる宗助、お米夫婦のわびしい生活を通し、人生の深淵を描く。「三四郎」「それから」と三部作をなす。「発音(標ア)国(ア史)江戸●〇(京ア)国(古辞書)色葉・文明・天正・ももん(字音語素)」。⑮

かべ(壁)

宇治拾遺物語 P 393、L 3

かべ【壁】(名) ①建物の周囲、または内部を区切る仕切り。草や板などでも作るが、多くは土を用いて作る。*十卷本和名抄「二壁 野王家壁」入音辟 加閉_レ室_一之_レ屏蔽也。*源氏「帚木」火ほのかにかべにそむけ、なえたる衣どもの、厚肥えたる、大いなる籠にうちかけて。*大鏡「三伊尹」大饗せさせ給に、寢殿のうらいたの壁のすこしくろかりければ。②豆腐をいう女房詞。おかべ。*海人藻芥「内裏仙洞には一切の食物に異名を付て被_レ召事也。(略)豆腐はかべ」。*大上藤御名之事「女ことば。一、たうふ。しろ物とも。かべとも」。*御湯殿上日記「天正七年九月二日」みやの御かたの御ちの人よりかへ一ふたまいる。③(壁を「塗ぬる」を「寝ぬる」にかけて)夢をいう。主に和歌に用いられる。*後撰「恋一五一〇」まどろまぬかべにも人を見つるかなまさしからん春の夜の夢(駿河)。*頼政集「下」うつつにもかべにも同じ滝を見て、寝てもさめても忘れぬかな。④遊郭で、張見世の末席の異称。①を背にしてすわったところからいう。新造女郎などが席を占めた。*雑俳・柳多留拾遺「卷二下」壁に耳あつて引け四つ聞きつける。*雑俳・柳多留「一〇三」壁の新造振袖も土け色。⑤登山で直立した岩壁をいう。⑥(比喩的に)障害。じやま。困難。「壁に突き当たる」。⑦軽蔑されるべき者。愚か者。↓壁と見る。*洒落本「一目土堤」野暮(やぼ)を壁とは儲いかに。*女郎もかわず夜あるきせず。内に居るを野暮といふ。家のほとりをぶら付くを則家辺と申也。⑧囲碁で、外側に勢力を張っている連続した石。方言①垣根(かきね)。塀(へい)。島根県713 福岡県900 大分県日田郡957 宮崎県西諸県郡961 鹿児島県971 ②岩壁。がけ。富山県430 飛騨539 【語源説】(1)かへ(垣隔)の義(東雅・言元梯)。カキへ(構隔)の意か(大言海)。(2)カキへ(垣方)の義(和訓栞)。(3)カギリベ(限方)の義(名言通)。(4)カタへ(片辺)、また、カタへ(堅辺)の転(本朝辞源・宇田甘冥)。(5)カゲ(陰)の転声(和語私臆鈔)。(6)カタハネ(堅土)の反(名語記)。【発音(なまり)カエ】(富山県)ガンベ(岩手)標ア⑩(ア史)平安●(京ア)⑩(古辞書)和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・書言

かのや(萱屋)

古今著聞集 P 100、L 11

かのやの(屋) 茅で葺いた家、粗末な家。*読本「雨月物語・吉備津の釜」をぐらき林の裏(うち)に

ちいさき草屋(カヤノヤ)あり」

がらん(伽藍)

宇治拾遺物語 P 290、L 8

がらん【伽藍】**【名】**①梵 sanghāra(僧伽藍摩)の略。衆園・僧園・精舎などと訳す。僧が集まつて仏道を修行する清浄閑静な所。寺の建物の総称。寺、寺院。↓伽藍配置・七堂伽藍。*続日本紀一天平九年四月壬子「道慈奉天勅住此大安寺、修造以來於此伽藍恐有災事」。*今昔一・三一

「我れ勝地を求めて伽藍一院を建立して釈尊及御弟子等を居(すゑ)奉て」。*海道記一手越より蒲原

「伽藍の名を聞けば久能寺と云」。②「がらんじん(伽藍神)」の略。[方言]大きな建物などの構え。「が

らんが大きいから涼しい」茨城県050 群馬県勢多郡横野233 静岡県榛原郡本川根566 [発音]標ア)

①因(京ア)因 [古辞書]色葉・下学・文明・伊京・明心・天正・饅頭・黒本・易林・書言

かわら(瓦)

宇治拾遺物語 P 435、L 8

かわら かはら【瓦・航】**【名】**(梵 kapaḥ からか)①粘土を一定の形に固め、かまで蒸し焼きにした

もの。寺院建築とともに中国から伝来。主として、屋根を葺(ふ)くの用に用い、また、地面に敷き

つめる。鬼瓦、巴瓦、丸瓦、平瓦などがある。*小川本願經四分律平安初期点、鉄、若は銅、若は

瓦(カハラ)を用ゐて作るべし。*二十卷本和名抄一〇「瓦 蔣魴切韻云瓦(五寡反)和名加波良」

焼泥為之、蓋屋宇上、蓬萊子造也。*蜻蛉十下・天祿三年「屋(や)のうへをながむれば、すくふ雀

ども、かはらのしたをいでいりさへづる」。*源氏下野分「椽ども、おほく折れ伏したり。草むらは、

更にもいはず、檜皮(ひはだ)・かはら、所々の立節・透垣などやうのもの、乱りがはし」。*俳諧・春

の日「瓦ふく家も面白や秋の月(野水)」②「寺」をいう齋宮の忌み詞。かわらぶき。③「玉」に対し

て(価値のないもの)のたとえ。がらくた。*東大寺諷誦文平安初期点「五綴の瓦(すゑ)鉢もて少

し飲器に充て黄金白玉をば瓦(カハラ)石と同じくせり」。*当世書生氣質(坪内逍遙)六「本書中の

人物に玉すくなく瓦(カワラ)多きは、即ち此比例を示すものなり」④(航・航)和船の船底材をい

う語。上代から中世までは刳船(くりぶね)構造のため船底から側面まで一材で構成され、「瓦」

の字が慣用されたが、中世末以降、板船構造に変わったため、船首から船尾まで通した厚い板材

となり、船体構成上の基本材という意味で、航(舟の元の意)の字が作られ慣用された。裏日本で

は、こうら、丁(ちよう)などと呼び、航の字はあまり使われていない。*兵範記一嘉応二年四月

一九日「一、御船様、一二瓦敷板、其上立三間檣」。*日葡辞書「Carara(カワラ)〔訳〕船の龍骨」。*

和漢船用集一〇・船処名之部「航の字、未見ニ書書、本邦制作の字也。専通用す。能利(よくり)に

かなへり(略)舟を作るや、其元にて依て成か故也」。[接尾]古代の船の数をかぞえるのに用い

る。艘(そう)。*書紀「神功撰政前(熱田本訓)「金・銀・彩(うるわ)しき色及び綾(きぬ)羅(かとり)

縑絹を貢(たてまつ)る。八十艘(カハラ)の船に載(の)せ(い)れて官軍に従(へ)令(む)」[方言]①わら屋

根の棟をおおう細竹の簀(す)。老岐937 ②船の底板。青森県上北郡野辺地044 岡山県御津郡743

石見047 山口県772 愛媛県・宮崎県児湯郡・長崎県044 熊本県天草島954 鹿児島県甞島985(かわ

らいた) 大分県北海部郡044 ③火にかけて物をいる土器、焙烙(ほうろく) 福岡県博多906 久留

米191(こうら) 徳島県祖谷山807 ④硯(すずり)。愛知県海部郡七宝569 語源説(1)梵語kapālaから

〔箋注和名抄・外来語の話〕新村出・国語中の梵語の研究 上田恭輔・大言海・外来語辞典 荒川惣兵衛。

(2)「瓦磚」の別音Ka・Haに諧音のラを添えたもの〔日本語源考・与謝野寛〕。(3)カワラ(龜甲)の意〔古事記伝〕。(4)カハラ(甲冑)の義〔言元梯〕。(5)屋上のカハ(皮)の義か〔俚言集覧・家屋雑考・和訓栞〕。

(6)土を焼いて板に変えることから。カハルの転〔日本釈名・紫門和語類集〕。また、かたくてわれやすいところから〔日本釈名〕。(7)カタハリ(堅張)の義〔名言通〕。(8)カハラグ(乾)意〔和句解・類聚名物考〕。(9)触れた時の擬音語からか〔雅言音声考・国語湖原・大矢透〕。〔発音(なまり)カーラ(岩手・

仙台音韻・福島・茨城・埼玉・千葉・富山県・静岡・南伊勢・淡路・紀州・和歌山県・鳥取・島根・周防大島・讃岐・愛媛・周桑・伊予・土佐)カラ(岩手・鳥取・島根)〔標ア〕㊦(ア史)平安○○○ 江戸●○○(京

ア)㊦ 古辞書字鏡・和名・色葉名義・和玉・文明・天正・饅頭・黒本・易林・書言

きざはし(階)

古今著聞集 P.118、L.3・P.200、L.14・P.219、L.15・P.363、L.11・P.501、L.13・P.502、L.5

きざはし【階・段階】名 ①のぼりおりするために作った段。階段。きだはし。*宇津保楼上下

「きざはしは、御手(て)を取りてのぼせ奉(たてまつ)り給」*平家四・鶴(御前のきざはし)を半

(なから)ばかり降りさせ給へるところに」*書言字考節用集二「階 キザハシ キタハシ」②物事

の順序。段階(だんかい)。*俳諧・一字般若「名目部とて初心の僧徒の字問のごとし。それより玄

義文句止観にわたる陸のみにて、小僧どもの手に有」③能舞台の正面中央から白洲(しらす)にか

けた階段。原則として三段。〔方言〕石段。神戸044 徳島県805 熊本県水俣951 大分県大野県959 語

源説(1)キザハシ(刻階)の義〔和句解〕。(2)キダハシ(分階)の転〔蒼梧隨筆・和訓栞〕。(3)キザはクダ

リシナ(下階)の義〔和訓集説〕。〔発音(なまり)キザシ(秋田)キダハシ(飛騨・愛知)キダハス(岩手)

ヒザハシ(熊本分布相)〔標ア〕㊦(ア史)江戸●○○(京ア)㊦ 古辞書和玉・書言

きつねど(狐戸)

古今著聞集 P.270、L.15・P.463、L.9

きつねど【狐戸】名 ①きつねごうし(狐格子)①に同じ。*古今著聞集九・三三五「夜の中しづ

まる程に(略)狐戸より入て、頼光のねたるうへの天井にあり」②狐格子を遺戸(やりど)にしたも

の。*殿曆嘉承二年五月一日「今朝自・枇杷殿・入来云、有・焼亡云々、仍念退出、無・指事、他

所けふりの対北面狐戸より出也」*古今著聞集一・七・六〇二「頼度すなはち八条殿にまゐりて、寝

殿のきつねどに入てまちけり」 語源説(1)キツネゴウシド(狐格子戸)の略〔大言海〕。(2)狐の穴は

どの小さい戸の意。〔嬉遊笑覧〕 〔発音(標ア)〕㊦ 古辞書和玉・易林

きつねごうし【狐格子】名 ①屋根の妻にとりつける、裏に板を張つ

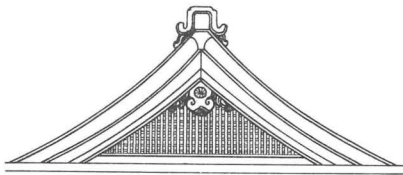
た格子。狐戸(きつねど)。妻格子。木連格子(きつねごうし)。②戸の一

つ。格子の裏に板を張つたもの。*歌舞伎・時桔梗出世請状「序幕」御簾を

あげおろし正面の扉開くことあり、この左右は狐格子(キツネガウシ)」*

歌舞伎・紋尽五人男「四幕」真中に九尺の不動堂、出入り狐格子(キツネガウシ)」*

シ)、上の方に高札を立てし御行の松」 語源説(1)内から外は見えて、外か



狐格子①(西本寺北能舞台)

ら内は見えないという不思議さから「大言海」。(2)野狐が殿内に入るのを防ぐための格子の意〔愚雑俎〕。〔発音〕キツネゴロシ（なまり）キツレゴロシ〔東京〕〔標ア〕㊦〔京ア〕㊧

きりいた〔切板〕

古今著聞集 P 345、L 10

きりいた【切板】〔名〕①切った板。*俳諧・玉海集一・春「木鐘かきりいたたく仏の坐〔正信〕」②

語義未詳。實（すのこ）か。*平家一四・馳之沙汰「案内はしたり、築地をこへ、大床のしたを這（は）うて、きり板より泰親が勘状をこそまゐらせたれ」

くら〔倉・蔵〕

宇治拾遺物語 P 226、L 12・P 227、L 15・P 228、L 2・P 275、L 15・P 275、L 17・P 276、L 1・P

276、L 5・P 276、L 6・P 276、L 8・P 276、L 15・P 276、L 16・P 276、L 17・P 277、L 1・P 281、

L 4・P 281、L 5・P 281、L 7・P 281、L 10・P 357、L 10・P 357、L 13・P 357、L 14・P 419、L 1

くら【倉・蔵・庫】〔名〕①穀物、商品、財宝などを火災や盗難などから守って安全に保管しておくため

に造った建物。土蔵、板倉、校倉（あぜくら）などの種類がある。倉庫。*古事記中「夢の教の如

（まにま）に、且に己が倉（くら）を見れば、信に横刀有りき」*播磨風土記「搦保」桑原の里（旧の

名は倉見の里なり）√。土は中の上なり。品太の天皇、櫛折山に立ち御して望み覽たまひし時、森然

（いよよか）に倉（くら）見えき。故、倉見の村と名づく」*万葉一六・三八三「根（からたち）の棘原

（うばら）刈り除け倉（くら）立てむ屎（くそ）遠くまれ櫛造る刀自（忌部首（名未詳））√」*伊勢物語

上「雨もいたう降りければ、あばらなるくらに、女をば奥におし入れて」*大慈恩寺三藏法師伝院

政期点七「帝の庫（くら）の内に、多く前代の諸の納有れども」*韻字集「帑（くら）」②鎌倉時代か

ら室町時代にかけて質屋をいう語。土倉（とくら・どそう）*大内氏掟書一三・三条・寛正二年七月八

日「失物質物にをくとき、その盗人倉へ持来て、をく事は、不能（左右）①（「金蔵（かねくら）」の意

から）金銭を手に入れる手づる。金銭の収入源。金づる。*浄瑠璃・箱根靈驗辨疑一七「是から

お前はこちらの蔵ぢや、精出して仕送って貰ふた上、博奕の手元も貰はにやならぬ」④歌舞伎な

どで、興行の不成立をいう語。転じて、計画していた物事などをやめにくること。おくら。*西

洋道中膝栗毛（仮名垣魯文）九・上「お前は馬者の別当にも請とねへから此対面は蔵（くら）にしま

せう（かぶき道にてやめになることをくらと云）√」⑤「くらしいしょう（蔵衣装）①」の略。*随筆・

一話一言「補遺・七「蔵衣装、蔵と計も云ふなり」⑥「ちゅうしんぐら（忠臣蔵）」の略。*雑俳・柳多

留四六「元祿に建たる蔵は朽ぬ也」*滑稽本・八笑人上四下「イヤサ蔵（くら）でもいいが、五段目

なんぞはあんまりしたりねへ」⑦（大黒舞の歌詞「九つここに蔵たてて」から）明治期、京都・大阪

地方の呉服商が「九」の意味に用いた語。⑧質屋または銀行をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

〔語源説〕(1)物を納め置くことをいうクラ（座）の義（名言通・和訓栞・言葉の根しらべ・鈴江潔子・日本

古語大辞典・松岡静雄・大言海・日本の言葉・新村出）。(2)置くの義（日本釈名・東雅・和訓栞）。(3)オ

クラ（置坐）の義（言元梯）。(4)オクムロタナ（置室棚）の義（日本語原学・林襄臣）。(5)内部が暗いとこ

ろから〔和句解・家屋雑考〕。(6)岩窟の義（国語の語根とその分類・大島正健）。〔発音〕（なまり）クハ

〔山形〕（標ア）㊦（ア史）平安〇〇 室町●〇（京ア）㊦〔古辞書〕色葉・名義・和玉・文明・明応・天正

饅頭・黒本・易林・書言

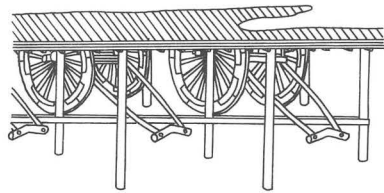
くるまやどり (車宿)

宇治拾遺物語 P. 205、L. 6・P. 359、L. 7

古今著聞集 P. 327、L. 6・P. 345、L. 4・P. 421、L. 12・P. 421、L. 13

くるまやどり【車宿】■【名】①貴人の邸宅などで、牛車(ぎつしや)や輿(こし)を入れておく建物。

総門の内、中門の外にある。輿宿(こしやどり)。*枕上二五・すさまじきもの「また、かならず来べき人のもとに車をやりてまつに、来る音すれば、さななりと人々いでて見るに、車やどりにさらにひき入れて、轆ほうとうちおろすを」*大鏡上二伊尹「御車やどりにには、いたじきをおくにはたかく、はしはさがりて、おほきなるつまどをせさせ給へる」*家屋雑考上二車舎(クルマヤドリ)車舎は、中門の外にあり。車にて来る客人あれば、牛をはづして、車を引き入れ置く所也。此方の車をも、常に、ひきおく所なりといふ、輿舎(こしやどり)に同じ」②外出の際、しばらくの間車を寄せて牛馬を休めた控え屋。また、そのための家。多く女を置いたり、女のいる家をあてたりした。*権記長保二年四月一四日「賀茂祭也。明豪僧都車宿、高構」

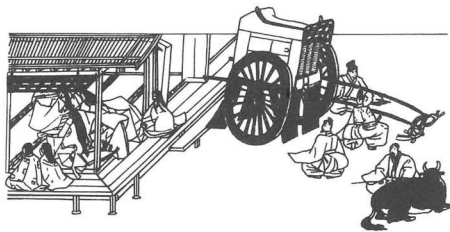


車宿①(法然上人絵伝)

棚。自東北陣中「露見」之。仍遣藏人所小舎人示此由、而不承引、仍仰右衛門府生林重親令撤却、是奏事由所行也。重親先奉仰旨、到彼車宿令示案内、無敢承引、重親于時更騎馬立埒迎、令隨身等撤却、為見物所登居女房道俗等乱落云々。(略)僧車宿已有制所禁也。*米花一つばみ花「女御の御乳母とあるは、実誓僧都といふ人のくるまやどりなり。その家に渡り給ひぬ」■(清水寺参詣者の車を置いたところから)京都清水寺仁王門西北の旧地名。*謡曲・熊野「はや程もなくこれぞこの、車宿(くるまやどり)、馬留め、ここより花車、おりの衣播磨湯、飾磨の徒歩路清水の」*仮名草子・恨の介上「くるまやどりに馬駐め、さあらぬ体にて見る所に」【発音】

くるまよせ (車寄)
古今著聞集 P. 252、L. 15・P. 254、L. 14・P. 274、L. 9・P. 286、L. 7

くるまよせ【車寄】【名】車を寄せて乗り降りするために、建物の玄関口に張り出して設けられた部分。古くは東西中門廊の妻戸から出入りした。のちには二条城二の丸書院のように、玄関に当たるものをいう。くるまつき。*兵範記長承元年一月二〇日「北廊北向戸被儲御車寄」*平家上六「祇園女御ある夜の夢に、びりやうの車をゐて来て、我家の車よせに立つといふ夢を見て」*浄瑠璃・平家女護島上「誠の力は見よと片手につかんで車よせの築地ごしに投こす力かぜを持」【発音】(標ア)①(へア史)江戸●●●●●



車寄(法然上人絵伝)

〔京ア〕① 〔古辞書〕文明・書言

くろど(黒戸)

古今著聞集 P 423、L 10

くろど【黒戸】■くろど(黒戸)の御所(ごしよ)の略。*枕一八二・頭の中将の「くろどの前などわたるにも、声などのするをりは、袖をふたぎてつゆ見おこせず」*散木奇歌集一夏「修理大夫顕季の六条の家にて暁水雞といへることを、誰しかも水雞ならではたたくべきくろどのみとのひましらむまで」*徒然草一七六「黒戸は、小松御門位につかせ給ひて、昔ただ人におはしましし時、まさな事せさせ給ひしを忘れ給はで、常に営ませ給ひける間なり。御薪にすすけたれば、黒戸といふとぞ」■【名】仏壇をいう女房詞。*随筆・遠碧軒記上・一「禁中の黒戸に御仏壇あり(略)直に黒戸の間と云、その間御仏壇なり」*和訓栞「くろどのみと、黒戸の御戸也。禁裡女中詞に仏壇を御黒戸といふ」【古辞書】書言

くろどの 御所(ごしよ) (薪のすすで黒くなっていたところからいう) 宮中、清涼殿の北、滝口の戸の西に連なっている細長い部屋。くろど。*平治上・光頼卿参内の事「さて主上はいづくにおはしますぞ」『黒戸御所に』

けた(桁)

宇治拾遺物語 P 489、L 9

けた【桁】【名】①家や橋などの柱の上に渡してその上にのせる梁(はり)を受けさせる材木。*万葉一・一・二六四四「小墾田(をはりだ)の板田の橋の壊れなば桁(けた)より行かむな恋ひそ吾妹(わきも)(作者未詳)」*延喜式・祝詞大殿祭「掘り堅めたる柱・桁・梁・戸・牖の錯(きか)ひ動き鳴る事なく」*色葉字類抄「桁ケタ」*名語記上「けたうつばりのやうなるかまへしたる」②そろばんの珠を貫く縦の串。また、そろばんの位取り。*浮世草子・好色万金丹上・二「そろばんの桁(ケタ)が違ふた」*談義本・遊婦多数寄「跋」百歳は三万六千日。僅かに算盤二桁(ケタ)之際耳(あいだのみ)」*浮雲(二葉亭四迷)一・四「胸で弾いた算盤の桁は合ひながらも」③数の位。位取り。*西洋道中膝栗毛(仮名垣魯文)五・上「国を富ますが専要と、胸勘定の桁(ケタ)をつばめて」*今年竹(里見淳)出来心・六「無駄に使へる金の、桁の違ひもあつて」④かたわら。そば。*堀河百首「春」とりつなげ玉田横野の放れ駒つつじがけたにあぜみ花咲く(源俊賴)」*俚言集覽「けた 桁也方也又板也(略)かたはらをも田舎にてケタと申詞あり」⑤「ほげた(帆桁)」の略。*通航一覽上・二「五」桁を帆柱に仕、水棹を鱸(櫓)に結、添桁に致し、帆九端計為持」⑥木または鉄製の棹でできた漁具。海底をひきまわし、これについている爪(つめ)で貝類をかきおこし、また、テングサなどをかきとる。↓桁網(けたあみ)。【方言】①山の高い所。山の峰。土佐寺川↑1 高知県長岡郡国府 849 ②海中の岩のふち。伊豆大島 304 ③陸に近い海面または波打際。宮崎県児湯郡富田 044 ④田植えの時の苗の縦の間隔。広島県山県郡中野 044 ⑤苗代田。茨城県多賀郡高岡 007 (けたのうち) 茨城県高岡 007 ⑥物の真直な状態。茨城県新治郡 201 【語源説】縦横に打交えるところからケタ(方)の義(大言海)。②両辺にあるところから、カタ(偏)の義か(名言通)。③カタ(肩)の転(東雅・和語私臆鈔)。④ケト(衣所・衣架)の義(言元梯)。⑤カケワタスの略(日本釈名)。⑥ケはツケの上略か。タは板の義か(和句解)。⑦カマヘワタシ(構渡)の義(日本語原学・林夔臣)。⑧カセに似たものを高く掲げてあるところから、カセタカの反(名語記)。【発音】(標ア)⑩(ア史)平安○(京ア)

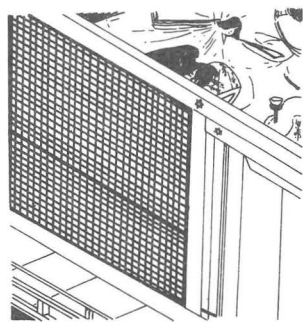
⑩ 古辞書「字鏡・和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言
こうし(格子)

宇治拾遺物語 P 245、L 10・P 417、L 9

古今著開集 P 172、L 3・P 172、L 5・P 219、L 17・P 327、L 13・P 327、L 14・P 485、L 1

こうし カウシ:「格子」名 ①細い角材を縦横に組み合わせて作った建具。寝殿造りの建具である部
(しとみ)のこと。*竹取「かうし共も、人はなくしてあきぬ」

*源氏「末摘花」かうし引き上げ給へり」*色葉字類抄「簾子
カウシ 格子同用之」*家屋雜考「格子(略)中古以来は、
今時の制と同じく、墨塗にて間毎に格子あり。上に一枚、
下に一枚、掛鉄(かけがね)にてかけおき、開くときは上な
るは外の方へ釣り上げ、下ばかりをかけおくなり」②細い
木や竹などを、縦横に間をすかして組んで、窓や戸口の外
などに打ちつけたもの。*談義本・根無草「前三「格子はめ
りめり、皿鉢はぐわらぐわら、手桶の輪がきれて水が飛べば」
*滑稽本・浮世風呂「前上「此湯をぬるいといふ人は(略)此
格子(カウシ)をはづしで鑊(かま)の中へはいるが能(いい)」③「こうしど(格子戸)の略。*浮世



格子①(紫式部日記絵巻)

草子・好色一代男「一三「おもての隔子(カウシ)をあらくたたきて、世の介様の御乳母どのと」④
染織品の文様的一种。碁盤の目のように縦横に筋を出したものの。*続古事談「五「ふたあるのかう
しぬののかりばかま」*随筆・貞丈雜記「二「かうしと云は格子と書て碁盤の目のごとくたて横に
筋をおる也。是は古は位高き人ならでは着ざりしなり」*老年(芥川龍之介)「紺と白茶と格子に
なつた炬燵蒲団」⑤遊女屋にある格子。また、その張見世(はりみせ)、遊女屋をいう。*仮名
草子・仁勢物語「下六五「かうしの外には、人の見るをも知らでのさばれば、此女思ひ詫びて、揚
屋へ行く」*浮世草子・好色二代男「二五「格子(コウシ)まで送り、小者に灯挑(ちやうちん)けさ
せて、揚屋の女子(こ)も戻し」*浄瑠璃・夕霧阿波鳴渡「上「是は是は太夫様。(略)格子(カウシ)へ
お出なされてより去年のけふ迄」⑥江戸時代の遊女、また
その位をいう。①遊女の階級の一つ。京都島原では、遊女
の第二級天神をいい、大坂新町では、第一級の太夫、また、
江戸吉原では、第二級の遊女をいった。大格子の内に部屋
をもっていることからいう。*評判記・吉原すずめ「下「太
夫とかうしとのあいだに、よびだしといふくらゐの女郎あ
り、かうしといふ事は、いにしへには其さたなし、めいり
やく年中にはじめてさだむる所のくはんしよく也」*浮世
草子・御前義経記「一・凡例「天神は太夫より少おとれり。釈
名に三尺といふ。和名に梅といふ。唐韻に天職、俗語に中
位とも宗(むね)とも、むら共、格子ともいふ」*談義本・風流志道軒伝「五「何事も皆吉原を学べ



格子⑤(菱川師宣画よしはらの射)

て、大夫よりかうし・さんちや、下唐人は河岸(かし)へ追ひやり」*洒落本・虚実柳巷方言十
 「太夫を格子といい天神をみせと言」⑩遊女屋の格子の所に出て、張見世をする遊女の総称。見世
 女郎。格子女郎。*雜俳・柳多留十四〇「マアあがなんしと格子のたまはく」⑦紋所の名。蒔(し
 とみ)の格子をかたどったもの。⑧物理学で、結晶格子、回折格子をいう。⑨数学で、基本にな
 るベクトルを単位として原点から規則正しく排列された点、およびそれらの点を結ぶ線とそれら
 の線で囲まれた面の総体。一つのベクトルで規定される一次元格子、二つのベクトルで規定され
 る平面格子(二次元格子)、三つのベクトルで規定される空間格子(三次元格子)がある。⑩電子管
 の電極の一つ、グリッドをいう。制御格子、遮蔽格子、抑制格子などがある。[発音]コーシ(なま
 り)カウセ(福岡)コーヒ(島原方言)(標ア)⑩(京ア)⑩[古辞書]色葉・名義・下学・文明・伊京・天正
 ・饅頭・黒本・易林・書言

こくらん(高欄)

宇治拾遺物語 P 294、L 3・P 499、L 5・P 499、L 6

古今著聞集 P 200、L 15・P 326、L 7・P 393、L 6・P 453、L 9

こくらん カウ【高欄】〔名〕①宮殿、堂舎などのまわりや橋、廊下などの両側などに設けた欄干。勾
 欄。鉤欄。*延喜式十四・神祇・伊勢太神宮「修・飭神宮調度、

〔略〕高欄鳥居丸桁端金十管」*宇津保・嵯峨院「かうらんに

おしかかりて、ながめおはしまして」*小右記「長和元年

五月一七日「正当御殿南階立構高欄」*御伽草子・物くさ太

郎「島より陸地(ろくち)へそり橋をかけかうらんに擬宝珠

(ぎぼうし)をみがき」*梁元帝「後臨荆州詩「高欄来・惠氣、

疎簾度・晚光」②椅子のひじかけ。*岩瀬本大鏡「一・宇多

「殿上の御椅子(ごいし)の前にて、業平の中將と相撲(すま

ひ)とらせ給けるほどに、御椅子に打ちかけられて、かう

らむ折れにけり」*荒涼記(古事類苑・器用一八)「正元元年六月(略)十一日(略)大臣椅子、猶有高

欄、太子御椅子無欄之条、不叶道理」③牛車(ぎつしゃ)の部分の名称。車の前後の口に、下に

張り渡した低い仕切り板。軾(とじきみ)。*延喜式「一七・内匠寮「腰車一具。〔略〕輦并輪料櫛七

十二枚。柱并高欄、鳥居等料、檜樽二村」*蛙抄「車輿(古事類苑・器用二七)「檳榔毛車箱八無

物見、有開戸、前後有高欄」[方言]高殿や橋などの手すり。らんかん。大阪[発音]コーラ

ン(標ア)④(京ア)④[古辞書]下学・文明・伊京

こけらぶき

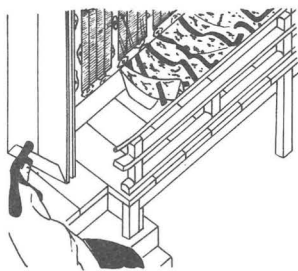
古今著聞集 P 523、L 2

こけらぶき【柿葺】〔名〕こけら板で屋根をふくこと。また、その屋根。笹屋根。つづりぶき。*多

武峰略記下・別院「南院堂(略)治承四年三月依朽損改檜皮以柿葺、大工源守安。願主意註」

*古今著聞集上二〇・六九五「渡辺に往年の堂あり。〔略〕もとこけらぶきにてありけるが」*浮世

草子・世間胸算用二・四「是によって、棟に棟次第にたちつづき、こけら葺(ブキ)の屋ねもそこね



高欄①(源氏物語絵巻)

ぬうちにさし枋(ぐれ)したり」〔発音〕(標ア)〇(京ア)〇〔古辞書〕文明・書言

こじとみ(小葩) → しとみ

宇治拾遺物語 P 357, L 1

こじとみ【小葩】〔名〕 ①上下に懸けはすしできる格子造りの小形の戸。*能因本枕一七八うちつほねは「上(かみ)のこじとみあけたれば、風いみじう吹き入れて」*大鏡一四・道隆「すがやかにえあゆみのき給はで、登花殿のほそ殿の小葩におしたてられ給て、『やや』とおほせられけれど」②清涼殿の昼(ひ)の御座(おまし)と殿上の間との境にある石灰(いしばい)の壇の南の壁の上方につけてある小さい窓。天皇が殿上の間を御覧になつたところ *大鏡一・時平「内にまいる給て、殿上に候はせ給ふを、みかど小葩より御覧じて」*禁秘鈔一上「殿上六間八上戸有二小葩一、主上覧二殿上一所也。御物忌時下レ之レ」*徒然草一三三「あやしの所にもありぬべき小葩、小板敷、高遺戸などもめでたくこそ聞ゆれ」〔発音〕(標ア)〇

こまい(木舞)

宇治拾遺物語 P 489, L 8

こまい一、ま二木舞一・小舞〔名〕 ①中世以前、屋根の下地、土壁の下地として細長い板、割つた木、木の板などを垂木(たるき)の上や、壁の間渡(まわたし)に編みつけたもの。*正倉院文書「天平宝字六年正月一五日・雑材并檜皮納帳(大日本古文書五)」又収納黒木桁八十五枚、柱三十四根、古方比(コマヒ)二十八枚」*新猿楽記「桁、梁、垂木、木舞」*宇治拾遺一五・四「かくするほどに、ふき板みなうせぬ。はてには、たる木、こまいを、わりたきつ」*文明本節用集「柵 コマイ 或作二木舞一(コマイ)」*日葡辞書「Comai(コマイ)〔訳〕竹できていて、屋根を葺いたり、土壁を塗つたりなどする下地になるもの」②近世以後の土壁の、貫(ぬき)に割り竹を編みつけた壁下地。*雑俳・柳多留一三三「かり衣をこまいの折れで度度破り」*俚言集覧「棧したじ(略)今、江戸にて壁のコマイ也」*滑稽本・続膝栗毛一・一・上「正月のかざり藁アドけておいて釣瓶繩にするし、七月の芋殻(をがら)ア壁のこまいにする」③垂木の上に、横に渡した細長い板。この上に屋根の下地板を張る。住宅あるいは住宅風仏堂に使う。*匠明殿屋集「一、木舞下は八種下八面うち也。たけ八種のたけ半分なり。下は二面あり」〔語源説〕(1)クミユヒ(組結)の約転か〔大言海〕。(2)コマユヒ(小間結)の義〔松屋筆記〕。〔発音〕(標ア)〇(京ア)〇〔古辞書〕色葉名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

サ行

したくら(下倉)

古今著聞集 P 544, L 13

したくら【下倉】〔名〕 下の方のくら。*十訓抄一〇・伶人助元吹笛遁大蛇難事「府役懈怠の事によりて、左近府の下倉に召し籠めらる。此の下倉には、蛇蝎の棲むなる物を」

さげだな(さげ棚)

古今著聞集 P 350, L 14

さげだな【下棚】〔名〕 つりさげた棚。つり棚。*古今著聞集一・二・四四〇「さげ棚の上に、鉢に灰

を入れて置きたりけるを」

したげた(下桁)

宇治拾遺物語 P 489、L 11

したげた【下桁】〔名〕床板をうけるために、床下にわたしてある横木。根太(ねだ)。*正倉院文書(天平宝字六年二月七日)造石山寺所雜材并檜皮和炭等納帳(大日本古文书一五)「收納雜材八十八物下桁二枝(各長二丈二尺、方七寸)」。*宇治拾遺「一五・四」板敷・したげたまでも、みなわりたきて隣の人の家にとりけるを」
〔発音〕シタゲタ(標ア)① 〔古辞書〕文明

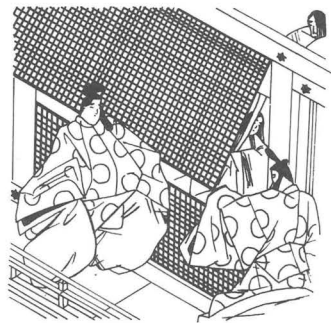
しとみ(部) → こじとみ、たてじとみ

宇治拾遺物語 P 89、L 7・P 205、L 7・P 258、L 6・P 258、L 7・P 361、L 6・P 391、L 3・P 417、L 7・P 417、L 8

古今著聞集 P 275、L 6・P 455、L 6・P 472、L 5

しとみ【部】〔名〕①光や風雨をさえぎるもの。*書紀「皇極四年六月(岩崎本平安中期訓)「是の日に、雨下(ふ)りて、潦水(いさらみつ)庭に溢(いはめ)り。席障子(むしろシトミ)を以て鞍作か尻(かはね)に覆(おほ)ふ」。*十卷本和名抄「二部 周礼注云部(音部)字亦作部(之度美)覆暖障光也」

②柱の間に入れる建具の一つ。板の両面あるいは一面に格子を組み、長押(なげし)から釣り、上にはねあげて開くようにしたもの。寝殿造りに多く、神社、仏閣にも用いる。しとみど。*蜻蛉上・康保三年「明かうなれば、をのこどんよびて、しとみあげさせてみつ」*源氏夕顔「誰とか知らむとうちとけ給ひて、少し、さしのぞき給へれば、門は、しとみのやうなるもの、おしあげたる」*平家「二少将都帰(家はあれ共、らんもむ破れて、部やり戸もたえてなし」*名語記「八」しとみ如



部②(紫式部日記絵巻)

何、部也、さきつるめりの反すみつるめりの反はしつみをしとみといへる也、又云、さけつるめりの反はせつみをしとみいひなせる歟」③船の舷側に設ける、波・しぶきよけで、多数の部立(しとみたつ)を立ててそのあいだに板を差し入れるもの。五大力船、小早、渡海船など本格的な垣立のないうち中小和船に用いる。*和漢船用集「四・海舶之部」此渡海の舟、小倉渡海と云。物屋形、物矢倉也。左右に部ありてまどあり」④築城で、外から城内が見え透くところをおおっておく戸の類。⑤町屋の前面にはめこむ横戸。二枚あるいは三枚からなり、左右の柱の溝にはめ、昼ははずし、夜ははめる。ひとみともいう。しとみど。〔語源説〕①シは風雨の意、トミはトメ(止)の転(大言海)。シトミ(風止)の義(筆の御霊)。②シトミ(湿止)の義か(志不可起)。③シブキトメオホヒ(斜雨止蔽)の義(日本語原学「林麿臣」)。④シトム(下止)の義か(東雅・名言通・和訓栞)。⑤外を見るためにあけるから、ヒトミ(他見)の義か(俗語考)。⑥ヒトミ(人見)の転(紫門和語類集)。⑦ヒトメ(日止)の義(言元梯)。⑧ソトモ(外面)の転(和語私臆鈔)。⑨サキツルメリ、または、サケツルメリの反転(名語記)。〔発音〕なまりシトメ(岩手・秋田・飛驒)ストメ(青森)ヒトミ(広島県)ヒトメ(飛驒)(標ア)

①(ア史)平安○○○江戸●●●(京ア)①古辞書和名・名義・下学・和玉・文明・伊京・天正・饅頭・黒本・易林・書言

しばのいおり(柴の庵) → いおり

宇治拾遺物語 P 446, L 2

しばの庵(いおり)「しば(柴)の庵(いおり)」に同じ。*山家集上「しばのいほにとくとく梅の匂いきてやさしき方もある住家(すみか)哉」*菟玖波集雑二「何につけてか又とはれまし我だにもすまれぬ山の柴の庵(救済)」古辞書易林

しばの庵(いおり)柴で壁や屋根を作った粗末な仮小屋、柴のいお。*源氏一若紫「同じしばのいほりなれど、少し涼しき水の流れも御覧ぜさせん」*増鏡二・新島守「しばのいほりのただしばしと、かりそめに見えたる御やどりなれど」*御伽草子・小敦盛「都あたりにしばのいほりを結び」

じぶつどう(持仏堂)

宇治拾遺物語 P 446, L 9

じぶつどう チブツダウ【持仏堂】【名】持仏または祖先の位牌を安置しておく堂、あるいは室。仏間。*狭衣物語上二「入道の宮は、持仏(チブツ)だうの妻戸おしあけて」*今昔上二〇・三九「持仏堂及び寢所など有り」*源平盛衰記一・清盛行大威徳法「家成卿の持仏堂(ジブツダウ)にて、護身加持しておはしければ」*辺鄙以知吾「家々の持仏堂に一卷宛納めおきて、朝夕におし戴きたらんには、上もなき家内安全の祈禱なるべきぞ」発音ジブツド(なまり)チブト【福島】(標ア)①(京ア)①

古辞書一易林・書言

しようじ(障子)

宇治拾遺物語 P 208, L 9・P 208, L 10・P 211, L 7・P 211, L 12・P 213, L 9・P 215, L 13

古今著聞集 P 69, L 6・P 86, L 1・P 229, L 2・P 312, L 16・P 322, L 7・P 350, L 13・P 471 L 12・P 471, L 13・P 482, L 6

しようじ シャウジ【障子・障紙】【名】①部屋の内外を仕切る障屏具(しようへいぐ)の一種。取りはずしのできる張付壁、絹布を張った襖(ふすま)障子、唐紙(からかみ)を張った唐紙障子、台脚がついていて室内を移動させることのできる衝立(ついたて)障子、簾屏風(すだれびょうぶ)のように作った通(す)障子、格子(こうし)に組んだ骨組に白い紙を張った明かり障子などがある。今はふつう明かり障子をさしている。《季・冬》*三代格一・九・神龜五年九月六日・勅「於」(図書寮所)藏仏像及内外典籍書法屏風障子并雜圖繪等類」*大和法隆寺文書「天平宝字五年一〇月一日・法隆寺縁起并資財帳(寧楽遺文)「障子老枚(八表紫綾、裏標、高七尺広三尺五寸)」。*宇津保楼上下「坤(ひつじさる)の外(と)より見入れ給へば、中のしようじも壊(こぼ)れたり」*平家一・祇王「しようじに泣く泣く一首の歌をぞ書きつけける」*義経記七・判官北国落の事「灯火の明にて、常に住み馴れ給ひつる御しようじの引手の本を見ければ」*日葡辞書「Xioji(シャウジ)紙の戸」*六百句(高浜虚子)昭和一八年「障子しめ自恃庵とぞ号しける」②鼻の二つのあなのしきりという。*洒落本・傾城諺種「此君にされるものは、終に鼻のせうじ迄ぬかるとかや」*狂歌・滄洲棲家集「春」立いでて見れども梅のにははぬは鼻に障子のあればなるらん」*いさなとり(幸田露半)六七「潮噴く鼻の障子を切り穿き」③江戸時代、頭髮を頭の中程に横にそりのこしたものの。*

随筆・嬉遊笑覧「一下」あたまの中程に横に毛を剃のこして俗に是を障子と云ふ、この障子の処までそりてうしろの方は剃らで置く、これ半頭なり」**■**名物茶碗の一つ。本阿彌光悦作の赤焼茶碗の銘。胴に土ぬけがあつて、日にうつすと、透いて見えるところから、この銘がある。**〔発音〕**シヨウジ

〔なまり〕シヨンジ〔南伊勢〕ソージ・ソズ〔岩手〕〔標ア〕**〔ア史〕**江戸●●●〔京ア〕**〔古辞書〕**
色葉・文明・明応・易林・書言

しようろう（鐘楼）

古今著聞集 P 474、L 10

しようろう **〔鐘楼〕**〔名〕寺院の境内にあつて、梵鐘をつるしてある堂。かねつき堂。じゅうろう。*

初すがた（小杉天外）一「今汲んで来た手桶の水を重さうに身を傾げて、鐘楼（シヨウラウ）の前まで来ると」*破戒（島崎藤村）二「三」一「親戚も無ければ妻子も無いといふ鐘楼（シヤウラウ）の番人に長の別離（わかれ）を告げた」*戴復古（海上魚西寺詩）「小雨疎烟晚来景、老僧相对倚鐘楼」

〔発音〕シヨロー（標ア）**〔京ア〕**

じん（陣）

宇治拾遺物語 P 345、L 5・P 345、L 6・P 345、L 7・P 345、L 8・P 345、L 9

じん **〔陣〕**〔名〕**〔名〕**兵士を排列して編成する隊伍。陣だて。陣列。*平家一七「俱梨迦羅落」さる程に、源平両方陣をあはす。陣のあはひわづかに三町ばかりによせあはせたり」*金刀比羅本保元

一上「官軍勢汰へ、黄鉞の鉞をかかやかし、魚鱗・鶴翼の陣（ヂン）を全し、星旄電戟の威をふるつて」

*論語「衛靈公問陳於孔子」**〔名〕**軍勢の駐屯する所。兵營。陣營。陣屋。*平家一五「富士

川」夜に入て、平家の方より源氏の陣を見わたせば、伊豆・駿河人民、百姓等がいくさにおそれて」

建内記「永享二年六月一八日」和州吉野奥先可「有搜索、自其陣直可令発向伊勢国」

江濃記「道三最後之事」備前方も川をしづしづと越し御会寺村に陣を移す」*史記「樊噲伝」攻「城先登陥陣」**〔名〕**朝廷の行事に、武官が出仕して整列する所。また、武官の隊伍・行列。*三代実録「

天安二年一〇月一日」日有蝕之、六衛府見直於陣者賜絹綿各有差」*年中行事秘抄「一二月

「近衛等聞見夜中変異事、貞観式云、凡十二月晦日、差近衛四人、令聞見夜中変異、其名簿午刻

以前進内侍、酉刻候陣、随召帯兵仗参入、近衛陣分頭退出、元日平日、録夜中見聞之事、進

近衛陣」*古今「春下・八五」詞書「春宮のたちはきのぢんにて、さくらの花のちるをよめる（藤原

好風）」*延喜式「四五」左右近衛府「大儀、略」其供奉奉駕陣者、駕御後殿、即就本隊、礼畢駕還

如初、略還入本府、各撃鉦五下、解陣」*西宮記「三」賀茂祭「警固（略）上卿仰云、賀茂祭欲

為加故、如常固守奉礼、諸衛称唯、左廻出、入左近陣、小庭、右近陣、射庭、諸衛各門前立平張

往還人入、自中、解陣時同此儀、上卿仰云、陣解介」*北山抄「九」宿申「亥子時、左陣每刻夜

行、丑寅刻、右陣勤之」**〔名〕**（陣）の座（ざ）に同じ。*宇津保「吹上上」うこんのぞうきよはら

のまつかた、さんのしつかさの少将なかよりに、ちんにていふほに」*西宮記「二」除目「当日大臣

已下、自陣着議所」*江家次第「一八」同次位記請印「或記日、若上藤候陣者、先触案内」行

之」*中右記「元永二年二月一五日」大將着陣次第は、此殿原作法、先着本陣、次着公卿陣（宜

陽殿公卿座を指す）*平家「四」嚴嶋御幸「上達部陣にあつまで、ふるき事共先例にまかせておこ

なひしに、弁内侍御剣とてあゆみいづ」⑤内裏内重の内部、陣中。*宇治拾遺「二八」昔、晴明、ぢんに参りたりけるに、さき花やかに追はせて、殿上人の参りけるを見れば」⑥内裏諸門の異称に用いられる。例えば、建礼門は青馬陣(あおうまのじん)、朔平門は縫殿陣(ぬいどののじん)または北の陣、建春門は左衛門の陣、宣陽門は左兵衛の陣または東の陣、日華門は左近の陣ともよばれる。*枕「三」正月一日は「左衛門の陣のもとに、殿上人などあまた立ちて、舎人の弓どもとりて、馬どもおどろかしわらふを」*源氏梅枝「右近のちんの御溝水のほとりにならずらへて、西の渡殿の下より出づる汀ちかうづませ給へるを、惟光の宰相の子の兵衛のそう、ほりてまひれり」*猪隈関白記「正治二年五月二三日「余未時許参内、入自左衛門陣」*拾芥抄「中・宮城部「春花門(略)右近陣」⑦僧たちの出入口。*徒然草「三八」賢助僧正に友なひて、加持香水を見侍しに、いまだはてぬほどに、僧正かへりて侍しに、陣の外まで僧都みえず」⑧いくさ。戦い。合戦。*雑兵物語「上」此度之御陣の御供に、お挾箱を御ゆるされなきて、葛籠ごりを預申てせをつた」*南史「梁元帝紀」親臨陣督戰」[発音]標ア)⑨ア史)⑩京ア)⑪古辞書)色葉・文明・明応・天正・黒本・易林・書言)↓じん(字音語素)

しんでん(寢殿)

宇治拾遺物語 P 157、L 14・P 49、L 7

古今著聞集 P 322、L 7

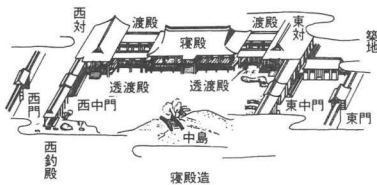
しんでん【寢殿】(名) (「寝」は居室の意) ①天子が日常寝起きた宮殿。南殿。*続日本紀「天平二〇年四月庚申「太上天皇崩於寢殿」*延喜式「五・神祇・齋宮寮「給主神司中臣、寢殿内雑物給

同司忌部」②平安後期に発達した貴族住宅の寢殿造りの母屋をいう。↓寢殿造り。*大和「七四」かの殿のしむてんの前にすこし遠くたてりける桜を、ちかくほり植ゑたまひけるが」*九条

家本延喜式裏文書「康保三年九月一日「清胤王書状(平安遺文一・二九七)「可葺修二条寢殿并東对等事 就中寢殿降雨滴湿、不可人居」*源氏「初音「西の対の姫君は、しんでんの南の御方に渡り給て、こなたの姫君御対面ありけり」*名語記「四「寢殿にたいせれば対也」③寝る部屋。寢室。*十卷本和名抄「三寢殿 四声字苑云寝ハ七稔反 禰夜ノ寢室也 一曰寢殿」*唐書「呉兢伝

「太宗悦至言、(略)有上書益於政者、皆黏寢殿之壁、坐望臥觀」[発音]標ア)④京ア) [古辞書]下学・文明・黒本・易林・書言

しんでん「つくり【寢殿造】(名) 古代・中世にわたる、京都の貴族の住宅の形式。中央の南向きの寢殿を中心とその東・西・北に對の屋(家族の住居)があり、その間を、廊下(「細殿」・「渡殿(わたのどの)」などという)で連絡する。寢殿の南は中庭をへだてて池があり、この池に面して東西に釣殿を建てる。邸の四方には築垣をめぐらし東西に門を置く。室内はすべて板敷で、几帳・ついたてなどでしきりをし、人のすわるところに畳を敷き、外部には部戸、妻戸を入れる。宮殿造り。*家屋雑考「一」寢殿造」



*金閣寺(三島由紀夫)「一・二層は寢殿造風につくり」[発音][標ア][京ア][京]

すいもん (水門)

宇治拾遺物語 P 422、L 10

すいもん【水門】[名] ①水量を調節するために、貯水池、運河、ダムなどの水の取入口、水流の途中に設けられた開閉できる門、扉などの構造物。*色葉字類抄「水門 スイモン」*宇治拾遺「二三

・一〇」様ありとおぼえて、引かたに出給に思かけぬ水門のあるよりひき出しつ」*日葡辞書「Su-

ihon(スイモン)。ミヅカド(訳)水を外に流す道、管」*読本・椿説弓張月拾遺・五四回「城溝(ス

イモン)の中に水音して、稚児(をさなご)を右手(めて)にさしあげ、潜(くぐ)り出るものありけり」

*漢書「召信臣伝「開通溝瀆、起水門提闕、凡数十处、以広漑灌」②社寺の中門と堂社との

間にある門。本柱および控柱、おのおの二本ずつあり、つまに唐破風のあるもの。転じて、一般に

中間の門。*虎明本狂言・酔はじかみ「すいもんのはしをするりとわたり」[発音](なまり)シモ(津

軽語彙)スイドン(静岡)[標ア][京ア][京][古辞書]色葉・文明・伊京・饅頭・黒本・書言

すいろう (透廊)

古今著聞集 P 149、L 14

すいろう [ラウ]透廊【名】「すきろう(透廊)の変化した語。

すきろう [ラウ]透廊【名】「すきわたどの(透渡殿)」に同じ。*古事談六・有国深慮不打上長押事

「西の千貫之泉透廊、南へ長く差出たる中程一間、不打上長押」*安元御賀記「東のすのこより御

前にひざまづきて後、西のすきらうにして、さねむね、ながかた、光まさうけとりつ」*幸若・しつ

か「わかみや殿のすきらうにて、神慮も諸人までも、目をおどろかすものならば」*運歩色葉「透

廊スキウラ」*武家名目抄「居処部・透廊」按、左右を覆はず見透さるるがごとく造りたるを透廊と

いふ例の幾を伊に通はして須伊廊と読也」[発音]スキロー[標ア][京][古辞書]伊京・饅頭

すきわたどの【透渡殿】[名] 両側に壁や戸を入れないで、あけ放

しのままにした渡り廊。寢殿の東西の廊で、南側にあるものを

透渡殿に造る。透廊。すいわたどの。*狭衣物語「二東の対

(たる)に続きたるすきわたどのより、歩み出で給へるを見れば」

*今昔「二五・六」寢殿の南面に春宮行かせ給ひけるに、西の透渡

殿に殿上人「三人計候ひけり」*玉葉「仁安二年正月二十八日「敷

公卿座於「簀子透渡殿等」*源平盛衰記「三澄憲祈雨事」「大

将は透渡殿(スキワタドノ)にぞ候はれる。

すのこ (簀子)

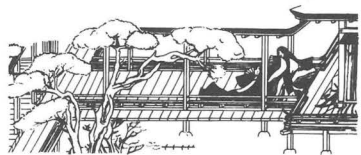
宇治拾遺物語 P 331、L 10・P 395、L 4・P 494、L 5・P 499、L 4・P 499、L 11・P 499、L 15

古今著聞集 P 211、L 17・P 470、L 12・P 492、L 16・P 495、L 9・P 499、L 5・P 499、L 7・P 519

L 12

すのこ【簀子】[名] ①角材。おもに、断面が方四寸(約二センチ)の木材。*延喜式「三四・木

工寮「桴担(略)簀子卅五枚。各長二丈一寸。方四寸」*正倉院文書「天平宝字六年閏二月二



透渡殿(西)〈年中行事絵巻〉

九日・造石山院所解案(大日本古文書一六)「箆子十七枚△三枝各長二丈四尺 四枝各長一丈五尺

十枝各長八尺▽並方四寸」*十卷本和名抄三「箆板敷附 蔣鮎切韻云箆ハ音責 功程式板敷云々
箆子云々 須乃古▽床上藉竹名也」②「すのこえん(箆子縁)」の略。*後撰恋三七七「詞書」人

のもとにまかりて、いれさりければ、すのこにふしあかしてかへるといひいれ侍ける」*宇津保一
俊蔭「屋戸共も毀ちとりつれば、ただ寝殿のひとつのみ、すのこも無くあり、ほどもなく、野の
やうに成りぬれば」*蜻蛉下・天祿三年「太刀、とくよとあれば、大夫とりて、箆子(スノコ)にか
たひぎつきてゐたり」*源氏絵合「殿上人は後涼殿のすのこに、おのおの心寄せつつさぶらふ」

③竹や木を間を少しづつ透かせて並べ、打ちつけたもの。水はけのよいようにしてある。流しなど
に使う。④劇場の舞台の天井。横に牛梁(うしばり)を渡し、ここに竹を張ったもの。[方言]①床下。

石川県鳳至郡440 三重県度会郡610 滋賀県愛知郡616 和歌山県日高郡682 香川県818 (すのこんし
た) 奈良県669 (すのんこ) 大分県宇佐郡長洲958 ②鯨の腹のうね形の皮の内側。和歌山県678 壱

岐934 [語源説] ②について (1)間がすけているところからスクの義。コはつけ字(日本釈名)。ス
キキ(透木)の義(日本語原字「林甕臣」)。②古くは箆のように竹を編んで作ったところから(箋注和

名抄・日本語源「貴茂百樹」。「発音(なまり)ザノコ(愛媛周桑)スナコ(紀州・和歌山県)」(標ア)④
[ア史] 平安◎◎◎(京ア)④ [古辞書] 和名・色葉名義・下学・和玉・文明・伊京・明心・天正・

饅頭・易林・書言
すのこえん【箆子縁】〔名〕箆子(角材)を並べて造った建物

の外側の濡縁(ぬれえん)。箆子。箆子敷。*虎明本狂言・
醉薰「すのこえんにかすこまる」*仮名草子・昨日は今日の

物語下「『さて、円福寺のえんは何にて候ぞ』と問ひければ
『すのこえんにて候』と云」 [発音(標ア)④]

すのこじき(箆子敷)
古今著聞集 P.163、L.13

すのこじき【箆子敷】〔名〕「すのこえん(箆子縁)」に同じ。*延喜式四・神祇・伊勢太神宮「修・飭神
宮調度、(略)高欄箆子敷釘覆金一百五十隻」*九曆九曆抄・天曆元年正月二日「拜礼管絃事依」

召候三南箆子敷云々」*後二条師通記「寛治五年七月二九日「奥座紫端置一枚也、設八帖也、東庇
敷小莖二枚、箆子敷三間并加庇敷莖云々」 [発音(標ア)④]

タ行
だいはんどころ(台盤所・大盤所)

宇治拾遺物語 P.218、L.8
古今著聞集 P.417、L.15・P.505、L.7・P.505、L.9

だいはんどころ【台盤所】〔名〕①台盤を置く所。宮中では清涼殿内の一室で、女房の詰所。臣下の
家では、食物を調理する所。台所。*宇津保蔵開上「中納言例より見奉らぬ人もおはしませずな

どのたまへば、だいはん所より参る」*源氏常夏「女御の御方の大はむ所に寄りて」*十訓抄「
一・雲客思出古歌詠初紅葉秀句「女房も台盤所に候ひて」②貴人の妻の称。奥方。みだいどころ。

平家一・我身栄花「御娘八人(略)一人は(略)花山院の左大臣殿の御台盤所にならせ給ひて」



箆子縁
(紫式部日記絵巻)

宇治拾遺一・一八「皮いぬ」の時はかりに台盤所の、胸をきりにきりてやませ給ひしかば」古辭

書天正・書言

たかつまど(高妻戸) → つまど

古今著聞集 P 375、L 14

たかゝつまど【高妻戸】名、高いところに作った妻戸。*古今著聞集一三・四七二「貞観殿の高妻戸より、をどりおりさせ給ひける」

たけおりど(竹折戸)

古今著聞集 P 357、L 3

たな(棚)

古今著聞集 P 351、L 2・P 419、L 7

たな【棚】名 ①物を載せるために、板などを水平にわたし、取り付けたもの。②祭壇の前に設け、祭器や食器などを置く台。また、屋内に取り付けた、神をまつるつり棚。*小川本願經四分律平安初期点「水の屋の中に別に架(タナ)を作りて安く応し」*源氏鈴虫「闕伽(あか)のたななどして、その方にしなさせ給へる御しつらひなど」*浮世草子・日本永代蔵上六・一「時に此親仁、工夫仕出して、七月玉祭(まつり)の棚(タナ)をくづして」*俳諧・猿蓑十五「棚に火ともす大年の夜(園風)」
③部屋や家具などの内外に物を載せるため、または装飾として、板、竹などを渡したもの。作り付けの化粧棚などの類と、移動できる棚厨子(づし)などの類がある。また、前面に戸をはめた類は戸棚という。名称は用途や構造、また、取り付けた位置などによるものが多く、多種にわたる。*十卷本和名抄上三庫 棚閣附 唐令云諸軍器在庫入音袴 漢語抄云豆八毛能久良 皆造 棚閣

△朋客二音 太奈 安置別異 *枕上九三・無名といふ琵琶の御琴を「宜陽殿(ぎやうでん)の」の「たなに」という言ぐさは、頭の中將こそし給ひしか *名語記上六「民の家の火たくうへにつれるたなをあまとなづく」*浮世草子・西鶴織留上五・一「又藤の棚(タナ)近くに、十日切(ぎり)の借銀(かしかね)して明暮十露盤(そろばん)に心をつくす坊主も有」*随筆・嬉遊笑覧上二上「今は床の脇には棚あり。よりにて床棚など並べ称す。もと棚と云ものは別にありて厨子たなと并べ称す。其棚は二階三階あり。是を居ゑ置て物を置く処に用ふ。書などを置をば今も書棚とて別にあり。この棚を床の旁に作り付にしたるなり。勝手には戸棚など云物も出来れり。今つけ鴨居の上に只一枚の板を横にわたして棚と云ものは昔は間木と云しにや」②「柵」とも和船の船側板の総称。近世の大型船では、船底より根棚、中棚、上棚の三階造りを通例とし、小船では根棚(この場合特に「かじき」という)と上棚の二階造りとする。上棚・中棚とも幅広く長い材のため数枚の板をはぎ合わせ一枚の板に造る。ふなだな。棚板。*栄花殿上の花見「船にことごとなるたなといふ物をかしく造りて」*観智院本名義抄「舷(タナ) フナバタ」*浮世草子・好色一代男上三・二「或日伴ひし人と棚(タナ)もなき舟飛ぶがごとく磯をおさせて」*和漢船用集上五・江湖川船之部「丸木船(略)其舟長く細く深くして、底より両側板丸くはき上(あけ)にて柵(タナ)なし」③和風建築の部材名。棟木(むなぎ)と平行して、垂木(たるき)を受けるためにかけ渡す長い角材。また、軒の柱の頂上に渡し小屋梁(こやばり)・垂木を受ける木材をいう。桁(けた)。*新撰字鏡「桁(けた) 二字介太 又

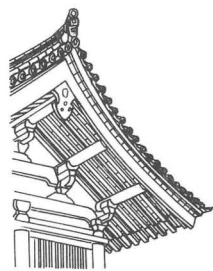
太奈」④「たなしり(棚尻)」の略。*雑俳・柳多留「四八」骨ふとの源氏やの字を棚へ上げ」*雑俳・柳多留拾遺「卷八下」提帯はふうのうまみを棚へ上げ」⑤長さ三尺(約九〇センチ)の木炭・薪を六尺の高さと幅に積みあげたもの。また、その単位。⑥水中における魚の遊泳層のこと。⑦山の岩場で、棚状になっている部分。⑧全体の地形が階段状をなす中で、ゆるい傾斜の部分。流水があるところと瀑となる谷筋や山の斜面。また、水深二百メートルまでのゆるやかな傾斜の海底部分。⑨陸棚(りくだな)、または大陸棚(たいりくだな)のこと。⑩刺網類で、浮子のついた網、または沈子のついた網をいう。⑪捕り縄をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕補注「古事記」上の「御倉板拳之神」板拳を訓みて多那(タナ)と云ふ」は「たな」が神名の一部に使われている。〔方言〕①魚群の来るのを見張る櫓(やぐら)。鹿兒島県肝属郡高山979 ②漁場。広島県厳島04 ③魚市場。広島県賀茂郡三津760 ④物を置いておく天井裏。神奈川県津久井郡城山283 ⑤二階。武蔵003 ⑥絶壁上の平地。福島県耶麻郡奥川016 ⑦谷から木材を滑らすために丸太をたてに並べた装置。広島県山県郡中野044 ⑧滝。神奈川県津久井郡285 ⑨船腹の横板。静岡県榛原郡地頭方047 三重県北牟婁郡04 ⑩薪などを積み上げた物。飛驒539 ⑪薪をたてよこ六尺に積んだ量。信濃102 青森県上北郡野辺地044 宮城県栗原郡141 ⑫炭にする材を高さ三尺長さ六尺に積み上げた量。伊豆大島304 〔語源説〕(1)イタナメ(板並)の略か〔大言海〕。(2)タカニハ(高場)の反〔名語記〕。(3)タナは空の意。空につるところから〔滑稽雑談所引詞林采葉集〕。(4)イタナ(板名)の義〔言元梯〕。〔発音〕(なまり)サナ(鳥取)〔標ア〕⑩〔ア史〕平安●●〔京ア〕⑩〔古辞書〕字鏡・和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

たるき(椽)

宇治拾遺物語 P 489, L 8

古今著聞集 P 467, L 16・P 522, L 5・P 522, L 6

たるき【垂木・椽・椽・架】〔名〕屋根面を形成するために、棟から桁へ渡す長い木材。はえき。たりき。*正倉院文書「雑材并檜皮和炭等納帳・天平宝字六年正月一五日(大日本古文书五)「架冊四枝(六枝各長二丈四尺、扉、方四寸、卅八枝各長一丈五尺、方三寸、直)」*十卷本和名抄「三」椽 釈名云椽(音衰)太流岐 楊氏云波間岐(在椽旁)下垂也 兼名苑云一名椽(音老)一名椽(音伝)間杵(唐韻云音人 漢語抄云間杵 太留木) *大慈恩寺三藏法師伝永久四年点「三」葢瑤暉に接り、椽(タルキ)繩彩に連れり」*栄花「玉のうてな(東向に十余間の瓦葺の御堂あり。たるきの端端は黄金の色なり)」*浮世草子・懐硯「一」椽(タルキ)をみかき軒をならべ煙寛(ゆたか)なる町づくり目だちけるに」〔発音〕(なまり)タリキ(富山県)タロキ



垂木 (奈良法隆寺鐘樓)

〔島原方言〕〔標ア〕⑩〔ア史〕平安○○●●〔京ア〕⑩〔古辞書〕和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・天正・饅頭・黒本・易林・書言

ちゅうもん(中門)

宇治拾遺物語 P 493, L 10・P 498, L 17

古今著聞集 P 274、L 10・P 274、L 14・P 318、L 9

ちゆうもん 【中門】^{【名】} ①表門より内方にある門。また、中和院の南門をいう。*続日本紀一靈龜

元年正月己亥「宴百寮主典以上並新羅使金

元静等中門、奏諸方樂」*江家次第七・

神今食中和院儀「左右近衛各一人、移入自」

掖門「開中門入神嘉殿之南中門也」*周

礼大官・關人「掌守王宮之中門之禁」②

南都六宗あるいは天台宗伽藍の金堂前方に

ある門。*西大寺資材流記帳上玉龜一一年

(寧楽遺文)「中門一字(長七丈八尺 広三丈)

東西脇門二字」③寢殿造の中門廊に開き、寢殿南庭の入口となる門。中門廊が短くなると、その

先端につくようになる。*東寺文書一延喜一二年七月一七日・七条令解(平安遺文一・二〇七)

「申立売買家券文事(略)中門志処」*蜻蛉中・天祿二年「ちかくなれば、ここなる男ども、中門お

しひらきて、ひざまづきておるに」*源氏末摘花「御車寄せたる中もむの、いといたう、ゆがみ

よろぼひて」④書院造で、主殿または広間の東南隅から突出した部分。寢殿造中門廊の名残り。

また主な座敷の前庭に入る庭の門もいう。*匠明「寢屋集」又当世大成広間にしては、中門をつけ

作るへし」*浮世草子・男色大鑑二三・五「下々残らず中門(チウモン)の外に追出し、書院に座して」

⑤茶室の外露地と内露地との間にある門。*源流茶話「扱、内露地のかまへは中門中くくり、猿戸、

境界と所有の物すきにより候へし」⑥東北あるいは新潟の民家で、主屋の隅から突き出した部分。

寝室・出入口あるいは厩として使う。[方言]①長屋の中央を通り口にした門。宮城県仙台153 ②主

屋に連続する突き出た形の支屋。山形県庄内165 福島県南会津郡檜枝岐195(ちようもん)新潟県

岩船郡412 長野県下水内郡515 ③たんすや寝具などを置く寝所。秋田市付近047 ④中の間。土佐

寺川郷181 [発音]チウモン(標ア)① [古辞書]色葉・文明・書言

ついたちしょうじ (ついたち障子)

古今著聞集 P 309、L 8・P 312、L 6

ついたちそうじ …サウジ【衝立障子】^{【名】}「ついたてしょうじ(衝立障子)」に同じ。*枕上三五・人の

家につきづきしきもの「侍の曹司。折敷。懸盤。中の盤。おはらき。ついたちさうじ」

ついたてしょうじ …シャウジ【衝立障子】^{【名】} 部屋の内

や縁に立てて置き、内部や隣の席との隔てとする家

具。下部に台がついていて立てられるようになって

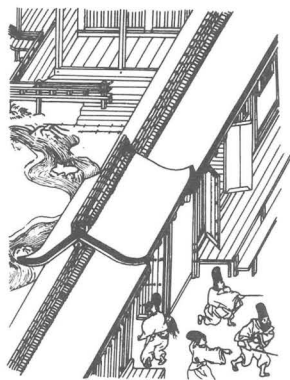
いる。元来は宮殿の調度としての移動用障屏具の一

つ。表面に絵や文字を書き、その絵様から駒形の障

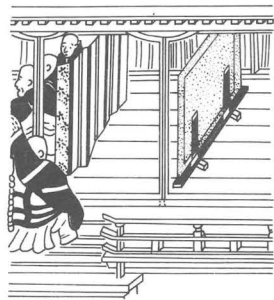
子、昆明池の障子などともいう。ついたち。ついた

て。ついたてそうじ。ついたちしょうじ。ついたち

そうじ。*大式集「ついたてしょうじの糸に紅葉ひま



中門①(年中行事絵巻)



衝立障子(年中行事絵巻)

なく散りかかり、滝おちたる山のもとに」*永昌記「嘉承元年七月二三日」馬道東西立同突立障子五基」*文明本節用集「衝立障子ツイタテシヤウジ 或作「歩障」又呼「座頭屏風」サテウヒヤウフウ云「歩障」也」〔発音〕ツイタテシヨージ〔標ア〕シヨ 〔古辞書〕文明・伊京・易林

つかばしら（束柱）

宇治拾遺物語 P 205、L 7

古今著聞集 P 467、L 16

つかばしら【束柱】〔名〕（古くは「つかはしら」とも）短い柱。特に、梁の上、または、縁側の下などに立てる短い柱。つか。*延喜式一七・内匠寮「束柱等料、歩板二枚」*十卷本和名抄一三「柱束柱附 説文云柱ノ音注 波之良 功程式云束柱 豆賀波師良ノ楹也」*宇治拾遺十五・六「ふるき物はいはじ、あたらしうしたるつかはしら、しとみなどをさへ破たきけり」*古今著聞集一七・六〇四「縁のつかばしらのかくれ」*紙上蜃氣「椽櫓（ツカハシラ 又作株櫓（略）短柱 ツカハシラ」

〔語源説〕(1)短くて、握んで測る意から、ツカム（握）の義（大言海）。(2)上下を衝き合った柱の意（日本語源「賀茂百樹」）。〔発音〕標ア〔ア〕史〕平安〇●十〇〇●（京ア）〔古辞書〕和名・色葉・名義・

下学・和玉・文明・伊京・明応・饅頭・黒本・易林・書言

つちど（土戸）

宇治拾遺物語 P 200、L 2・P 200、L 3

つちど【土戸】〔名〕①建物の一部が土間になっているとき、そこに設けられた戸。土妻戸と土遺戸がある。*台記「天養元年一月一日」依「為通申、令閉土戸、為不令下人見也」*宇治拾遺十五・三「高陽院のかたのつち戸より（略）、いそぎ参りて、土戸より参らんとするに、舍人二人入て、人ないれそと候とて」*御湯殿上日記「長享二年五月一日」かづきをぬぎて、その下にぬす。又かづきて御つまのつちとのとのくちにてぬぐ」②表面に泥土または漆喰（しっくい）を塗って作った引戸。*日葡辞書「Tchuido（ツチド）（訳）土を塗った戸。さらにまた、庭の戸」*浮世草子・本朝桜陰比事一五・四「念を入、内蔵におさめ置、（略）又土戸（ツチト）の封印は母かたの一門として付置」〔発音〕標ア〔ア〕

つちや（土屋）

古今著聞集 P 67、L 9

つちや【土屋】〔名〕①つちむろ。岩屋。土窟。*改正増補和英語林集成「Tsuchiya ツチヤ窟」

②壁土や砂などを売る人。また、その店。*改正増補和英語林集成「Tsuchiya ツチヤ 土屋（訳）土または粘土などを売る人」③「つちやぐら（土屋倉）」の略。*古今著聞集一・三〇「兵衛尉に成り侍らんとて当社の土屋を造進したりけり」*高野山文書「延元二年三月一日・又太郎垣内屋敷売券（大日本古文書五・一〇三三）」此四至内土屋かや屋在屋敷共此内なり」〔発音〕標ア〔ア〕 ②は

つばね（局）

宇治拾遺物語 P 136、L 4・P 167、L 4

古今著聞集 P 429、L 3・P 465、L 7

つばね【局】〔名〕①大きな建物の中で、臨時に簡単に仕切りをつけてしつらえた部屋。貴人などが

社寺に参籠、通夜するおりの仏堂内の仕切りなどもいう。*平中一七「この男のつぼねのまへに、女ども、立ちさまよひけり」*源氏花宴「きさらぎの二十日余り、南殿の桜の宴せさせ給ふ。后・春宮の御つぼね左右にしてまうのぼり給ふ」*源氏十玉鬘「右近がつぼねは、仏の右の方に近き間にしたり」*徒然草上三三八「所化皆覚えざりしに、つぼねの内より、『これこれにや』と云ひ出したれば、いみじく感じ侍りき」②宮中や貴人の邸宅などで、主としてそこに仕える女性の住む私室として、仕切りへだてた部屋。曹司(ぞうし)。*伊勢物語上三二「むかし、宮の内にて、あるごたちのつぼねの前をわたりけるに」*源氏賢木「かの、むかしおぼえたるほそどののつぼねに中納言の君まぎらはして入れたてまつる」*宇治拾遺上二九「例のことなれば、小舎人童(こどねりわらは)一人具して、つぼねに入りぬ」③②を与えられている女房・女官。*紫式部日記「消息文「ふとおしはかりに、いみじうなん才(ざえ)があると殿上人などにいひちらして、日本紀の御つぼねとぞつたりける」*俳諧・笈の小文「内侍・局・女嬬・曹子のたぐひさまさまの御調度もてあつかひ」④上流階級の女性を尊んでいう語。多く上に女性の名前を冠して用いる。*上杉家文書「享祿三年一月二五日・神余昌綱書状(大日本古文書一・三九九)「就御服御拝領御礼御申、(略)其外上臈御局已下御返事下申候」*徳川実紀「慶長八年八月一〇日」後に水戸中納言頼房卿と申けるは是なり。御生母はお万の局といふ」⑤御殿女中。長局。*雑俳・柳多留一「「手水組では無いかなど局いひ」*雑俳・柳多留一五「ぼたもちで字を書いたのをつぼね着る」⑥局女郎の部屋。また局女郎。*仮名草子・東海道名所記一「はな歌をうたひ席駄をひきづり、局(ツボネ)の口にたたち」*浄瑠璃・冥途の飛脚下「駕籠の簾を上げてさへ膝組交す駕籠の内狭きつぼねのありし夜の逢瀬に似たは似たれ共」⑦「つぼねじょうろ(局女郎)」の略。*浮世草子・好色二代男十五三「つぼねの金彌にのかせて、兩人入て跡をさし籠」*江戸惣鹿子名所大全十五「いわゆる太夫は三十七女かうしは二十六女(略)つぼねは五女三女」⑧美しく装った女性をいう、盗人仲間の隠語。(隠語輯覧)「方言①隠居部屋。隠居所。佐賀県藤津郡916 長崎県南高来郡926 五島044 壱岐934 宮崎県西臼杵郡椎葉964 ②分家。熊本県天草島954 ③離家。はなれ。長崎県南高来郡南有馬村大江930 語源説①つばやかに引キツボネタ所の意(年山紀聞・類聚名物考・玉勝間・尾崎雅嘉随筆・嬉遊笑覧・和訓栞(増補)・大言海)。②ツボは宮中の道をいう壺、ネは寝所の義(日本釈名)。③ツボは坪、ネは根の義。しきりを立てて居る意(它山石)。④人に仕えるものは帯も解かずツブネ(円寝)するところから(南留別志・難波江)。⑤ツカヘメオリネヤ(仕女下寝屋)の義(日本語原学・林麩臣)。⑥ツボメネ(茗宿)の義か(名言通)。⑦ツボミネル所の義か(和句解・冠辞考統貂)。⑧ツボナ(壺名)の義(言元梯)。⑨ツボネ(壺寝)の義(関秘録)。⑩家内をカギル(局)意から(貞丈雜記)。〔発音(標ア)⑩(ア史)江戸●●○(京ア)⑩ 古辞書色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・明心・天正・饅頭・黒本・易林・書言〕

つまど(妻戸)

宇治拾遺物語 P 205、L 6・P 213、L 5

古今著聞集 P 252、L 15・P 274、L 9・P 375、L 15

つまど【妻戸】■【名】①寝殿造りで、殿舎の出入口に設けた、両開きの板製の扉。*宇津保上

上上「東(ひんがし)のつまどのすだれあげて」 *今昔一三
 二「僧正、妻戸を開て呼び入る」 *平家一五・物怪之沙汰
 「入道相国帳台よりいでて、つま戸をしひらき、坪のうち
 を見給へば」 *親元日記「寛正六年八月一日」大門よりい
 て御興よせの妻戸より御持参云々」 ②家の端の方にある両
 開きの板戸。 *虎明本狂言「花子」それがしもゑこらゑひで、
 妻戸をことごとたたひたれば」 *歌謡・隆達節小歌集成
 「叩く妻戸は開(あ)けもせで、先づは明けたよほのぼのと
 明けた」 *俳諧・新花摘「もとより妻戸さうしかたくいまし
 めあれば」 *野菊の墓(伊藤左千夫)「吾吾一人は妻戸一枚
 を忍んで開ける程の智慧も出なかつた」 ㊦能楽曲名「雷電(らいでん)」の異称。「来殿」ともいう。



妻戸①(源氏物語絵巻)

金剛流。大宰府で没した菅原道真の怨霊が比叡山の座主法性坊尊意僧正のもとを訪ね、宮廷に雷
 となつて飛び入り復讐する意志を述べ、その援助を断わられると、怒つて妻戸に口にふくんだ石
 榴(ざくろ)の実を吹きかけ、それが火となつて燃え上がるのを見て消える。 *雑俳・柳多留上「四
 「妻戸見て残たざくろ喰人なし」 方言①家の裏の戸。岐阜県恵那郡548 ②縁側の開き戸。滋賀県

蒲原郡622 語源説(1)端に立てる戸であるから、ツマド(端戸)の義(類聚名物考・四方の硯・後松日
 記・大言海)。(2)陰陽の義から男戸に対するところからか(名語記)。 発音(標ア)㊦(ア)史江戸 ●

〇〇(京ア)㊦ 古辞書色葉・文明・伊京・明心・天正・饅頭・黒本・易林・書言

つまどぐち(妻戸口) → つまど

宇治拾遺物語 P 156、L 4・P 156、L 6・P 157、L 4・P 157、L 10・P 157、L 11

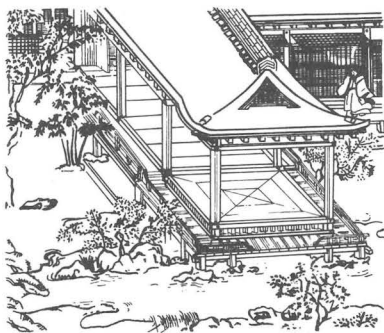
つまどぐち 【妻戸口】 【名】 寝殿造りなどの四隅の、妻戸になっている出入口。 *蜻蛉十・天祿三年
 「つまどぐちにたちて、『とくあけ、はや』などあなり」 *宇治拾遺上二・一五「父母もなくなりて、
 おくのかたには、姉ぞゐたりける。南のおもての、西のかたなる妻戸口にぞ、常々人にあひ、物
 いふ所なりけり」 発音(標ア)㊦

つりどの(釣殿)

宇治拾遺物語 P 415、L 7

古今著聞集 P 68、L 12・P 502、L 14

つりどの【釣殿】 【名】 寝殿造りの東西の対から出た
 廊の南端にあつて、池に臨んだ建物。魚釣りを楽し
 むところからこの名がある。 *宇津保・楼上上「その
 うへにつりどの建てられたり」 *蜻蛉十・天延二年
 「つりどのとおぼしきかうらにおしかかりて、中島の
 松をまぼりたる女あり」 *康平記「康平三年三月二
 五日」午剋渡御釣殿」 *太平記上二六「執事兄弟奢
 侈事」釣殿(ツリドノ)・渡殿・泉殿・棟梁高く造り双て、



釣殿(法然上人絵伝)

奇麗の壯觀を逞くせり」*随筆・貞丈雜記一四「釣殿(ツリドノ)と云亭の事也水辺に臨て立る鬼を釣る意也」*家屋雜考上「東西廊の南端、池に臨める所に、一の屋を構へ、是を釣殿といふ。旧記に、水面へつりおろしたるごとく作る故、此名ありとも、または釣を垂るる料に設けおく故、(此名ありともいへり)」**発音**〔標ア〕**〇**〔京ア〕**〇**〔古辞書〕色葉・名義・易林・書言

てんじょう (天井)
宇治拾遺物語 P 324、L 3・P 324、L 4

古今著聞集 P 270、L 15・P 270、L 16・P 270、L 17・P 271、L 5・P 394、L 10・P 469、L 12
てんじょう ……**ジャウ**〔天井〕**名** ①屋根裏をおおい隠し、塵よけ、保温のためなどに板を室内の上部に張つたもの。初めは天蓋として上から釣り、または柱を立てて上においたが、後には造りつけになつた。*正倉院文書「天平宝字三年三月・大仏殿廂絵画師作物功銭帳(大日本古文書・四)」「彩色天井板花壺方拾壺区別(方八寸)」*延喜式四・神祇・伊勢太神宮「造備雜物(略)天井一蓋。短床二脚」*二十卷本和名抄一〇「天井風俗通云殿舎作天井(俗云殿掌)菱藻水中之物以压火灾也」*宇津保楼上下(ろうのてん上には鏡がた・雲のかたを織りたる高麗錦を張りたり) *徒然草一五五

「天井の高きは、冬寒く、灯暗し」*文選注・張衡・西京賦「帶倒茄於藻井」善曰、今殿作天井、井者東井之象也」②物の最も高いところ。特に物の内部の高い所についていう。*義経記「七判官北国落の事」懸けさせたる笈のあしに(略)てんじょうには四尺五寸の大太刀をまよこさまにぞおきたりける」*親元日記「文明一五年五月一三日」御方御所様御蚊帳事(略)てんじょうのひろさ五尺四寸五分、御たけ六尺一寸五分、袋より下の事也」③からかさのてっぺんに当たる部分。*万金産業袋一「天井(テンジャウ)ばかり青を、紅葉といひ、ぐるりの青きを軒青(のきあを)といふ」④「てんじょう(天上)④に同じ。*売ト先生糠俵(後編・下)「恐ろしき物の天井(テンジャウ)は色なり」*滑稽本・七偏人上二中「おれかうみえても色師の天井(テンジャウ)といふだつたからネ」

⑤物価や相場などの最高値。*大坂繁花風土記「米方言言「天井」**語源説**(1)火事を恐れ、井の形を模して造つたところから「塵袋」。(2)天井竿の意。天井竿は井の形に組んだところから(松の落葉)。

発音テンジヨウ(なまり)テンジャ(島根)テンジユ(津軽語彙)テンジュー(熊本分布相)テンジヨ
〔岐阜・伊賀・紀州・伊予〕テンジヨ(愛知・和歌山県)〔標ア〕**〇**〔京ア〕**〇**〔古辞書〕和名・色葉・下学・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

と(戸)

宇治拾遺物語 P 242、L 2・P 294、L 6・P 504、L 5
古今著聞集 P 467、L 10・P 515、L 14

と【戸】**名** ①出入する所。出入口。戸口。かど。もん。*古事記上「中」縷四縷、矛四矛を天皇の御陵の戸(と)に献り置きて」*十卷本和名抄上三「戸 野王案在城郭曰門在屋堂曰戸」*源氏空蟬「ただ今、たちならび給ひなむ、といふいふ、われも、このとより出でて来」*東西南北「写謝野鉄幹(貧女)門(ト)に立ちて、物乞ふためと、玉琴を、世のたらちねは、教へざりけむ」 ②出入口、窓に取りつけて開閉できるようにしたもの。引き戸、開き戸などがある。とびら。ドア。*古事記「中歌謡「己(おの)が命(を)を盗み死せむと後(しり)つ斗(ト)よい行き違(たが)ひ前つ斗(ト)」

よい行き違ひ」*万葉一四三・四六〇「誰そこの屋の戸押そぶる新嘗(にふなみ)にわが背を遣りて齋(いは)ふこの戸を(東歌)」*竹取「立て籠めたる所の戸、すなはち、ただ開きに開きぬ」*海道記「鎌倉遊覧」夜の戸ものどけき宿に開くかなくもらぬ月のさすにまかせて」*読本・兩月物語「浅茅が宿」屋根は風にまくられてあれば有明月のしらみて残りたるも見ゆ。家は扉(ト)もあるやなし」①(門)河口や海などの、兩岸が狭くなっている所。水流が出入する所。水が流れている所。瀬戸。川門(かわと)。水門(みと)。*古事記下・歌謡「由良の斗(ト)の斗(ト)中の海石(いくりに)触れ立つ浸漬(なづ)の木のさやさや」*万葉上三・二五五「天離る夷の長道ゆ恋ひ来れば明石の門(と)より大和島見ゆ(柿本人麻呂)」*平家上八・水嶋合戦「備中国水嶋がとに舟をうかべて、八嶋へ既によせむとす」④(戸が音をたてることから)風の吹く日をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕〔語源説(1)トムル(止)の義(国語本義・大言海)。ト(止)の義(言元梯)。(2)トヅル(閉)の義(箋注和名抄・大言海・日本語源・賀茂百樹)。(3)トホル(通)の義(日本釈名・名言通・和訓栞・言葉の根しらべ・鈴江潔子)。トホリグチ(通口)の下略(日本語原学・林夔臣)。(4)戸を立てれば殿となる所からトノ(殿)の反(名語記)。(5)トントんとたたく音から(国語溯源・大矢透)〕。〔発音〕
〔標ア〕①(ア史)トー平安・江戸②(京ア)トー③(古辞書)字鏡・和名・色葉・名義・和玉・文明・伊京・天正・饅頭・黒本・易林・書言

どう(堂)

宇治拾遺物語 P 255、L 9・P 257、L 10・P 280、L 8・P 302、L 10・P 303、L 7・P 310、L 3・P 501、L 5

どう【堂】■【名】①土台の上に高く作った建物。客に接したり、礼楽を行なったりするものについていう。表御殿。正殿。*法隆寺伽藍縁起并流記資財帳「天平一九年(寧楽遺文)「堂式口一口金堂(略)一口食堂」*十卷本和名抄上三「堂 釈名云堂(徒郎反)猶堂々高頭貞也」②神仏をまつる建物。*書紀「推古一四年四月(岩崎本室町時代訓)「丈六の銅像を元興寺の金堂(こんタウ)に坐(ま)せさす。時に仏の像、金堂の戸よりも高くして堂に納(いる)ること得ず」*伊勢物語「七七」そごぼくのささげものを木のえだにつけて、だうのまへにたてたれば」*源氏夕顔「いたやのかたはらにだうたてておこなへるあまのすまひ、いとあはれなり」*徒然草「一六二」池の鳥を日来飼ひつけて、堂の中まで餌をまきて」③朝廷で、長官の執務する所。④公会堂・議事堂など、多人数が集会する建物。*おとづれ(国木田独歩)上「耳を聳つるまでもなく堂(ダウ)をもるは渠(かれ)の美はしき声」■〔接尾〕屋号・雅号、または建造物の名前などに添えて用いる。「静嘉堂」「大雅堂」「哲学堂」など。〔方言〕【名】①部落の彼岸念仏をする場所、日待ちや常会などの集会にも使う。埼玉県秩父242 ②学校の古名 奈良県吉野郡十津川669 〔発音〕トー(なまり)ダー(島根)●は〔標ア〕①(京ア)②(古辞書)色葉・文明・明心・饅頭・黒本・易林・書言 ↓どう〔字音語素〕

どうしゃ(堂舎)

古今著聞集 P 52、L 16

どうししゃ【堂舎】【名】(「とうじしゃ」「どしじしゃ」とも)。「堂」は大きな家、「舎」は小さな家の意(

大小の家々、建物。特に、仏堂や僧の住宅。社寺の建物。*今昔上二・二〇「其の後より寺只荒(あ

ばれ)に荒あばれ)て、堂舎・僧房も皆失せにければ」*高野本平家一山門滅亡「堂舎(タウジャ)高くそびへて、三重の構を青漢の内に挿み」*日葡辞書「D. P. (タウジャ)。イエイエ」*読本・椿説弓張月一前・一五回「当国の在庁散位高季が造りたる、松山の堂舎(タウジャ)に在しけるが」

【発音】ドーシャ(標ア)【京ア】【古辞書】下学

とのいどころ(殿居所)

宇治拾遺物語 P 370、L 11・P 372、L 17・P 373、L 3

とのいどころ とのゐ【宿直所】【名】①警衛守護や遊びのために、内裏で宿泊するとき用いる部屋。大臣、納言、藏人頭、近衛大将などが宿直にあたるどころ。直廬(ちよくろ)。*大和一七一「さて左衛門の陣に、とのゐ所なりける屏風・畳など持ていきて」*源氏一真木柱「とのゐところに居給て、日ひとひ、きこえ暮らし給ことは」*宇治拾遺一八「わかくて衛府の藏人にぞ有ける時、殿居所より女のもとへ行とて」②神社で神官が宿直にあたる建物または部屋。とのいや。③江戸時代、武家屋敷および奉行所の番所の称。家中の侍や役人が、治安を守るために宿直にあたったところ。*狂歌・徳和歌後万載集一〇「何がしのとのゐ所にかつほのさしみをおくるとて」【発音】

【標ア】【古辞書】色葉

とびら(扉)

古今著聞集 P 312、L 11

とびら【扉】【名】①(戸片)とひらの意。開き戸の戸。*書紀(神代下)鴨脚本訓「良(やや)久(ひさ)しくして美人(をとめ)有りて闔(トヒラ)を排きて出づ」*新撰字鏡「偏(門)木也 止比良」

*書言字考節用集一「闔(トヒラ)〔礼記註〕門戸之蔽以木曰闔以竹葦曰扇」*読本・椿説弓張月一前・四回「慌しく門扉(トビラ)をうち敲き」②書物の見返しに次にあつて、標題などを記したページ。③雑誌の本文の前にある第一ページ。④廊下・縁端をいう、盗人仲間の隠語(隠語輯覧)。

【語源説】(1)トヒラ(戸枚)の義(名言通・和訓栞)。(2)トヘラ(戸片)の義(言元梯)。トヒラ(戸片)の義(大言海)。(3)ヒラは、物の薄いさまをいう語(東雅)。(4)トヒラキギ(戸開木)の略、またはトヒラ

キイタ(戸開板)の略(日本語原学・林夔臣)。(5)戸翻の義(箋注和名抄)。

【発音】(なまり)トベラ(紀州・和歌山県)【標ア】【京ア】【史】平安・鎌倉・江戸●●○(京ア)【古辞書】字鏡・和名・色葉・名義・和玉・文明・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

ナ行

なかど(中戸)

古今著聞集 P 357、L 4

なかど【中戸】【名】①部屋と部屋との間の戸。中の戸。*源平盛衰記上三三・光隆卿向木曾許事「穴面白の大戸やせとや、中戸(なかど)にも絵書きたり」②商家などの建物で、表口(見世)から店庭を経て中庭にはいる仕切り戸。遊里では、遊女の密会の場所であった。*浮世草子・好色一代男一七・五「うれしき物、其日の男はやういぬるの、中戸(ナカド)であふての別れ、やり手煩うて居る内、かさの高き文」*浮世草子・好色具合上下「つとえしやくして笠とりて中戸(ナカト)より内にいりたり」*浄瑠璃・冥途の飛脚上「表に馬の鈴の音、こりやこりや駄荷が着いたぞ。中戸中戸

戸と声高に手ん手につづらかたげこむ」〔発音〕(標ア)因〔古辞書〕和玉

ながはし(長階)――はし

古今著聞集 P 494、L 14

ながはし【長橋】(名) ①長い橋。*新古今(雑中・一六五四)「まきのいたも苔むすばかり成にけりいくよへぬらんせたのながはし(大江匡房)」*太平記(俊基朝臣再関東下向事)「駒も轟(とろ)と踏鳴す勢多の長橋打渡り」*浮世草子「好色盛衰記」(一)「水の水上浪かけて、長橋(ナガハシ)越て、ひがしづめ」②宮中の清涼殿の東南隅から紫宸殿の御後(ごご)に通じる細長い板の橋。*小右記(末元五年三月一日)「不給宣命、仍居長橋」*源氏(桐壺)「なかはしよりおりて、舞踏し給」

*太平記(四〇)「最勝講之時乃鬪諍事」紫宸殿の東、薬殿の前には南都の大衆、西の長階(ながはし)の前には山門の衆徒列立したり」③五節(ごせち)の時、清涼殿の東北隅から承香殿にわたす仮の橋。丑(うし)の日の帳台の試みに天皇が常寧殿に出御する時、寅(とら)の日の御前の試みや卯

(う)の日の童女御覽に、舞姫や童女が清涼殿に上る時に用いる。*江家次第(一〇)「五節帳台試」自(清涼殿東廂北階下)到(承香殿坤角、仮作)長橋(略)主上出御、(略)経(仮長橋并承香殿南實子同馬道后町廊、常寧殿馬道等)入(御於師壺寝)」*讃岐典侍(下)承香殿のきざはしより清涼殿のうしとらのすみなるなかはし、とのつままでわたすさまむかしながら也」④「ながはし(長橋)の局」の略。*御湯殿上日記(大永七年九月七日)「なかはし久しきもうきにて、昨日こときれたるよしきこしめす」〔発音〕ナガハシ(標ア)⑤

ながはしの局(つばね)(宮中の長橋のそばに局があったところから)「こうとう(勾当)の内侍」に同じ。*新野問答(一八)「勾当内侍(略)今世長橋の局と申と、同じ事にて候」〔古辞書〕言

ながし(長押)

宇治拾遺物語 P 135、L 5

ながし【長押】(名) ①日本建築で、柱と柱との間を、柱の側面から横に打ちつけた材木。とりつければ箇所によって頭長押・内法長押・腰長押・切目長押

(縁長押)・地長押・蟻壁長押・天井長押などがある。

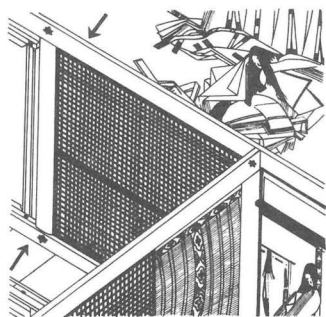
寝殿造りでは内法長押を上長押、切目長押を下長押という。奈良時代初期には扉を釣り込むためのものであったが、まもなく、軸組を固めるために用いられるようになり、中世以後は次第に装飾化した。*

正倉院文書(天平宝字六年三月二五日・山作所告朔解

(大日本古文書五)「長押八枝(六枝各長二丈二尺

二枝各長一丈二尺)並広七寸 厚四寸半」*十卷

本和名抄(三)「長押 功程式云長押(奈計之)」*源氏(帚木)「中将の君はいづくにぞ。人げ遠き心地して、ものおそろし、といふなれば、ながしの下(しも)に人々臥して、いらへすなり」*徒然草(一〇五)「御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物語するさま



長押①(枕草子絵巻)

こそ」*太平記「五・中堂新常燈消事」承塵(ナゲシ)の方より其の色朱を指たる如くなる鼠狼(いたち)一つ走り出て」*浮世草子・好色一代女「一・「寝間とおもふ、なげしのうへに瀑板(しゃれいた)の額掛けて、好色菴とするせり」*夜明け前(島崎藤村)第二部・下「一三三」古い鎗の掛った長押(ナゲシ)」②帯、特に女の帯をいう、大工や盗人仲間などの隠語。*新ばん普請方おどけ賛詞「おびを、なげし」*当世花詞粹仙人「おびを、なげし」[補注]根は元来方立(ほうだて)のことで、「匠明」ではこれを、「なげし」と誤用している。[発音]ナゲシ(標ア)㊦(ア史)平安〇〇〇〇(京ア)

㊦ [古辞書]和名・色葉・名義・下学・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

ぬのしようにじ (布障子)

古今著聞集 P 309、L 13・P 311、L 9

ぬのしようにじ [シヤウジ]【布障子】【名】白布で張つて、墨絵などを描いた襖(ふすま)障子。ぬのしようにじ。*江家次第「八・相撲召仰」置殿東廂布障子二枚於北廂」*俳諧・小町踊「春・上」天の戸に立しかすみや布障子(満直)」[発音]ヌノシヨージ(標ア)㊦

ぬのそうじ [サウジ]【布障子】【名】「ぬのしようにじ(布障子)」に同じ。*枕「一七七六」位の蔵人などは「伊予簾かけわたし、ぬのさうじはらせて住まひたる」

ぬりごめ (塗籠)

宇治拾遺物語 P 403、L 6・P 431、L 13・P 431、L 16

ぬりごめ 【塗籠】【名】①周囲を厚く壁で塗りごめ、明り取りをつけ、妻戸を設けてそこから出入りするようにした室。納戸(なんど)の類。塗蔵。*竹取「女、ぬりごめの内に、かぐや姫を抱へてをり」*太平記「一三・北山殿謀叛事」数千の兵殿中に乱入て、天井塗籠(ヌリコメ)打破」*山吹(室生犀星)「六・あんないされた塗籠(ヌリゴメ)は、三方に棚をしつらへ」②「ぬりごめどう(塗籠籐)」の略。*長門本平家「一〇・石橋合戦事」ぬりごめの弓に、十三束をよひきて射たりければ」*仮名草子・犬枕「したきる物は子持の古筵・夜半の尻簞・ぬりごめの弓」*浄瑠璃・堀川波鼓「中」引きもちぎらぬ持弓の、重籐ぬりごめ其の数は、いさや白木に側黒の」[発音]ヌリゴメ(標ア)㊦(京ア)㊦

㊦ [古辞書]色葉・下学・文明・伊京・明応・易林・書言

のき (軒・簷)

宇治拾遺物語 P 245、L 13・P 390、L 14・P 417、L 7・P 424、L 14

古今著聞集 P 219、L 16・P 328、L 2・P 411、L 12・P 468、L 16・P 471、L 6・P 471、L 12

のき 【軒・檐・簷・宇】【名】①屋根のふきおろしの端で、壁や柱から外に張り出した部分。また、ひさし。*靈異記「下・一〇」住室の翼階(やのノキ)に置きて、真福寺本訓釈「翼階、ヤノノキ」*十卷本和名抄「三・檐」唐韻云檐(八余廉反)宇亦作簷能歧(屋檐也)「*名語記「五」家ののきのみじかきをけらばのみじかきなどいへる」*謡曲・黒塚「人の死骸は数知らず、軒と等しく積み置きたり」②「のきした(軒下)」に同じ。*今昔「二五・六」辰巳の方なる御堂の西の檐(のき)に狐の出来て臥し丸(まる)びて臥せりけるに」*今鏡「一〇」敷島の打聞「すみわびて我さへのきのしのぶぐさしのぶかたがたしげきやどかな」*源平盛衰記「三三」頼朝征夷將軍宣事「寝殿に高麗縁のたたみ一帖敷て兵衛佐座せられたり。軒(ノキ)に紫縁の畳一帖敷て康定を居(すゑ)」[方言]①家のひさしの下。

愛知県北設楽郡振草570 ②家の裏手の土地。「のきの畑」長野県伊那郡044 静岡県磐田郡水窪568
③戸外。家の付近。岐阜県郡上郡541 ④物置用の二階。島根県鹿足郡津和野724 語源説(1)ノビキ
(延木の意か「大言海」)。(2)屋外にのけてあるところから、ノキ(退・除)の義か「円珠庵雜記・名言
通和訓栞・大言海」。発音(なまり)又キ「福島・東京・八丈島・岐阜・伊賀・鳥取」又キ「岩手・仙台音
韻・秋田・山形・福島」(標ア)①(ア史)平安●●(京ア)①「古辞書字鏡・和名・色葉・名義・下字・和
玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言
八行
はいでん(拜殿)

古今著聞集 P 337、L 7

はいでん【拜殿】〔名〕 拜礼を行うために、神社の本殿の前方に設けられた社殿。拜の屋。*新古今
「神祇・一九一〇詞書」熊野へまうで侍りしに、略「拜殿のなげしにかきつけてはべりし歌」*平家
「四・還御」一首の歌ようで、拜殿の柱に書つけられたり」*浮世草子・好色一代男「四・三」和莚中
沢の拜殿(ハイデン)にて物せし時」 発音(標ア)①②(京ア)①②「古辞書」文明・伊京・明応・天正・
饅頭・黒本・易林・書言

はし(階)

宇治拾遺物語 P 499、L 5・P 499、L 6

古今著聞集 P 178、L 2

はし【階】梯【名】 ①(階) 庭から屋内に上る通路として設ける階段。きざはし。きだはし。あがり
だん。*十卷本和名抄上三階 考声切韻云階(音皆 俗為階字 波之一訓之奈)登堂級也」 *大
慈恩寺三藏法師伝永久四年点一「王又跣(かたぶ)き跪きて、登(ハシ)と為りて、法師をして躡
(ふ)むて上らしむ」 *太平記四〇・中殿御会事「階(ハシ)の西の間より三間北にして」 ②(梯)は
し。かけはし。*書紀一垂仁八七年二月(熱田本訓)「神庫(ほくら)高しと雖も我能く神庫の為に
梯(ハシ)を造(たて)る」 *新撰字鏡「梯 波志」 *大鏡上二時平「ものすすけてみゆるところの
有ければ、はしにのぼりてみるに」 *太平記上三・大森彦七事「警固の者共、梯(ハシ)を指て軒
の上に登て見れば」 方言はし。沖繩995(ばし) 鹿児島県喜界島991 語源説(1)ハシ(橋)と同義
(「東雅」)。また、ハシ(梯)はハシ(間)の義(「大言海」)。(2)ハシ(端)の義(「名言通」)。(3)ハシ(間)の義
(「言葉の根しらべ」鈴江潔子)。発音(ア史)平安●●(京ア)①②「古辞書字鏡・和名・色葉・名義・和
玉・文明・明応・饅頭・黒本

はしがくしのま(階隠の間) → はしのみ、ひがくしのま

古今著聞集 P 378、L 10

はしがくしの間(ま) 階隠の柱の中心にあたる庇(ひさし)の間。階を昇り、簀子(すのこ)をへて庇
にはいる所。日隠しの間。階(はし)の間。*狭衣物語「四」寝殿の南面のはしがくしのま、一間ば
かりあけて、人はあるなるべし」 *今昔上二七・二「寝殿に上りて中の橋隠の間を上げさせて見
れば、障子破れ懸りて皆損じたり」

はしがくし【階隠】〔名〕 建物の階の前に二本の柱を立てて作りかけた庇(ひさし)。階が雨に濡れ

ないよう設ける。社殿のものは向拝(こうはい)ともいう。日隠し。
*源氏十末摘花「はしかくしのもと紅梅、いと疾(と)く咲く花にて」
*文明本節用集「階隠 ハシガクシ」
*三内口決「殿並家作等事 階蔵。大臣家に有之、為、可、由、行幸也」

【古辞書】下学・文明

はしの子(階の子) → はし

古今著聞集 P 378、L 13

はしの子(子) 階の一段一段。きざはしの段。また、はしごの一つ一つのががり段。
*古今著聞集「一四・四七五」二人の童、寝殿の前をへて階の子をななめにおりくだりて」
*日葡辞書「Faxi-noco (ハシノコ)」
*仮名草子・長者教「はしの子を一つつあがるに、いそがんとて二あがる」
【方言】

はしご。山梨県南巨摩郡奈良田510 鹿兒島973 口永良部島990

はしのみ(階間) → はしがくしのま

古今著聞集 P 494、L 13

はしの間(ま) 「はしがくし(階隠)の間」に同じ。
*大和・一七三「はしに梅いとおかしう咲たり」
*読本・春雨物語・天津処女「後涼殿のはしの間の簾のもとに」

はしら(柱)

宇治拾遺物語 P 180、L 13・P 183、L 2・P 327、L 13・P 372、L 14・P 402、L 5・P 436、L 3・P

489、L 9

古今著聞集 P 471、L 4・P 523、L 13・P 523、L 15

はしら【柱】■【名】①建築物または橋・門・鳥居その他の工作物で、直立して上部の荷重を支える

細長い材。支柱。
*書紀「仁徳元年正月(前田本訓)「桷(はへき)。梁(うつはり)、柱(ハシラ)、楹

(うたち)、藻飾(ゑかきかさ)らず」
*十卷本和名抄「三、柱 束柱附 説文云柱(音注 波之良 功

程式云束柱 豆賀波師良(楹也 唐韻云楹(音盈)柱也」
*源氏「賢木」かめにささせて、ひさし

はしらのもとにおしやらせ給ひつ」
*栄花「松の下枝(御船とどめて御覧すれば、古き橋の柱ただ

一残り」
②帆柱・電柱など、直立して物を支え持つ材。支柱。
*蜻蛉「上・天曆一〇年「丁のはし

らにゆひつたりし小弓の矢とりて」
*大観本謡曲「檀風「これは柱を立て、帆を引きたる船にて

候程に」
③神霊の依代(よりしろ)として立てる柱、または墓碑、標柱など、物を支持する目的を

もたない細長く直立した材。
*古事記「上・其の島に天降り坐して、天の御柱(みはしら)を見立て、

八尋殿を見立てたまひき」
*靈異記「上・一「雷の落ちし同じ処に彼の墓を作りたまひ、永く碑文

の柱を立てて言はく雷を取りし栖軽が墓といふ」
④柱状に、細長く、直立したもの。また、柱のよ

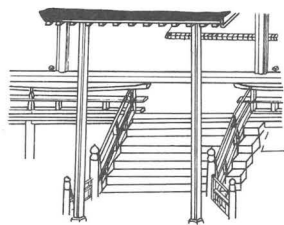
うに支持の用をなすもの。特に、「貝柱」をさしている場合もある。
*西大寺本金光明最勝王経平

安初期点「九「舌黒み鼻の梁(柱)欽(たふ)れ」
*康頼本草「本草虫魚部上品集「海蛤 味苦鹹平无毒。

不拘時採之。和波末久利乃波之良」
*歌謡「田植草紙」昼歌四番「いねのはしらをおしたおめぬは

ごかれぬ」
*続末枯(久保田万太郎)「はしらとさいまきが少し残つてゐます」
⑤国・家・その他の

団体や集合体で、中心となつてそれを支える人を、たとえていう。たよりとなる人。大黒柱。支



階隠(年中行事絵巻)

柱。*平家五・五節之沙汰「ひらやなるむねもりにかにはぐらむ、はしらとたのむすけををとして」*光悦本謡曲・藤戸「杖柱共頼みつる、海人のこの世を去りぬれば」*竹沢先生と云ふ人（長与善郎）竹沢先生東京を去る・六「人類の柱になってほしく思ふのです」⑥全体の支えとなる物事をたどえていう。中心となる重要な物事。支柱となる物事。「日本文化の柱」*役者論語あやめぐさ「めづらしくせんとして、おかしみをたてとし、つよい事を柱（ハシラ）とせば」*西洋道中膝栗毛（仮名垣魯文）四・総編本文読例「西洋案内を柱とし、趣向は友人砂燕子が航海の日記を礎とせり」

⑦洋装本の欄外にある見出し。書名、章名、主要項目などの書かれることが多い。⑧和装本の各丁（ページ）の折り目に当たる所。【または】内に書名・巻数・丁数などが書かれる。版心。目。

⑨粥の中に入れる餅。⑩「はなばしら（鼻柱）③」の略。⑪刑務所で説教をする牧師など、教誨師（きょうかいし）をいう。因人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕

⑫「接尾」神仏、または高貴な人を数えるのに用いる語。現代では、神格にだけ用いる。*古事記上「此三柱（はしら）の神は、並大神と成り坐して、身を隠したまひき」*書紀「持統三年正月（北野本訓）「仏像一軀（ハシラ）」*宇津保一藤原の君「大将殿にこそ君だちあまたおはすれ。皆みかたにとりし給へれど、いまひとはしらはまします」*今昔「五・二二」忽に其の所に十柱の賢者を請じて」

〔語源説〕ハシは屋根と地とのハシ（間）にある物の意。ラは助辞（古事記伝・雅言考・国語の語根とその分類・大島正健・大言海・日本語源・賀茂百樹）。ハシラ（間等）の義（言元梯）。②ハは永久の義、シラはシルシ（標）の義（古史通）。

③ハシラズ（葉不知）の義（和句解・百草露・紫門和語類集）。④家のアシであるところから、ハシはアシの義。ラは助辞（日本釈名）。⑤ハリシロ（張代）の義（日本語原字・林夔臣）。⑥梯座の義（和訓栞）。⑦ハシルシ（端記）の義（名言通）。⑧バザラ（待日羅）の転で、堅固不壊の意（和語私臆鈔）。

〔発音〕なまりハシタ（鹿児島・NHK・鹿児島・大隅）ハッサ（山形）ハツシャ（岩手・仙台音韻・仙台方言・山形・山形小国・福島）〔標ア〕■は⑩（ア史）平安○○○江戸●○○○（京ア）■は⑫〔古辞書〕和名・色葉・名義・下字・和玉・文明・天正・饅頭・黒本・易林・書言

はなちいで

古今著聞集 P 363, L 11

はなちいで【放出】〔名〕建具を取り払うこと、あるいは取り払った部屋。また、寝殿から離れた部屋もいう。はなちで。はなちでづくり。*九曆・九曆抄・天徳元年四月二二日「放出事、未刻依垣下等催着座、其座在母屋故出三間之中間、王卿座在東庇南東辺、北西面」*源氏若菜上「みなみのおとどの西のはなちいでにおましょそふ」*家屋雑考上「放出（ハナチイデ）放出と云ふは、寝殿の放出、西の放出、中の放出など見えて、一間の名なり」

はり（梁）

古今著聞集 P 100, L 11・P 100, L 17

はり【梁】〔名〕①柱の上にはり渡し、上に束や叉首をおき屋根をささえるための横木。上部の重みをささえたり、柱を強固にしたりするために用いる。うつばり。*和玉篇「梁ハリ」②細長い材料がそれぞれの支点でささえられ、材に直角または斜めに曲げの力がはたらいているもの。ピーム。〔語源説〕柱の上に内から張って棟を受けることから、ウツバリ（内張）の義（国語の語根とそ

の分類「大島正健」。ウツバリの略〔箋注和名抄・大言海〕。(2)家の中をはることから〔理齋隨筆〕。

〔発音〕(なまり)ハル〔岩手〕〔標ア〕四〔京ア〕四〔古辞書和玉・書言

はりのと(張の戸)

古今著聞集 P 190、L 3

ひがくしのま(日隠の間) → はしがくしのま

古今著聞集 P 323、L 7・P 323、L 8

ひがくしの間(ま)「はしがくし(階隠の間)に同じ。*殿暦・康和四年三月二〇日「御輿寢殿の日かくしの間の土に寄たり」。*古今著聞集一・一・四〇八「雪をおほく盛りて、日隠の間の御縁に置きて」

ひがくし【日隠】〔名〕①日よけ。日おおい。*木工権頭為忠百首「月」暮にけり西のひかくし取のけ

よ月を厭ふと人もこそ見れ(源仲正)。*嵯峨本方丈記「南に仮のひかくしをさし出して、竹のすのこを敷き」。*浮世草子・万の文反古四二「昼の出茶屋が日かくしの許にはしりつけば」②寢殿

造りなどで、階の上へ張り出した庇(ひさし)。はしがくし。*申楽談儀勸進の舞台・翁の事「舞台の日がくしの柱の中てよりは側へ寄せて」〔方言〕①野天の火葬場に火葬する時につくる簡単な

屋根のような日おおい。新潟県中頸城郡426 富士市在432 ②埋葬した墓の上に立てる塔婆。七本
ぼとけ。盛岡113(ひかくし) 青森県上北郡野辺地117 〔古辞書和玉・易林・書言

ひさし(廂・庇)

古今著聞集 P 51、L 7・P 112、L 4・P 264、L 9・P 297、L 6・P 314、L 2・P 499、L 12

ひさし【庇・廂】〔名〕①建物の内部で、母屋(もや)の外側の部分。母屋だけの建物が外方に発展してできたもの。ひさしのま。*十卷本和名抄一三「庇 唐韻云庇入必至反 比佐之 陰入於禁反」

庇蔭也。*蜻蛉十下・天祿三年「南のひさしにいでたるに」。*源氏「桐壺」おはします殿の東のひさし
東むきに倚子立てて。②牛車の窓や家の出入口・縁側・窓などの上に突き出した、日や雨を防ぐ小

屋根。*小川本願經四分律平安初期点「有る比丘房を作りて、四辺に檐(ヒサシ)を出して、上に蘭
楯を安かむと欲ふ」。*延喜式一四一「彈正台、凡内親王(略)乘糸葺有庇(ひさし)之車」。*源氏一

宿木「ひさしなき糸毛三つ」③軍帽・学帽・烏打帽などで、額の上に突き出ている部分。*夜行巡査
(泉鏡花)「制帽の庇(ヒサシ)の下に」。*虞美人草(夏目漱石)「中折れの茶の廂(ヒサシ)の下か

ら」④前髪の部分。*歌舞伎・有松染相撲浴衣(有馬猫騷動)「五幕」私も出張った庇をひっかかれ、
額がひりひりいたします」⑤「ひさしがみ(庇髪)」の略。*妻(田山花袋)二九「瘦削の庇髪(ヒサシ)

に結った面長な顔」。*明暗(夏目漱石)一八七「其髪は通例の庇(ヒサシ)であった」〔語源説〕(1)ヒサ
シ(日差・日指)の義(和句解・筆の御霊・嬉遊笑覧・名言通・和訓栞・言葉の根しらべ・鈴江潔子・大言

海)。(2)ヒササへ(日支)の約〔箋注和名抄・大言海〕。(3)ハリ、サシ、セリの反ヒシシの転〔名語記〕。
(4)ヒサヘカザシ(日塞鬚)の義〔日本語原字・林夔臣〕。ヒセキ(日塞)の義〔言元梯〕。(5)ヒは日、サシ

は隔てさえぎる義〔筆の御霊・嬉遊笑覧〕。(6)日差覆の約〔国語の語根とその分類「大島正健」〕。〔発音〕
(なまり)イイサシ〔和歌山県〕イサシ〔紀州・和歌山県〕サーシ〔千葉〕サシ〔埼玉・千葉・飛騨・島根〕シ
アシ・シャシコ〔津軽語彙〕シサシ〔東京〕シシャシ・シャシ〔岩手〕シャシ〔NHK(岐阜)〕シユヤシ

〔秋田〕スサシ〔志摩〕ヒヤシ〔岩手〕秋田・山形・福島フサシ〔秋田〕茨城・越後・鳥取・熊本分布相〕フ
サス〔千葉・鳥取〕〔標ア〕①〔ア史〕平安●●●〔京ア〕①〔古辞書〕字鏡・和名・色素・名義・下学・和
玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

ひとや（人屋）

宇治拾遺物語 P 230、L 8・P 503、L 14・P 504、L 2・P 504、L 4

ひとや【人屋・囚獄・獄】〔名〕罪人を捕えて押しこめておく建物。牢屋。獄舎。*書紀神功四七年

四月〔熱田本訓〕「則ち新羅の人、臣等を捕へて圜圍（ヒトヤ）に禁（かた）む」*十卷本和名抄十五

「獄 四声字苑云獄∧語欲反 比度夜∨牢罪人所也唐韻云圜圍∧靈語二音∨獄名也」*御伽草子・

酒吞童子」とられてまします女房たち、人屋のうちよりころび落ち」〔発音〕〔標ア〕①〔ア史〕平安

●●●〔京ア〕①〔古辞書〕和名・色素・名義・和玉・易林・書言

ひろびさし（広庇・弘庇・広廂）

宇治拾遺物語 P 213、L 5

古今著聞集 P 309、L 8・P 361、L 12・P 471、L 12

ひろびさし【広庇】〔名〕寢殿造りで、庇の外側一段低い板張りの吹放しの部分。その外に簀子敷が
ある。広軒。*狭衣物語「御前のひろびさしに、太政大臣の権中納言〔略〕若上達部、あまた候給に」

*宇治拾遺十五・九「露を分てのぼりたれば、広びさし一間あり。妻戸に明障子たてたり」〔発音〕

〔標ア〕①〔古辞書〕書言

ひわだ（檜皮）

古今著聞集 P 474、L 11

ひわだ 〔はだ〕【檜皮】〔名〕①檜（ひのき）・杉・榎（さわら）などの樹皮。屋根に葺き、腰壁に用い、また

檜皮（まいはだ）と共に火繩の原料とした。*延喜式上四・木工寮「三尺檜皮九百圍」*宇津保一

楼上上「楼のこゑにひはたをば葺かで」*平家三・三「檜皮ふき板のたぐひ、冬の木葉の風にみだ

るるが如し」②「ひわたぶき〔檜皮葺〕の略。*法隆寺伽藍縁起并流記資材帳「天平一九年二月一

一日〔寧楽遺文〕「壹口木屋〔略〕式口客房〔略〕已上並葺檜皮」*宇津保一藤原の君「それは大殿町な

れば、板屋なく、ある限りひはたなり」*義経記上六・関東より勧修坊を召さるる事「ひはたの御山

莊を造りて入れ奉り」③蓑（かさね）の色目の名。諸説あるが、普通には、表は黒みがちの蘇芳

（すおう）、裏は縹（はなだ）。四季を通じて中年以上の人が着用するものという。*胡曹抄「衣色

事〔略〕檜皮表蘇芳、くろみあり。裏花田」*随筆・反古染「上古の檜皮の衣面蘇芳に黒みを付、裏花

田也」④「ひわだいろ（檜皮色）」の略。*宇津保一「国護下」下仕八人ひはたの唐衣、袴ども着たり」

*浄瑠璃・傾城反魂香「中供女中の出で立ちや、地黒地浅黄紅ひはだ右近の馬場にぞ着給ふ」〔発音〕

〔なまり〕ヒワ〔岡山〕〔標ア〕①〔京ア〕①〔古辞書〕色素

ひわだや（檜皮屋）

古今著聞集 P 522、L 2

ひわだや 〔はだ〕【檜皮屋】〔名〕①檜皮で屋根を葺（ふ）いた家。檜皮葺きの家。*延喜御集「ふりぬ

とてわれにはたたふひはだやのはなちてこそ思ふつらなれ」*海人藻芥「武士の家には不造」檜

皮屋、皆板屋作なり、然、近年称「將軍家渡御之在所」、各構「檜皮屋」畢。②「ひわだだいく(檜皮大工)」に同じ。*浄瑠璃・用明天皇職人鑑・職人尽し「吉野うるしの塗師屋、まきゑ屋・ひわだ屋に」

【発音(標ア)】①は㊦②は㊧

ふうりゆうだな (風流棚)

古今著聞集 P 419、L 6

ふうりゆうだな フウリウダナ【風流棚】(名) 意匠をこらした装飾のしたる棚。風流。*吾妻鏡「磨仁

元年二月三日「風流棚二脚、各飭金銀、置和漢書」。*古今著聞集「一六・五三二」風流棚を召され

たりけるに」【発音】フリーユダナ(標ア)㊦㊧

ふきいた (葺板)

宇治拾遺物語 P 489、L 4・P 489、L 7・P 489、L 8

ふきいた【葺板】(名) 屋根を葺く板。屋根に葺いてある板。屋根板。*六条修理大夫集「ふき板の

われてもりくる月かげの恋しき人と思はましかば」*平家「三・廳」檜皮ふき板のたぐひ、冬の木葉

の風にみだるるが如し」【発音(標ア)】㊦㊧(京ア)㊦【古辞書】色葉

ぼう (坊)

宇治拾遺物語 P 276、L 11・P 291、L 2・P 294、L 2

古今著聞集 P 81、L 8・P 343、L 3・P 456、L 12

ぼう【坊】(名) ①唐の都城制にならってつくられた条坊の制で、平城京、平安京を、朱雀大

路を中心に左京、右京のおの東西に四坊に区画したもの。また、その大路をいう。南北に分か

つ条に対する。*延喜式「四二・左右京職」凡京中衛士仕丁等坊不「得商売」。*口遊「凡一条之内

有四坊。一坊之内有十六町」②条里制で、坪(つぼ)の称。*東寺百合古文書「八九・天平二〇年二

月一七日・弘福寺牒(古事類苑・政治三〇)「大和国広瀬郡庄家田(略)廿条五里六坊三段百冊歩」③

「春宮坊(とうぐうぼう)」の意から、転じて東宮(皇太子)をいう。*宇津保「国譲下」同じ日ぼうを

すゑなりぬれば」*源氏「桐壺」坊にも、ようせすはこの御子のゐ給べきなめりと」④僧侶の居

所。転じて僧侶をいう。また、僧の名に添えて用いる。房。*大和「一六八」山にぼうしてゐて、

言の通ひもえせざりけり」*枕「二〇」正月に寺にこもりたるは「御供の人は、かのぼうになどい

ふ」*平家「一」俊寛沙汰鶴川軍「老僧誰々ぞ。(略)宝台坊」⑤男の子を親しみ呼ぶ称。頭髮をの

ばさず、その頭が僧に似ているために言ったもの。江戸では時に女の子をいうこともあった。*

滑稽本・浮世風呂「前・上」坊(ボウ)はおとっさんにおんぶだから能の」【接尾】①人の名に付け

て、人を親しんだり、軽くあざけったりする意を表わす。*人情本「春色梅児誉美」後「九駒」お長

さん、コレお長ぼうや」②人の様態を表わす語に付いて、そういう人の意を表わす。「赤ん坊」

「暴れん坊」「朝寝坊」「けちん坊」など。【方言(名)】①男の子。少年。幼児。千葉県 261 富山県 東礪波郡

438 山梨県 039 長野県 西筑摩郡 532 飛騨 155 岐阜県 536 名古屋 050 三重県 南牟婁郡 615 愛媛県 831

大分市 959 ②末子。すえっこ。長野県 西筑摩郡 532 ③長男。山形県 庄内 165 ④兄。筑紫 194 宮崎

県 西臼杵郡 椎葉 964 ⑤男の子が自分のことをいう語。福井県 462 愛媛県 大洲 831 高知県 840 ⑥女

児が自分のことをいう語。福井県 462 【発音】ボー(なまり)ポッコ(秋田)●は(標ア)困(ア)史平

安○●(京ア)困 [古辞書]色葉・書言 ↓ぼう[字音語素]

ほこぎ(矛木)

宇治拾遺物語 P 294、L 3

ほこぎ【矛木・鉾木・榎木】〔名〕①ほこの柄に用いる木。*延喜式上二神祇・臨時祭「凡梓木千二百卅四竿。讃岐国十一月以前差綱丁進納」②欄干の一番上の横木(手すり)。普通は円形断面とする。*今鏡上ハ雁がね「大方。早業をさへ双びなくし給ひければ、反のかへりたる沓はきて、勾欄のほこぎの上歩み絡ひ」*宇治拾遺一八・七「陽勝仙人と申仙人、空を飛て略おりて、高欄のほこ木のうへに給ぬ」③(榎木)鷹狩の鷹を止まらせておく鳥居形のほこの上縁。*禰津松鷗軒記「たいほこの事きり二寸八分。たて木四尺一寸。ほこ木の長さ七尺五寸」④ほこのような形をした木。[発音]ホコギ〔標ア〕☐①

ほこら

古今著聞集 P 337、L 5

ほこら【祠・叢祠】〔名〕(ほくら(神庫)の変化した語)神をまつる社殿。神社。多くは、小さなやしろをいう。*太平記上九・高氏被籠願書於篠村八幡宮事「甲を脱て叢祠(ホコラ)の前に跪き」*運歩色葉「宝倉ホコラ。禿倉同」[方言]①ほら穴。大分県大分郡959 ②谷。兵庫県飾磨郡家島654 [語源説]①ホクラ(神庫)の転。(箋注和名抄、筆の御霊・国語学通論、金沢庄三郎・大言海、綜合日本民俗語彙)。またホは秀の義(類聚名物考、和訓栞)。②ホソクラ(細座)の義(日本釈名・紫門和語類集)③ホキクラ(祝坐)の約(菊池俗言考)。ホギクラ(祝庫)の義(国語学通論、金沢庄三郎)。④フルコハレミヤ(古壞宮)の義(日本語原学、林甕仁)。[発音](なまり)オコクラ〔老岐〕ホクラ〔岩手〕〔標ア〕①(京ア)① [古辞書]天正・書言

マ行

まき(間木)

宇治拾遺物語 P 100、L 13・P 104、L 7・P 104、L 11

まき【間木】〔名〕(まきとも)妻戸上の長押(なげし)の上などに設けた棚のようなもの。元旦の戴餅、齒固めの鏡餅などを飾る。*蜻蛉中・天祿二年「数珠(ずず)も、まきにうちあげなど、乱(らう)がはしきに」*名語記一五「障子、遺戸のかも井のうへを、まきとなづくる、如何。答、まきは間木也。この柱より、かの柱までわたせる木なればまき也」[方言]①屋根裏に渡した木。はり。盛岡¹³ 秋田県鹿角郡154 ②馬屋などの屋根裏にもうけた小部屋。青森県南津軽郡115 [発音]マギ〔標ア〕☐

まくばしら(幕柱)

宇治拾遺物語 P 269、L 17

まくばしら【幕柱】〔名〕幕を張るための柱。まくぐし。*宇治拾遺一七・六「富小路の大臣の大甕に〔略〕幕はしらを蹴折りて」*俳諧・おくれ双六「春法の花や七宝粧巖の幕柱(如柳)」[発音]〔標ア〕☐

まじひさし(孫庇)

古今著聞集 P 198、L 4・P 492、L 16

まごびさし【孫庇・孫廂】**【名】**①寢殿造りの建物で、廂の間の外側に設けられたへや。清涼殿の孫廂は著名。*廬山寺文書「天祿四年五月三日・天台座主良源遺告(平安遺文二・三〇五)」「横河定心房・檜皮葺屋一宇・母屋五間、庇四面、孫庇三面、孫々庇一面」*江家次第「一・内侍所御神樂」自清涼殿孫庇・経長橋并南殿北簀子綾綺殿東南渡殿等、筵道」*弁内侍寛元五年「清涼殿のまごびさしに人々あまたあそぶ中へ」②寢殿造りの建物で、母屋の外側をとりまく庇のさらに外側に出した庇。清涼殿のは、母屋の庇の檜皮葺(ひはだぶき)に対して板庇であったという。又庇。ひろびさし。【発音】マゴビサシ(標ア)☐

まど(窓)

宇治拾遺物語 P 446、L 12

まど【窓・窗・牖】**【名】**①室内への採光、通風のため、また外の様子をのぞくためなどに、壁、あるいは屋根につくり設けたあな。形、構造などによって種々の名称がある。*新訳華嚴経音義私記「窓闔交映 上末士、闔小室」*延喜式・祝詞・大殿祭(九条家本訓)「掘り堅めたる柱・桁・梁・戸・牖(マト)の錯ひへ古語にきかひといふ」動き鳴る事なく」*山家集下「山深みまどのつれづれ訪ふものは色づきそむる黄櫨の立枝」②盗人仲間の隠語。①月夜をいう。「日本隠語集」②目をいう。

【隠語輯覧】語源説(1)セバト(戸)の略転(日本釈名)。セマト(狭戸)の略(紫門和語類集)。②ヒマド(ロロ(隙所)の略(類聚名物考)。③マド(間門)の義(燕石雜志)。マト(間所)の義(言元梯)。マド(間戸)の義(和句解・名言通・和訓栞・国語の語根とその分類・大島正健)。マトト(又戸)の略。また目戸の転(名語記)。ミヤリト(見遣戸)の義(日本語原・学・林饗臣)。⑤あかりを得ることがアマト(天戸)の略か(国語本義)。【発音】(なまり)マロ(島原方言)マンド(志摩)☐(標ア)☐(ア史)平安室町☉(京ア)☐【古辞書】和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言みぎり(砌)

古今著聞集 P 446、L 12

みぎり【砌】**【名】**(「水限(みぎり)」の意で、雨滴の落ちるきわ。また、そこを限るところからという)☐軒下などの雨滴を受けるために石や敷瓦を敷いた所。*万葉「二三三三四」九月(ながつき)の時雨の秋は大殿の砌(みぎり)しみみに露負ひて(作者不詳)」*十卷本和名抄「三三三三三」切韻三階(音皆俗為階字 波之一訓之奈)登堂級也 兼名苑云砌一名階(砌音細 訓美岐利)☐大鏡十五・道長上「仁寿殿の東面の砌のほどに」☐転じて、庭。また、境界。*千載序「ももしきの古き跡をば、紫の庭、玉の台、千とせ久しかるべきみきりと、みがきおきたまひ」*太平記「三九・法皇御葬礼事(砌(ミギリ)を遶る山川も、是を悲しみて雨となり、雲となるかと恠まる」☐あることと行なわれ、または、あるものの存在する場所。その所。*東寺百合文書「い・康和元年閏九月一日・明法博士中原範政勘文案(大日本古文書一・一)」「東寺是桓武天皇草創鎮護国家砌也」*高野本平家「二・燈炉之沙汰(光耀鸞鏡(らんけい)をみがいて浄土の砌(ミギリ)にのぞめるが」とし」

④あることと行なわれる、または存在する時。そのころ。*百座法談「三月二十七日」このみきりも、定めて過去の四仏あらはれ給ふらむを」*太平記「一・書写山行幸事(法華読誦の砌(ミギリ)に

は、不動・毘沙門の二童子に形を現じて仕へ給ふ也」**■**水辺。水ぎわ。*性靈集一九・高野四至啓
白文「見_レ砌中四月、知_レ普賢之鏡智」。*仮名草子・薄雪物語下「あるひは説法受衣の庭もあり、あ
るひは念仏三昧のみぎりも有り」**■**語源説(1)ミギリ(水限)の義(名言通・和訓栞・言葉の根しらべ・
鈴江潔子・日本古語大辞典・松岡静雄・大言海)。(2)水キリの義。キリは走り流れる意(筆の御靈)。
(3)ミギリ(見際)の義(紫門和語類集)。(4)水を切る意(国語の語根とその分類・大島正健・大言海)。(①④に
ついて)(1)ミは発語。ミリは限の義(国語の語根とその分類・大島正健・大言海)。(2)そのころの意
を其の左右(ゆんでめて)というところからミギリ(右)の義か(志不可起)。**■**発音ミギリ(標ア)⑩

④(ア史)平安・鎌倉○○○(京ア)⑩(古辞書)和名・色葉・名義・和玉・文明・明心・天正・饅頭・黒本・
易林・書言

みずぐち (水口)

古今著聞集 P 300、L 14

みずぐち みづぐち 【水口】【名】(「みずぐち」とも) ①水を引き入れる口、または落とす口。水の出る口。

みなくち。*日葡辞書「Mizuguchi (ミツグチ) 訳「水の出る口」*物類称呼一「水口 みなくち

苗代へひく水くち也(略)東国にて、水口(ミツグチ)と称す」②台所の水をくみ入れる口。また、

台所。*歌舞伎・浮世柄比翼稲妻(鞘当)「大切」大柱、吊り物にて水口を見せ」*妻(田山花袋)四

二「水口(ミツグチ)から下駄を突懸けて」**■**方言①泉。わき水。熊本県天草島938(みずぐち)熊

本県阿蘇郡938(みどつふんち)鹿児島県喜界島991 ②田へ水を引き入れる口。(みずぐち)熊本県

南関947 ③田の水口。徳島県美馬郡祖谷809(みずぐち)静岡県川根560 大分県959 **■**発音(標ア)⑩

(京ア)⑩

みずしどころ (御厨子所)

宇治拾遺物語 P 305、L 17

みずしどころ みづし 【御厨子所】【名】 ①宮内省の内膳司に属し、天皇の御膳を調進し、節会などで

酒肴を出す役所。別当・預・小預などの職員を置く。*延喜式一・神祇・四時祭「大殿祭(略)畢次至

湯殿、懸_二玉四角、次懸_二廁殿四角、次懸_二御厨子所四角」*枕十五六・殿上の名対面こそ「みづし

所の御膳棚(おものだな)に沓おきて、いひのしらるるを」*拾芥抄「中宮城部「御厨子所 四位

殿上人為_二別当、以_二民部大輔五位為_レ預也、在_二後涼殿西庇、以_二内膳、内蔵、造酒、大膳、及諸

御厨、衛府御贄・供・朝餉及朝夕御膳」②貴人の家で家の中の、食事を調理する所。台所。*宇津

保一吹上上「これはおほい殿。(略)みづし所のさうしめの、うちはやぎてあり」*宇治拾遺一九二

「親のみずし所に使ひける女の、むすめのありとばかりは聞きけれども」**■**発音(標ア)④ **■**古辞書

文明・書言

むね (棟)

宇治拾遺物語 P 436、L 3・P 489、L 9

古今著聞集 P 283、L 14・P 328、L 2・P 392、L 17

むね【棟】**■**【名】 ①屋根のもつとも高い所。屋根の背にあたる部分。また、そこに渡す材である棟

木(むなぎ)のことをもいう。*正倉院文書「天平宝字六年七月二一日造石山院所返抄(大日本古

文書五「宗一枝 長六丈方八寸」 *新訳華嚴経音義私記「棟宇 上都弄反、屋穩也(略)倭言牟年」 *宇津保一吹上上「これは北方の御私物(みわたくしもの)、綾・錦・絹・綿・糸・練(かとり)など、むねと等しう積み取り納めぬる倉なり」 *方丈記「たましきの都のうちには棟を並べ葺(いらか)を争へる高き賤(いや)しき人の住ひは」 ㊦転じて、屋根の棟に当たるような部分の名称として用いる。

①牛車(ぎつしや)の屋根の上に、前後に渡した木。 *枕一九九・五月の御精進のほど「車の簾、かたはらなどにさしまりて、おそひ・棟などに、ながき枝を葺きたるやうにさしたれば」 ②刀剣などの背。刃の反対側をいう。 みね。 *義経記「一義経鬼一法眼が所へ御出の事「持ち給へる太刀のむねにて一打(うち)も当てられさせ給ふな」 *日葡辞書「カタナノ Eune(ムネ)」 *滑稽本・浮世床「一上「打鍵やア出刃庖丁のむね打(うちん)でエ度々(たびたび)ンのウ疵(きず)とがんめ」 ③櫛(くし)の背。齒の反対側。 *歌舞伎・東海道四谷怪談「一幕「母様のお形見の、三光のこの差し櫛物好きなされし菊重ね。胸(ムネ)に工風の銀細工」 ㊦「接尾」家屋・建物を数えるのに用いる。

「土蔵一むね」「二むね並んだ長屋」 [方言]①刃物の背の部分。徳島県805 ②櫛の齒に対する背の部分。 みね。「くしのむね」老岐934 ③田のうね。熊本県南関947 ④田畑のうね。秋田県平鹿郡154 石川県鹿島郡440 山口県「畑をひとむねつくる」74 ⑤あぜ道。岩手県紫波郡050 [語源説]①ムネ

(身根)の義(大言海)。②山の峯のように屋の最も高いところから、ミネ(峯)の転(日本釈名・和語私臆鈔・家屋雑考・和訓栞・言葉の根しらべ・鈴江潔子)。③ムは高い意、ネは屋根の義(東雅)。④マスナメ(増並)の反(名語記)。⑤その形から、胸の義(名言通)。⑥ムネ(項)の義(言元梯)。⑦ウナ(項)の転で、ミネ(峯)と同語(日本古語大辞典・松岡静雄)。⑧ムはツツム、ネはヤネの義(和句解)。 [発音]■は(なまり)ウネ(富山礪波・鳥取・広島県)オネ(鳥取)ミネ(岩手・富山礪波・伊賀・紀州和歌山県) (標ア)⑩(ア史)平安●●(京ア)⑪ [古辞書]字鏡・和名・色葉・名義・和玉・文明・伊京・天正・饅頭・黒本・書言

むねかど (棟門)

古今著聞集 P 492、L 7

むねかど【棟門】『名』門の一種。二本の柱を立て、屋根が切妻破

風造りのもの。むねもん。むなもん。むなかど。 *今昔一六・

三三二「大なる棟門有り」 *高野本平家「三・有王僧都死去、棟門

(ムネカド)平門(ひらかど)の内に、四五百人の所従眷属に圍繞

せられてこそおはせしか」 *とはすがたり「四「むねかとのゆゑ

ゆゑしきがみゆれば」 *日葡辞書「Munecado(ムネカド)タカキ

イエ アリ」

もや (母屋)

宇治拾遺物語 P 133、L 9・P 499、L 7

古今著聞集 P 92、L 16・P 314、L 2

もや【母屋・身屋・身舎】『名』①家屋の中心となる部分。庇(ひさし)に対していう。庇との間に間仕切はないが、使用上の格差があった。母屋と庇は日本建築の内部空間を規定する根本形式で、



棟門(年中行事絵巻)

住宅では室町時代になくなったが、社寺では江戸時代まで行なわれた。おもや。*宇津保祭の使「もやの御簾に壁代かけ、御簾の内に四尺の御屏風ども立てわたしたるうち」*枕「三九・節は五月にしく月はなし「御葉玉とて、色々の糸を組み下げて参みさせたれば、御帳たてたるもやのはしらに、左右につけたり」*宇治拾遺「二・一「母やのきはにかけたる簾をばおろして」②住居として用いる家。物置小屋、離れなどに対していう。おもや。ほんや。*名語記「六「家のもや、如何。答、母屋とかける歟。但もやは本屋。もとやなるべき歟」*易林本節用集「身屋」モヤ家（イエ）他 和訓」*俳諧・新花摘「袖の花やゆかしき母屋の乾隅」③棟（むね）や軒桁（のきげた）に平行して、垂木（たるき）を支えるために渡した横木。もやげた。④大工の用語。建物で、軒の内側の部分。[方言]①母屋（おもや）。長野県南佐久郡044 ②雑具を入れる室。奈良県吉野郡野迫川669

③屋根につける小さな家屋状の煙出し。宮城県栗原郡細倉141 [語源説]①ムヤ（身屋）の転（嬉遊笑覧・大言海）。モヤ（身屋・最屋）の義（日本語原学「林饗臣」）。ムヤ（身屋）の義。またムロヤ（室屋）の約か〔古事記伝〕。②オモヤ（母屋）の義（類聚名物考・俚言集覧）。③オモヤ（面屋）の義。またミヤ（身屋）の転（家屋雑考）。④モヤ（本屋）の義〔名語記〕。[発音]（なまり）ムヤ（鳥取）〔標ア〕団（京ア）〔古辞書〕書葉・文明・伊京・明心・天正・黒本・易林・書言

おもや【母屋・主屋】〔名〕①寝殿づくりなどの建物の中央の部分。もや。廊、庇（ひさし）などに対していう。*竹取「おもやの内には、女ども番におりて守らす」②屋敷の中で、世帯主の住む主要な家屋。本宅。ほんや。納屋（なや）、離れなどに対していう。*浮世草子・世間胸算用「一・四「まん丸一年此銀をあそばして置たる利銀を、急度（きつと）おもやからすまし給へ」*読本・椿説弓張月後・一七回「児（ちご）は母屋（オモヤ）にも居らず」*郊外（国木田独歩）「一「食事は運んで上げましよといふのを、其には及ばないと、母屋（オモヤ）に食べに行く」③一族、または一つの店の中で主となる家や店。本家。本店。おもだな。分家、支店に対していう。*浮世草子・好色一代女「四・四「第一内かたは恠気（りんき）ふかし面屋の若い衆と物云事も嫌ひ給ふなり」*浄瑠璃・生玉心中「中「惣じてそこは出見世で火を焼（たく）事も御法度、をもやは松屋町九之助橋の角」④（囚人を隠居、刑務所を別荘というのに対して）警察署、警視庁などという、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧〕*自由学校（獅子文六）檻の内外「もう、オモヤ（警視庁）じゃ会えねえかも知れねえな」⑤食事どきに酒が出ることをいう、盗人仲間の隠語。〔日本隠語集〕[方言]①のれんを分けられて独立した番頭などに対してその主家。大阪638 徳島県805 ②分家などに対して本家。新潟県412 富山県434 石川県449 岐阜県007 尾張584 三重県松阪602 奈良県吉野郡十津川674 和歌山県676 大阪041 京都044 兵庫県赤穂郡049 島根県邑智郡718 備後74 広島県748 徳島県805 愛媛県松山832 高知県土佐郡846 熊本県天草島栖本954 大分県959 宮崎県西臼杵郡961 [語源説]①オモは母の義から、主なものを示す義となったもの。上古の母系中心時代の思想から生じた語〔幽遠隨筆・国語拾遺語原考「久門正雄」〕。②モヤ（母屋）に尊称のオ（御）を冠した語〔嗚呼矣草〕。③オモヤ（面屋）の義〔名語記〕。[発音]（なまり）オメー〔越後〕オンヤ〔南知多〕〔標ア〕団（京ア）〔モ〕〔古辞書〕書言

もろおりど（諸折戸）

宇治拾遺物語 P 474、L 15

もろりおりど 〔諸折戸〕〔名〕二枚開きの折戸。左右に開く折戸。*宇治拾遺一四・一〇「下部を走らするに、六条坊門万里小路辺に、古たるもろり戸の中へおち入にけり」*海人藻介「武士の家には不造檜皮屋、略不立棟門、皆もろり戸也」*瑤囊鈔一三「権衡は、はかりの形歟。常に左右折戸(モロヲリト)と云門を権衡門と云也。唐の称に似たるか故也」〔発音〕〔標ア〕〇

もんこ・もんと(門戸)

古今著聞集 P 536, L 15

もんこ【門戸】〔名〕①門と戸。家の出入口。かどぐち。*玉葉一「文治五年八月六日」問門戸、下格子、已経旬日。*平家七・忠度都落「五条の三位俊成卿の宿所におはしてみ給へば、門戸を閉ぢて開かず」*名語記一六「門戸をたてあくる義によせば、あくは開也」*孟子「尽心上」昏暮叩人之間戸、求水火無弗与者、至足矣。②物事の入口。初歩。入門。*本朝文粹九・於左監門宗次将亭文聰講令詩序(大江以言)「政教之門戸、理乱之枢者也」*どちりなきりしたん(一六〇〇年版)一〇「よのさからめんとをうけ奉るしたち、もんこなり」*授業編一「漢土にても丘上大人の書を以て小児の書字の門戸(モンコ)とする」③一家。家。*本朝文粹一四・為左大臣息女女御四十九日願文(大江朝綱)「念一家之子孫、附門戸於其願」*性靈集一八・大夫左衛佐為亡室造大日積像願文「蛙々之羽滿門戸、阒々之葉滋庭陰」*読本・雨月物語「吉備津の釜、香央は此国の貴族にて、我は氏なき田夫なり。門戸(もんこ)敵すべからねば」*蜀志「張裔伝」為之娶婦、買田宅產業、使立門戸。④自分の流儀。一流一派。*俳諧・春泥句集一序「いにしゑより俳諧の數家各々門戸を分ち風調を異にす」*随筆・淡窓詩話一叙「川田剛」就宋元以下話數百部「歷舉其病、日爭門戸、日術才学、日穿鑿字義」〔発音〕〔標ア〕〔京ア〕〔古〕〔書〕〔易〕〔林〕〔書〕

もんこん(門圃)

古今著聞集 P 73, L 10

編者注 岩波古典大系『古今著聞集』頭注には、門圃(門のしきみ)か。三本は「門圃(トシキミ)か。版本は「門圃」で、しきいの意」とある。

もんこん【門圃】〔名〕(「圃」は、しきいの意)門のしきい。門の戸のしきり。*教化之文章色々、治歴三年内御仏名「三聖門圃に臨みたまへり」*私聚百因縁集六・五「其時大王の門圃に良医来りて」

とじきみ【戸闔】〔名〕①門の内外、部屋の内外を仕切るために下に敷いた横木。しきみ。しきい。とじき。*書紀「推古一二年九月(岩崎本訓)「凡そ宮門(みかど)を出(まか)で入(まる)らむときは、両つの手を以て地を押し、両つの脚をもて跪きて、欄(トシキミ)を越えて、立て行け」*靈異記一・中・二八「明日戸を開きて見れば、門(トジキミ)の前に錢四貫有り」国会図書館本訓釈 圃 土自支彌」*十卷本和名抄一三「闔 爾雅注云闔入音域」門限也兼名苑云闔一名圃入苦本反 之歧美俗云度之歧美」*枕三二正月一日は「中御門のとじきみ引きすぐる程」*観智院本名義抄「闔

トジキミ」②(「軾」とも)牛車(ぎつしや)の部分の名。車の前の口の下に、横にわたした仕切り板。高欄(こうらん)。*十卷本和名抄「三軾 軾附 説文云軾(音式)車乃土之歧美(音式)車前也 字苑云軾(音式)之忍反 俗作軾(音式)車後横木也」*枕「三〇二・二二月廿四日、宮の御仏の名の「指貫(さしぬき)の片つかたはとじきみのもとに踏み出したるなど、道に人にあひたらば、をかしと見つべし」[発音]〈標ア〉㊦(ア史)平安●●●〇〇(京ア)㊦ [古辞書]和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・天正・黒本・易林・書言

ヤ行

や(屋)

宇治拾遺物語 P 241、L 13・P 440、L 16

古今著聞集 P 328、L 2・P 337、L 7・P 469、L 12

や【屋・家・舎】■【名】①いえ。家屋。住居としての建造物や、これに準ずるものとして、家畜を飼つたり物を貯蔵したりするための建造物などをも含めていう。*万葉一四・三四六〇「誰そ此の屋(や)の戸押(お)そぶる新嘗(にふなみ)に我が夫(せ)をやりて齋(いは)ふ此の戸を(東歌)」*東大寺諷誦平安初期点「畢俊は寺側に舎(ヤ)を作て老母を求育す」*源氏夕顔「その屋には女ひとり泣く声のみして」*宇治拾遺「一三・一〇」さまざまのやども作り続けて人多くさわがし」②建造物の主要部分としての屋根をさす。*竹取「屋の上には糸を染めて色々葺(ふ)かせて」*枕八九・なまめかしきもの「いと新しからず、いたうもの古(ふ)りぬ檜皮葺(ひはだぶき)のやに、長き菖蒲(さうぶ)をうるはしう葺き渡したる」*今昔「二六・四」月影の、屋の上の板間より漏りたりけるに」■【語素】①名詞について、その物をそろえて売買する人や家を表わす。また、これに準じて他の業種についてもいう。「米や」「さかなや」「葉や」「もちやそびや」「植木や」「ぶりきや」「質や」「はたごや」など。②軾じて、それを専門としている人をさしている。ふつう、軽蔑(けいべ)つ、または自嘲(じちよう)の意を込めて用いる。「政治や」「物理や」など。③種々の語について、そのような人を軽蔑し、ののしって呼ぶのに用いる。「わからずや」「やかましや」「気どりや」など。④商家、旅館、料理屋などの屋号として用いる。「越後や」「紀の国や」「丸や」「鈴や」など。⑤役者文人などの雅号として用いる。「音羽や」「鈴のや」など。[語源説]①重なる意で、イヤ(彌)の義(名言通・和訓栞・俚言集覧(音)・大言海)。②ヤドルの意(日本釈名)。③ユカの反、またイタの反(名語記)。④より合う意で、ヨラの約(和訓集説)。⑤我家で心安いところから、ヤスキの略か(和句解)。(6)神霊の降下を示すために地表に突立てた一本の巨大な柱である、ヤ(矢)を中心にして家屋が建てられたところからか(古典と民俗学・高崎正秀)。[発音]■は(標ア)㊦(ア史)ヤー 平安〇●●鎌倉●●江戸〇〇(京ア)ヤー㊦ [古辞書]和名・色葉・名義・黒本・書言

やかた(屋形)

古今著聞集 P 309、L 9

やかた【屋形・館】■【名】①舟の上に設けた屋根のある家の形をしたもの。ふなやかた。*万葉一六・三八八八「奥つ国領(うしは)く君が染屋形(ぬりやかた)黄染の屋形(やかた)神が門渡る(作者未詳)」*枕「三〇六・六日のいとうらかなるに「やかたといふもののかたにておす。されど、奥な

るはたのもし。端にて立てる者こそ目くるる心地すれ」*太平記「長崎新左衛門尉意見事「汀近く成ければ、船頭船より飛下て、児を肩にのせ、山臥の手を引て、屋形(ヤカタ)の内に入りたれば」②牛車や腰車などの上につくった家の形の覆い。*延喜式「七・内匠寮「腰車一具。屋形。八長六尺。広五尺」(略)牛車一具。屋形。八長八尺。高三尺四寸。広三尺二寸」*十卷本和名抄「三・車蓋 轅附 大戴礼云車盖俗車屋形 夜賀太廿八轅以象列星也」*枕「四五・にげなきもの」月のあかきに、屋かたなき車のあひたる。また、さる車にあめ牛かけたる」*観智院本名義抄「車蓋 ヤカタ」④かりそめに構えた家。また、かりの宿所。かりや。寓居。*古今大歌所御歌・一〇七二「水ぐきの岡のやかたにいとあれとねてのあさけの霜の降りほも(よみ人しらず)」*平家九・坂落「村上判官代康国が手より火を出し、平家の屋形・かり屋をみな焼払ふ」*広本拾玉集「二・雨はれぬ旅の屋形に日数へて都恋しき浮雲の空」④貴人や大名・豪族、有力武士などの邸宅。また、宿所。たち。との。*源平盛衰記「二・千葉足利催促事「弘経屋形(ヤカタ)に帰つて云ひけるは、此の佐殿は、一定日本の大将に成り給ふべし」*太平記「一・筑紫合戦事「後攻の勢には目を懸ずして、探題の屋形(カタ)へ責め入り」*史記抄「九・孝武本紀「諸大名の屋形を八町柳に作りならへたと云ぞ」⑤貴人を敬つていう語。また特に、中世、屋形号を許された大名の称。

*蔗軒日録「文明一八年二月一〇日」来十四日永興忌、同萱簾公状至云、屋形要「予之赴忌斎拈香以予之拒辞停止」*甲陽軍鑑「品一〇」あれほど強屋形の、しかも御年末三十にも足給はぬに」*俳諧・一茶日記断片「文化五年七月「君と頼る屋形の仰もだしがたくやありけん」⑥「やかたぶね(屋形船)の略。*雑俳・口よせ草「だまつて居・我声色を聞く桜舟(ヤカタ)」*洒落本・辰巳之園「ゆふへも、屋形(ヤカタ)に、能のか有から、いたりや、手ふりあみ笠になった」*歌舞伎「早苗鳥伊達聞書「実録先代萩」「二幕「其頃名高い汐留の山崎屋で新造に高尾丸といふ屋形(ヤカタ)が出来」⑦芸娼妓の住んでいる家または置屋。*洒落本・当世空言の河「三・館(ヤカタ)「芸子妓の内を館(ヤカタ)といふは当時の流言也」*狂乱(近松秋江)「今日あの子もちよつと屋形(ヤカタ)へいとります」⑧家の形状を図案として表わした紋所または模様。屋形紋。*随筆・遠碧軒記「上・一「伊勢内宮の紋は屋形なり」⑨「やかたちりめん(屋形縮緬)の略。*万金産業袋「四「縮緬(略)三丈七八尺より四丈、そのうへも有を、俗に八形(ヤカタ)といふ」方言①家、または家の構え。

新潟県東蒲原郡415 ②祠(ほこら)。奈良県吉野郡十津川674 ③墓の上におおつておく家形のもの。三重県北牟婁郡須賀利044 ④小屋。あばらや。伊豆八丈島335↑14 ⑤仕掛花火。静岡県島田562 〔語源〕(1)ヤカタ(家処)の義(大言海)。 (2)屋形の義(松の落葉・名言通・国語の語根とその分類「大島正健」)。 (3)船の上屋のヤカタ(蘆舎形)から(俗語考)。 (4)ヤカマヘタカ(家構高)の義(日本語原学「林瓊臣」)。 (5)ヤケ(宅)の語から(「万葉集辞典「折口信夫」)。 〔発音〕(標ア)㍻㍺ (ア史)鎌倉○○● (京ア) ⑩ 〔古辞書〕和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・明応・天正・饅頭・易林・書言

やしろ(社)

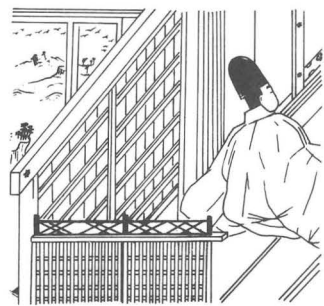
宇治拾遺物語 P 340、L 3・P 415、L 13

やしろ【社】(名)「屋(やし)代(しろ)の意」①神の来臨するところ。古くは地を清めて壇を設けて神をまつる一定の場所をいった。*古事記「中(兼永本訓)「天神(あまつかみ)の地祇(くにつかみ)

の社(ヤシロ)を定(さだ)め奉りたまひき」*万葉一三・四〇五「春日野に粟まけりせば鹿(し)侍ちにて継ぎて行かましを社(やしろ)しうらめし(佐伯赤麻呂)」②神をまつる殿舎。神社。*十卷本和名抄「地神 周易云地神日祇(巨支反) 日本紀私記云久邇豆夜之路」*枕一三四三社は「やしろは布留のやしろ、生田のやしろ」*源氏一玉鬘「ちかきほとにやはたの宮と申はかしこにてもまゐりのり申給しまつらはこさきおなしやしろなり」*大鏡一・二・実頼「よろづのやしろに額のかかりたるに」*法華經音訓(廟(メウヤシロ)) 語源説(1)屋代の義か(名語記 和句解 日本釈名・東雅・万葉集類林・類聚名物考・萍の跡 雅言考・名言通・氏神及び「やしろ」折口信夫・大言海・田社考大要 柳田国男・ことばの事典「日置昌」)。家代の義(俚言集覽・和訓栞)。(2)神の屋をたてる一構の地の義(松屋筆記)。(3)ユニハシロ(忌庭代)の義(日本語原学 林夔臣)。(4)ヤヒロ(八尋)の転(南窓筆記)。(5)屋実の義(箋注和名抄)。(6)イヤシロ(敬城)の上略(紫門和語類集)。(7)ミヤシロ(宮代)の義(言元梯)。(8)ヤシロ(陽代)の義(和語私臆鈔) 発音(標ア)㊦(ア史)江戸㊦㊦(京ア)㊦(京ア)㊦ 古辞書字鏡 和名・色葉・名義・和玉・文明・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

宇治拾遺物語 P 76、L 9・P 167、L 13・P 167、L 17・P 347、L 12・P 347、L 14
古今著聞集 P 429、L 13・P 455、L 6・P 470、L 10・P 472、L 5

やりど【遣戸】(名) 敷居と鴨居の溝にはめて、左右にあけたする戸。引戸(ひきど)。*落窪一「やり戸を引きあげ給ふより、の給ふやう」*枕一八・にくきもの「やり戸をあらくたてあくるもいとあやし」*東寺百合文書を・宝徳三年一〇月七日・波方寿阿彌華藏庵建具等注文(大日本古文书六・二四三)「たたみ六てうやり戸二間々半」 語源説「戸は押やり、つきやるものであるところから(類聚名物考)。ヤリド(遣戸)の義(名語記)。横に引きやるところからいか(後松日記)」。発音(標ア)㊦㊦(ア史) 江戸●●○(京ア)㊦



遣戸(源氏物語絵巻)

古辞書 色葉・下学・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言
ゆどの(湯殿)

宇治拾遺物語 P 140、L 6・P 141、L 1

ゆどの【湯殿】(名) ①浴場。風呂場。浴室。おゆどの。*発心集一八・四条宮半者咒咀人為乞食事「かの北の方湯殿(ユドノ)におりたりける時」*太平記一三・北山殿謀叛事「西の京より番匠数(あま)た召寄て、俄に湯殿(ユドノ)をぞ作られける」*地藏菩薩靈驗記一・二三「次の日に浴殿(ユドノ)に入らせ給ひき」*妻(田山花袋)三三「勝手隣の湯殿があつた」②入浴すること。湯あみすること。*宇津保国譲下「御ほそのを切りて、ゆ殿参る」*大唐西域記長寛元年点一四「如来、在昔、此に於て澡浴(ユドノ)マナリキ 別訓(みをすまし)」③貴人の入浴の時、そば近くにいて奉仕すること。また、その役の女性。おゆどの。*御伽草子・鉢かづき「今更むかしを思ひいだして、人にこそゆどのさせつれ、人のゆどのをばいかがするやらんと思へども」 二「ゆどのさん

(湯殿山)の略。*俳諧・奥の細道「出羽三山」語られぬ湯殿にぬらす袂かな。*咄本「聞上手」富士山「おらは又ゆどのも大峯も登つて見たけれど」方言①台所。勝手。鹿児島県973 ②便所。徳島県祖谷805 熊本県玉名郡945 ③大便所。広島県高田郡755 発音(なまり)イドノ(伊賀・島根)イドン(大隅)イノド(伊賀)ユウドン(淡路)ユドロ(岩手)ユドン(岩手・島根・大隅) 標ア ア史江

ラ行

らんかん(欄干)

古今著聞集 P 502、L 5

らんかん【欄干・欄檻・闌干】(名) 橋または縁側・階段などの側辺に、縦横に木を渡して人の落ちるのを防ぎ、また装飾とするもの。てすり。おぼしま。*太平記「八・谷堂炎上事」十二の欄干(ランカン)珠玉天に撃(さ)げ、五重の塔婆金銀月を引く。*虎明本狂言「茫茫頭」橋のらんかんによりかかり。*中華若木詩抄「中」春風が牡丹のある欄檻を、うちはらひて。*後漢書「爰延伝」帝曰、昔朱雲延折「欄檻」、今侍中面称「朕違」。 発音(なまり)タンカン(鳥取)ランカ(秋田・愛知・大阪・紀州・鳥取・島根・岡山・広島県) 標ア 回 京ア 回 古辞書下学・文明・伊京・明応・饅頭・黒本・易林・書言

ろう(廊)

宇治拾遺物語 P 269、L 14・P 327、L 12・P 493、L 10・P 493、L 13

古今著聞集 P 318、L 9・P 456、L 11・P 468、L 17

ろう【廊】(名) 建物と建物を結び、あるいは建物から突出した細長い建物。また、寺院の回廊。ほそどの。わたどの。回廊。廊廡(ろうぶ)。*大安寺伽藍縁起并流記資財帳「天平一九年(寧楽遺文)「合廊老院」*宇津保俊隆「この殿は、檜皮(ひはだ)の大殿(おとど)五、らう、渡船、さるべきあてあての板屋どもなど」*読本「春雨物語」笑嗔下「軒をはなれしかど、廊めぐらせてかよふと見ゆ」*韓偓「倚醉詩」抱「柱立時風細細、繞「廊行処思騰騰」 発音ロー 標ア 回 京ア 回 古辞書色葉・易林・書言 ↓ろう(字音語素)

ろう(樓)

古今著聞集 P 311、L 8

ろう【樓】(名) ①高く作った建物。二階建ての建物。高殿(たかどの)。高樓。樓閣。樓門。*続日本紀「宝龜八年九月丙寅」太師押勝起「宅於楊梅宮南、東西構「樓、高臨」内裏」。*延喜式「四二・東西市司」凡決「罰罪人」者、官人「与」使相「对楼前」罰之。*宇津保「楼」上上「二つのろう、たげよきほどにうち、高からぬほどにたちまちに造るべし」*観智院本「三宝絵」上「是の時に、母后き宮に留りて、高き楼の上へに寝たり」*百座法談「三月七日」仏の口使にあはじとてたかき楼(ロウ)にのぼりぬ。*羅生門(芥川龍之介)「羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に」*王粲「登楼賦」登「茲楼」以四望兮、聊「飯」日以銷「憂」 ②遠くを見るために城などに作る高い櫓(やぐら)。ものみやぐら。望楼。*十卷本和名抄「三」櫓 唐韻云櫓「音魯」内典云却敵楼櫓 夜久良舟具作艣(城上守禦楼也) *墨子「備城門」三十步置「坐候楼、楼出」於堞「四尺、広三尺、長四尺」 ③遊女と遊

興することのできる店。青楼。上方では揚屋や茶屋をさし、江戸では岡場所などに対して、官許の吉原遊郭の遊女屋をいった。* 雑俳・咲やこの花「楼高くかぶろに腰をうたせけり」* 雑俳・類字折句集「楼へ上つて来たと茶を呑む」* 随筆・北窓瑣談「前・一「鐘木町も年々に衰へ、笹屋の楼も段々に毀ち売り」* 当世書生氣質「坪内逍遙」七「彼の一夜妻に逢はまく思はば、宜(よろ)しく只管(ひたすら)に色を愛(め)で、色専一に目的として、楼(ロウ)に登るこそ当然なれ」二「接尾」高い建物、料亭・旅館、また、妓楼などの名の下に添えて用いる。〔発音〕ロー一は(標ア)回

ろうもん (樓門)

古今著聞集 P 398、L 13

ろうもん 【樓門】〔名〕二階造りの門。現在では、下層に屋根のある門を二重門と呼ぶのに対して、特に、下層に屋根のない二階造りの門をいう。* 西大寺資財流記帳「宝龜一年(寧楽遺文)」「東西樓門」二基* 太平記九・六波羅攻事「三千余騎にて寄懸たり。楼(ロウ)門近く成ければ」* 読本・雨月物語「青頭巾」「山院人」とどまらねば、樓門(ロウモン)は荆棘(うばら)おひかかり」

〔発音〕ローモン (標ア)回 (京ア)回 〔古辞書〕下学・文明・饅頭・易

林・書言

ワ行

わたどの (渡殿)

古今著聞集 P 309、L 15・P 505、L 8

わたどの 【渡殿】〔名〕二つの建物をつづける屋根のある板敷きの廊下。渡り廊下。この廊に部屋を設けたりもする。細殿(ほそどの)。わたりどの。* 宇津保俊蔭「この殿は、檜皮の大殿五、廊、わた殿、さるべきあてあての板屋どもなど、有るべきかぎりにて」* 源氏桐壺「打橋、わたどののこかしこのみちに、あやしきわざをしつつ」* 浄瑠璃・平家女護島・一「渡殿(ワタドノ)に足音して能登の守教経、わっぱの菊王相具しつと入り」〔発音〕(標ア)回 〔古辞書〕書言



樓門(奈良県般若寺)

塀・垣

ア行

おおがき (大垣)

宇治拾遺物語 P 370、L 13・P 371、L 1・P 371、L 2

おおがき おほ：【大垣】**名** ①居宅などの周囲の大きな垣。築地(ついで)などを用う。外囲い。

総がこい。*源氏賢木「ものはかなげなる小柴垣(こしばがき)をおほがきにて、板屋ども、あたりあたり、いとかりそめなり」*栄花「うたがひ」方四丁を廻りておほかきして、瓦(かわら)葺

(ふ)きたり」*古本説話集「二八」二条より西さまに、おほがきに沿ひていくほどに」②「おおがき(大垣)の刑に同じ。③牧場の周囲に作る垣。

力行

かいだて

宇治拾遺物語 P 200、L 1

かいだて 【垣楯・搔楯】**名** (「垣楯(かきだて)」の変化した

語) 城、陣地などに、敵の矢を防ぐために楯を垣(かき)の

ように立て並べたもの。*平家四・三井寺炎上「寺にも堀ほり、かいだてかき、さかも木ひいてまちかけたり」*平治中・義朝敗北の事「信頼・義朝のおつるなる、うちとめん

とて、龍下越(りうげごえ)にさかもぎ引き、搔楯(かいだて)かいてまち懸けたり」*太平記「一五・正月二十七日合

戦事、敵の駆けんとする時は、此の楯(たて)の懸金(かけがね)を懸け、城の搔楯(カイダテ)の如く一二町が程につき

并(なら)べて、透間(すきま)より散々に射させ」*日葡辞書「Caidateno(カイダテラ)サカウ(訳)自分たちと敵の間

に堡壘を置く。カイダテラ カク、または、アグル(訳)前項に同じ」**発音**(標ア)①(ア史)江戸

●○○(京ア)②(古辞書)文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

かき(垣)

宇治拾遺物語 P 441、L 3

かき 【垣・牆・牆】**名** ①屋敷、庭、その他一区画を限る囲いとして設けるもの。土、石、竹、木などを

用いて作る。かきね。かきほ。*古事記上「汝等は八塩折の酒を醸(か)み、亦垣を作り廻し、その垣に八門を作り」*新訳華嚴經音義私記「為牆 牆 可岐」*天理本金剛般若經集驗記平安初期点

「若し北に行かば、数十歩ばかりして一の牆(カキ)に至らむ」*源氏須磨「おはすべき所は、行平の中納言の、もしほたれつつわびける家居近きわたりなり。(略)かきのさまよりはじめて、めぐ

らかに見給ふ」*観智院本名義抄「城 サカヒ カキ」*浮世草子・男色大鑑「一・目録「牆(カキ)の中は松楓柳は腰付」②歩廊、または室内を仕切る障子、ついたての類。③「かきたつ(垣立)」に同

じ。*瀬戸流秘書「関船作り様之次第」垣之高きは、船之深さ同前」④紋所の名。図柄に①を用い



垣楯(蒙古襲来絵図)

たもので、唐檜垣、玉垣、常盤垣、竹垣等種々ある。

〔語源説〕(1)カク(構)の名詞形(大言海)。(2)カギリ(限)

の略(日本釈名・東雅・古事記伝・和訓考・言元梯・名言通・碩鼠漫筆・和訓栞・言葉の根しらべ・鈴江潔子)。

(3)カコヒの約(万葉代匠記・俗語考・家屋雑考)。(4)カ

コミ、又はカクミの約(俚言集覽)。カコムの名詞形

〔国語の語根とその分類〕大島正健)。(5)カコヒキ(囲

木)の義(日本語原学・林夔臣)。(6)キはカチの反(名

語記)。(7)カゲ(陰)の転声(和語私臆鈔)。

〔発音〕な

まり)カーキ(紀州・淡路)カーク(石手)カケ(伊賀・南伊勢・大和・紀州・和歌山県)〔標ア〕因(ア史)

平安・鎌倉●○(京ア)因〔古辞書字鏡・和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・明応・天正・饅頭・黒本・

易林・書言

きりかけ(切懸)

宇治拾遺物語 P 253、L 3・P 253、L 14

きりかけ【切掛・切懸】名 ①切る動作を途中まですること。また、そのもの。②目かくし、あるいは

は羽目板の一種。横板を羽重ねに張ったもの。*大和

一四三坊にしけるところのまへに、きりかけをなむせ

させける。*玉葉(承安二年閏二月二日)「切懸者、

昔は不立柱、仍不忌之、今世雖堀立大柱、依云

切懸之名号、不忌之。*春記(長暦四年八月一日)

「先例以黒木奉作之、其上葺板其廻用切懸也。*法隆

寺舍利殿下見板墨書(永享二年二月二三日)「今此切懸

新造之奉行衆(寛清弁祐) ③江戸前期の北国地方の

主力廻船である北国船やませ船で、通常の和船の上棚

に相当する棚板の呼称。*田名部海辺諸湊御定目(諸

湊地他着船御役付「北国船略)腹八丁板之端揃にて切

懸につき付」④幣束(へいそく)につける紙垂(かみし

で)。⑤武具。幣束に似た指物(さしもの)の名。⑥魚

などを包丁で調理する方法の一つ。*節用料理大全(海川魚類庖丁指南(古事類苑・飲食四)「切か

けとは、三枚におろして、いか程にも切りて、身の方を四五分計にも、四方に包丁めを付て切か

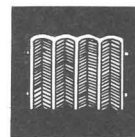
ける事也」〔発音〕(標ア)㊦

夕行

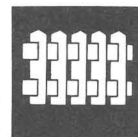
たてじとみ(立葩) ↓しとみ

古今著聞集 P 114、L 9

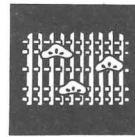
たてじとみ【立葩・豎葩】名 宮殿に付設する移動用の地上の障屏具の一種。格子造(こうしづく



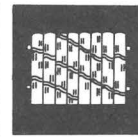
唐檜垣



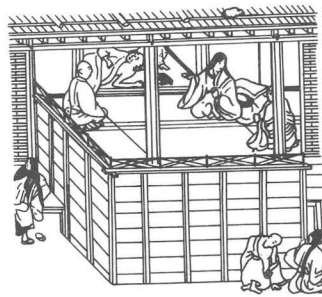
玉垣



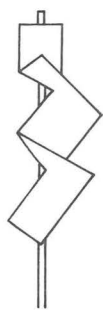
常盤垣



竹垣



切掛②
〈春日権現験記絵〉

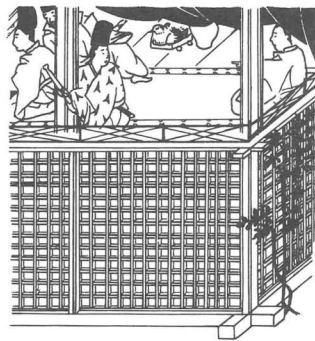


切掛⑤
〈武用弁略〉

り)の部に土台をつけて庭に立て、外部から室内を見
すかされないためとした。*枕「三正月一日は」た
てじとみなどのみゆるに、主殿司、女官などのゆき
ちがひたるこそをかしけれ」*源氏「野分」檜皮、瓦、
所所のたてじとみ、透垣などやうのもの、乱りがは
し」*宇治拾遺「一五」をひをの、ほらかい腰につけ、
錫杖つきなどしたる山臥の、ことごとしげなる入き
て、侍のたてじとみの内の小庭に立けるを」*浄瑠

璃「用明天皇職人鑑」四「扱こそしれ者よき時節とたて部(ジトミ)のかげにより」

〔発音(標ア)〕



立部(石山寺縁起絵巻)

ついがき

古今著聞集 P 112、L 5・P 202、L 6

ついがき【築垣・築牆】「名」(古くは「ついかき」。「つきかき(築垣)」の変化した語)「ついにじ(築地)①」に同じ。*十卷本和名抄「三」築牆 淮南子云舜作築牆入都以加岐「云豆以比知」*書

陵部本名義抄「築垣 順云和名都以加岐」*山家集「下」齋宮、木立ばかりさか見え、ついがきもなきやうになりたりけるを見て」*愚管抄「五」後鳥羽「なのめならぬ大地震ありき。古き堂のまろばぬなし。所々のついかきくづれぬなし」*浮世草子「近代艶隠者」二「五」薪(をどろ)に薄

(すすき)結(ゆい)ませし築垣(ツイガキ)したる家あり」〔発音〕ツイガキ(音史)室町末頃まで「ついかき」、近世は「ついかき」「ついがき」の両形。〔標ア〕①(ア史)平安 ●●●●(京ア)①〔古辞書字

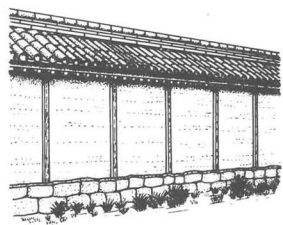
鏡・和名・色葉・名義・易林・書言

ついにじ(築地)

宇治拾遺物語 P 113、L 10・P 128、L 3・P 225、L 8・P 241、L 11・P 242、L 2・P 244、L 3・P 413、L 8・P 414、L 12・P 440、L 8

古今著聞集 P 274、L 9・P 275、L 4・P 328、L 1・P 344、L 16・P 424、L 3・P 427、L 3・P 427、L 7・P 468、L 11・P 469、L 12・P 472、L 15・P 492、L 11

ついにじ っいぢ【築地】「名」「ついにじ(築地)」の変化した語)①土で造った垣根。両側に板を立て、内に土をつめ、つき固めて造った塀。須柱があるものとなないものがある。土塀。築地塀。築垣。築地垣。築地回り。*竹取「ついでちのうへに千人、屋の上に千人、(略)空ける隙もなく守らす」*枕「二七・人にあなづらるるもの「ついでちのくづれ。あまり心よしと人にしられぬる人」



築地①(奈良県法隆寺)

*源氏「須磨」なが雨に、ついでち所々崩れてなむときき給へば」*日葡辞書「Jung. (ツイヂ) (訳)土塀」②(大規模な築地塀をめぐらしているところから)御所、または堂上方・公卿の邸宅。また、

公卿。堂上方。*浄瑠璃・菅原伝授手習鑑「三」御恩は上なき築地(ツイヂ)の勤。三人の其中に桜丸が身の幸、人間の種ならぬ竹の園の御所奉公」〔方言〕①石を積み上げた所。石垣。埼玉県秩父 242

東京都八王子 280 神奈川県津久井郡 286 伊豆大島 304 山梨県 508 静岡県磐田郡 568 但馬 648 島根

県那賀郡 723 広島県山県郡 044 (ちいじ) 群馬県多野郡 240 隠岐知夫郡 726 (ついじかけ) 長野県下
伊那郡 533 静岡県榛原郡 566 ②屋敷のめぐりに松を植えた防風壁。島根県簸川郡 974 [発音] (な
まり) ツジ(島根) (標ア) ① (ア史) 江戸 ●●● (京ア) ① [古辞書] 下学・文明・伊京・明応・天正・饅
頭・黒本・易林・書言

八行

ひがき(檜垣・檜垣)

宇治拾遺物語 P 106、L 16

古今著聞集 P 278、L 4・P 328、L 2

ひがき【檜垣・菱垣】■(名) ①檜(ひのき)の薄板を網代のように編んだ垣。昔、築地(ついじ)な
どより簡便な家の外構えとしたもの。*宇津保

「藤原の君」しばつち、あみたれじとみ、めぐり

はひがき、ながや一、さぶらひ」*源氏・夕顔

「此の家のかたはらに、ひがきといふもの新しう

して」②「いがき(斎垣)」に見たてた「いがき

(囲垣)の変化した語)兜(かぶと)の鉢。③衣

服の様子の一つ。①の編み目に似たもの。*親

元日記「寛正六年八月二日」御すわう地白地も

んにひかきをかちんに、葛のはを乱もんに、も

えき御はかま」④江戸・大坂間の海運に活躍した菱垣廻船の垣立の下部構造をいう語。一般廻船

が大筋と五枚筋で構成する所を檜の角材で菱組の格子状にしたもの。菱垣廻船問屋所属船である

ことを示すための特徴的な構造。*今西氏家船繩墨私記「坤」菱垣は舳の扇立より艫の大立まで、

垣台上老尺程菱に組む故、菱垣と言」*菱垣廻船問屋規録「依之協之浜積船は菱垣船之代船に相

成候目印に、表へ如当時、菱垣を付け、菱垣廻船より同様に御座候て、外廻船と紛不申事に御座

候」⑤「ひがきかいせん(菱垣廻船)」「ひがきぶね(菱垣船)」の略。*和漢船用集「四・海船之部」檜

垣(ヒカキ)摂州大坂廻船問屋の仲間船を云」*雑俳・俳諧鱸五「小角力もひねる菱垣の船子ども」

*歌舞伎・阿国御前化粧鏡「大切」檜垣(ヒガキ)に乗ったと落ちついてござりませ」■(檜垣)能楽

の曲名。三番目物。世阿彌作。観世・宝生・金春・金剛・喜多の各流に上演される。肥後国岩戸山に

住む僧のもとに、毎日百歳近い老女があかの水をくんで訪れる。僧がその名を尋ねると、檜垣

という白拍子であると名乗り回向を頼んで姿を消す。僧が庵の旧跡を尋ねると女の亡霊が現われ

て、昔、藤原興範(おきのり)に所望されて水をくんだ有様を再現し、白拍子としての思い出の舞

をまっして回向を頼む。最も秘曲とされている三老女の一つ。*三道「大よそ、三体の能懸り、近来、

押し出だして見えつる世上の風体の数々、(略)浮船、ひがき、小町、此の如き女体」[発音]ヒガキ

(標ア) ① (京ア) ② [古辞書] 色葉・下学・文明・饅頭・易林・書言

マ行

まがき(籬)



檜垣①
(春日権現験記繪)

古今著聞集 P 142、L 17

まがき【籬】〔名〕①竹や柴などで目をあらく編んだ垣。ませ。ませがき。まがきね。*書紀―継体六年二月(前田本訓)「国毎に、初めて官家(みやけ)を置いて、海表の蕃屏(マカキ)と為て、其の来ること尚し」*万葉四・七七七「吾妹子が宿の籬(まがき)を見に行かばけだし門より帰してむかも(大伴家持)」*二十卷本和名抄一〇「籬 柵字附 积名云籬(音離字亦作籬 和名未加岐 一云末世)以柴作之言疎離也」②遊郭の見世(みせ)と、その入口の落間(おちま)との間の格子戸(こうしど)。*浄瑠璃・世継曾我一「折しも少将まがきに出、よくぞよくぞなたへと常の座敷に伴なひて」*雑俳・昼礫「売残る遊女籬のさらしもの」③「まがきやく(籬役)の略。*洒落本・窃潜妻一上「わたしがうけ合ますと伊賀守の奥方とまがきとの二役なるところ」④「まがきぶし(籬節)」の略。【語源説】(1)間垣の義(名語記・言元梯・名言通・和訓栞・本朝辞源・宇田甘冥・大言海)。(2)マヘガキ(前垣)の略か(万葉代匠記・日本积名・北辺随筆・和訓栞)。(3)ウマセ垣の略か(北辺随筆)。(4)メカキ(目垣)の義(名語記・日本語原学・林夔臣)。(5)馬垣の義(箋注和名抄)。「発音」マカキ(標ア)〔ア史〕平安・鎌倉〇〇(京ア)〇【古辞書】和名・色葉・名義・和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・書言

ませ

古今著聞集 P 142、L 16・P 253、L 1・P 502、L 1

ませ【籬】・馬柵・馬塞・間狭【名】①(籬) 竹や木で作った目の粗いかきね。ませがき。まがき。*十卷本和名抄二「籬 柵字附 积名云籬(音離字亦籬末加岐 一云末世)以柴作之言疎離也」*枕一六一・故殿の御服のころ「前栽に萱草といふ草を、ませ結ひていとおほく植ゑたりける」*名語記一五「前栽にたつるを、ませとなづく、如何。答、ませは、欄也。馬をいれじとふせぐ垣の義也」②(馬柵・馬塞) 放牧場などで、馬が外に出ないように横木を渡して作った垣。また、馬小屋の入口に渡した横棒。うませ。*雑俳・太箸集一五「ませがはづれ昼連立て歩行れる」*塩原多助一代記(三遊亭円朝)一〇「田舎では厩の前にませと云ふ丸太があります」③(間狭) 劇場の柵席で、柵と柵の仕切り。二寸角ほどの框(かまち)を渡しておき、狭いが通り道の代用にもする。*滑稽本・客者評判記下「間狭(マセ)をはづして御一所になりませうと」*雑俳・柳多留一「五五」聖天の身でみをかわず土間のませ」【方言】①放牧場の入口の横木。秋田県・東京都西多摩郡・新潟県・長野県・静岡県 016 ②馬小屋の入口の横木。秋田県雄勝郡 154 神奈川県津久井郡 283 新潟県中頸城郡 426 富山県 432 飛騨 539 静岡県磐田郡 568 ③馬小屋の出入口。静岡県周智郡気多 044 【語源説】(1)間塞の義(大言海)。(2)間狭の義(家屋雑考・紫門和語類集)。(3)馬塞の義(万葉考・言元梯・大言海・日本語源・賀茂百樹)。(4)ムマサエまたムマサケ(馬礙)の反(名語記)。「発音」(標ア)〔ア史〕①は平安〇〇(京ア)〔古辞書〕字鏡・和名・色葉・名義・和玉・伊京・饅頭・黒本・易林・書言

若江遺跡発掘調査報告書 I

文 献 編

1982年 3月31日

発行 東大阪市遺跡保護調査会

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所